

平成の
大みみうたを
仰ぐ

社 国民文化研究会 編

展転社



即位礼正殿の儀の後、祝賀御列の儀に臨まれるため宮殿
をご出発になる今上陛下・皇后陛下(平成2年11月12日)

はしがき

亜細亜大学名誉教授 夜久 正雄

天皇、皇后両陛下のお歌が、元日の新聞紙上に発表されるといふことは、今ではもう当然のことと思はれてゐて、各新聞とも特別な関心を寄せる風ではない。発表される御製、御歌の全部を載せる新聞が少いばかりか、それについての識者歌人の研究なり感想なりが、大新聞に載ることなどはほとんど見られない。

しかし、ふり返ってみると、御製の元日新聞発表には深刻な歴史があることがわかるし、その発表のもつ意味はかりそめではないと思はれる。

昭和天皇の「歌会始」以外のお歌が元日の新聞に載るやうになつたのは、敗戦後、GHQ占領下、昭和二十一年からのことであつた。このことに特に努力したのは『宮中見聞録』の著者、故木下道雄先生であつた。先生の『側近日誌』の、「昭和二十年十二月二十九日(土)晴」の記事に次のやうに書かれてゐる。

「12時30分、宮内記者会と会見、両陛下の事に關し大臣の話を補足す。御製を発表す。

海の外の 陸くわがに小島をしまにのこる民のうへ安かれと たいいのるなり」

実は、後に木下先生が『宮中見聞録』に記された「終戦時の御製」は次の四首であるが、ここではその初めの三首がなく、四首目のはじめの句を少しお変へになったお歌であった。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

外国とつくにと離れ小島にのこる民のうへやすかれとたいいのるなり

当時侍従次長だった木下道雄先生は、GHQ占領下にも、昭和天皇のお心を何とかして国民に伝えたいと願って、右の四首の御製を公表したいと必死の努力をされた。しかし四首の公表はできないで、その最後の一首だけを、少し語句をかへて、元日新聞への発表がはかられたのである（しかしこの一首の御製は二十一年元旦の新聞には出なかったらしい。私たちの記録では一月二十一日の新聞発表となつてゐる）。

元日新聞の御製発表が恒例となつたのは、平和克復後、昭和二十八年からといふ。その後、皇后（現皇太后）陛下の御歌も同時に発表なさるやうになつた。

昭和天皇はこのことを欠かせられることなく、昭和六十四年（一月七日崩御、以後平成元

年)の元日の新聞にも御製を御発表になったが、またその年の「歌会始」(御題・晴)にも御重病の御床に御用意なされたのである(この「晴」の御題は平成二年の「昭和天皇を偲ぶ歌会御題」として継承された)。

かうして時代は平成に移ったが、今上天皇は平成二年元日の新聞にも、五首の御製を御発表になり、昭和天皇の和歌についてのお考へを継承なされたのである。

毎年の元日に天皇、皇后両陛下のお歌にふれることが出来ること、それがどんなに大きなよろこびであったか、そのお歌によって、私どもが敗戦でうちひしがれた日にあつて、どんなに大きな力を得て国の復興に立ち上り努めてきたか、今そのことをしみじみと思ふ。

日本の国がらの中心をなす天皇と国民の心の通ひあひ、それは国民が天皇のお心を知ることとに尽きると思ふのだが、その天皇のお心を知ることのできる最も確実な道は、天皇のお歌をよむことであると私どもは信じてゐる。勿論それは知りつくすことのできない道である。しかし、知る努力を怠つてはならない。私どもが、御製、御歌の研究をつゞけるのはこのやうな心持ちからである。

最後にわれわれの御製、御歌研究の道統について一言しておきたい。それは、今は亡き国民文化研究会の前理事長小田村寅二郎氏が、『昭和史に刻むわれらが道統』に述べられた通

り、『明治天皇御集研究』（大正十二年刊）の著者、「国民同胞和歌集」（明治篇・大正篇）の選者三井甲之先生につながる。先生は、昭和二十八年四月に亡くなられたが、亡くなる前に、『今上御歌解説』を謄写刷りで頒布された。これを継いだのが拙著『歌人・今上天皇』（昭和三十四年）で、小田村さんの尽力によって出版された。当時は「科学者天皇」といふ言葉が流行であったので、ある意味ではそれに反省を求めた書名でもあった。この書名は当然のことながら論議を呼んだが、その後、昭和天皇さまが、数々の名歌を発表なさるに従って漸く、世間でも認められるやうになり、昭和五十年、六十年の御治世のお祝ひにあはせて、増訂、増補新版と刊行された。（五十年版からは、月刊誌『国民同胞』掲載の同人諸氏の論説、「新春御発表の御製について」——昭和四十三年以降、六十年まで——を収録した）天皇御在世中に御製について研究を公表することは慎むべきことと言はれるかも知れない。しかし、天皇について、御製についての無関心の方がなほ問題であらう。未熟の批判は覚悟の上で、御製御歌拝誦の感想を述べるのは、右のやうな道統にもとづくものである。

なほ、年頭発表の御製、御歌をはじめ、その他の御製御歌の集録ならびに、御製御歌の背景になる歴史事実の資料については、日本青年協議会『祖國と青年』の記事ならびに編集の方々に御厄介になった。その方々のご協力なくしては本篇は成り立たなかつたと思ふ。記し

て深甚の謝意を表明する。また本書の刊行をとりあげてくださった「展転社」の方々にも心から御礼を申し上げたい。

この「はしがき」は、小田村さんが生きてをられれば当然書いていたゞくところであった。そのことも述べて、摺筆する。

平成十一年八月十五日

凡例

一、本書に収録されてゐる御製・御歌は平成十一年一月までのものです。

一、本書第一部では、年頭及び前年末ご発表の御製・御歌に解説を付してをります。「(当年) 歌会始」の御製・御歌、並びに年頭ご発表に含まれてゐない前年の御製・御歌(特別の例祭や大会等で御詠みになったもの)も掲載しましたが、解説なしのお歌もあります。

一、本書は、明治天皇の御製は『類纂新輯明治天皇御集』(明治神宮編刊)、昭和天皇の御製は『歌人・今上天皇(増補新版)』(夜久正雄編著、日本教文社刊)、今上天皇・皇后陛下の御製・御歌は『道』(宮内庁編、NHK出版刊)、『ともしび』(宮内庁東宮職編、婦人画報社刊)、『瀬音』(大東出版社編刊)を底本としました。

一、本書は、歴史的仮名遣ひを用ひ、若年層向きにできるだけ振り仮名を付しました。

一、巻末の「平成の御代・略史」は、『天皇后両陛下御集』(日本青年協議会編刊)その他を参照して作成しました。

目次

平成の大みうたを仰ぐ

はしがき——夜久正雄 1

凡例 6

第一部 年頭の大みうたを拝して

平成二年——小柳陽太郎 12

平成三年——小柳陽太郎 26

平成四年——廣瀬誠 46

平成五年——澤部壽孫 58

平成六年——澤部壽孫 72

平成七年——小柳左門 86

平成八年——小柳左門 102

平成九年——宝辺矢太郎 118

平成十年——宝辺矢太郎 134

第二部 天皇・皇后両陛下の御心を仰ぎて

皇太子殿下を仰ぐ——小野吉宣 169

皇太子殿下と沖繩——小柳陽太郎 191

皇室の風儀——小柳陽太郎 205

「大孝」の大御心——廣瀬誠 213

皇后陛下御歌集『瀬音』を読む——山田輝彦 218

青き梅実る頃——廣瀬誠 227

今上天皇のお歌について最近思ふこと——夜久正雄 234

平成の御代・略史——本書関連略年表—— 242

初出一覧 253

あとがき——宝辺正久 250

*写真提供

東京都庁

共同通信社

産経新聞社

理化学研究所

青森県三沢市役所

海洋科学技術センター

(財)日本殉職船員顕彰会

*装丁

鈴木堯+佐々木由美「タウハウス」

第一部

年頭の大みうたを拝して

平成二年年頭ご発表

天皇陛下御製

殯宮祇候
びんみやうしごころ

ありし日のみ顔まぶたに浮かべつつ暗きあらしの宮にはべりぬ

原爆慰霊碑

死没者の名簿増え行く慰霊碑のあなた平和の灯は燃え盛る

広島赤十字・原爆病院

平なひらけき世に病みゐるを訪れてひたすら思ふ放射能のわざ

ジンバブエ国大統領閣下を国賓としてお迎へして

まれびとを迎へて開くうたげにて彼のか国人の経し道びとを聞く

一年祭近付きて

父君をしのび務むる日々たちてはや一年ひととせの暮れ近付きぬ

第四十回全国植樹祭 徳島県

かみやま
神山に「かみやま 歓びの歌」鳴り渡り集ふ人々苗を植ゑけり

第九回全国豊かな海づくり大会 広島県

豊かなる海を願ひて人々と育てられたる稚魚放ちけり

第四十四回国民体育大会秋季大会集団演技 北海道

幼子の集ひかたどる花々を幼子のでふ駆けめぐり行く

(年頭ご発表に含まれてゐない前年の御製)

父君をあらきの宮に思ひつつ日はたちゆきて梅は咲き満つ

今年、平成二年（一九九〇年）元旦の新聞に、天皇陛下の五首の御製をぎよせい拝した時のよろこびは深かった。例年、昭和天皇いませし時、元旦の新聞には天皇の御製を拝するのがならはしになってゐたが、とりわけ諒闇中ではあり、陛下の御製に接することが出来るかどうか不安なおもひに開いた新聞の紙面ではあった。だがそこには鮮やかに、新帝陛下の御製が掲げられてゐたのである。

思へば昨年（昭和六十四年）の元旦、昭和天皇御大患のさなか、三首の御製が発表されて沈痛なおもひの中にも、それらの御製をしみじみと味はひながら、陛下の御胸中を御偲びしつ、深い感慨に誘はれたのであったが、その直後、陛下は崩御、その日から一年の月日が夢のやうにすぎた。だがこのやうにして迎へた新年、われわれはこゝにまた新帝陛下の御製を仰ぐことが出来たのである。

天皇の御存在は、遠い神代の昔から、今に伝へられた歌のしらべと共にある。天皇いますところ歌あり。この悠久の和歌の道統の中に、天皇の御存在を仰ぐことが出来るといふ日本の国がらの尊さは、昭和天皇、神さりましたし今も、厳然としてここに示されてゐる。私たちはこの厳肅な事実の前に、諒闇の中に迎へた新年ではあったが、しみじみと湧きくるよろこびと共に、この御製を拝誦したのである。

ありし日のみ顔まぶたに浮かべつつ暗きあらしの宮にはべりぬ

昨年一月、昭和天皇の殯宮ひんきゆうに祇候しごうしたまうた時の御製である。平成元年一月十九日の夜、今は亡き昭和天皇の御柩ひつぎは、長く住みなれたまうた吹上御所の櫺殿しんてん（崩御後、殯宮に移られるまで御柩を安置する殿舎）と別れをつけ、宮殿の正殿「松の間」にしつらへられた殯宮に移りたまうた。

殯宮とは「あらしのみや」とも申し上げ、御大喪の日まで、御遺体を安置しまつる殿舎であるが、殯宮祇候とは、その間、両陛下をはじめ、皇族その他の方々が御柩のかたはらにあつて、ひたすら先帝を偲びまつり、御遺体を御守り申し上げられることをいふのである。御製はその折の御感懐の表現であつた。

産経新聞（二月二十日付夕刊）の報ずるところによれば、一月二十日、「殯宮移御後一日祭の儀」が行はれたとき、陛下は亡き陛下に玉串を捧げたまうた後、「崩御あそばされた後も優しく厳かなお姿はまなかに甦り、慈しみ深いお声は心耳に響いてひとときも忘れることができませぬ。幽明を隔てて哀慕の情はいよいよ切なるものがあります」といふお言葉やさ、げられた由、そのお言葉は二月二十四日、御大喪の折の陛下の「御誄おんるい」の、あの切々たるみ言葉にも、ほゞそのまゝの形で表現されてゐるところであつた。

殯宮の部屋にともされた灯りは内陣の菊灯台のみ、そのほのぐらい光の中、文字通り身じろぎもされることなく、「ありし日のみ顔」をまぶたに浮べつ、御簾みすだの奥うしろにほのかにうかぶ御柩みすだに向はれたまゝ、はりつめるやうな時が流れたであらう。「暗くらきあらしの宮」、その「暗くらき」にこめられたおもひは惻々として読む者の胸に迫るのである。

死没者の名簿増え行く慰霊碑のあなた平和の灯は燃え盛る

平たいらけき世よに病みゐるを訪れてひたすら思ふ放射能のわざ

両陛下は昨年九月九日より十一日まで、「第九回全国豊かな海づくり大会」に御臨席のため広島に行幸啓された、その折の御製である。

広島空港に到着されたのが九日の正午前、そのあと九万を越える市民の歓迎をおうけになつて県庁に向はれ、午後、平和公園の原爆慰霊碑に参拝したまうたのである。慰霊碑の中には原爆によつてなくなられた方々の名簿が収められてゐるが、昭和二十七年（一九五二年）八月六日、慰霊碑が完成した時、最初に収められた名簿の数は約五万八千名、その後、原爆病による死没者の数は年々増えつゞけ、最近、昭和六十三年八月から平成元年八月まで一年間においても四千四百名を越す名簿が追加され、現在では総計十五万七千名に及ぶとい



原爆慰霊碑に参拝される両陛下(平成元年9月9日、広島・平和公園)

ふ。

その名簿はすでに五十一冊を数へてゐるが、陛下はその名簿をお手にされて、はげしい胸の痛みをおぼえたまうたのであらう。原爆投下よりすでに四十五年、今もなほこれほどまでに増えつゞけてゐる死没者の数、その一人ひとりの名前に目を通されてゐると、慰霊碑のかなたに燃えつゞける「平和の灯」にもまた鮮烈なる感慨を催されたにちがひない。

「平和の灯」は、昭和三十九年（一九六四年）八月、全国の人々の奉賛によって、ゆかりある各地の灯が集められてここに点火、それ以来一日も消えることなく燃えつゞけてゐるといふ。手もとに開かれた名簿と、かなたに燃える灯と、それを見つめ

られる陛下の御心には、終戦直後、広島地をお踏みになった昭和天皇が「ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり」とお詠みになった、その「ああ広島」の一句、戦ひの痛恨と、「残虐ナル爆弾ヲ使用シテ」数万の「無辜」の民の殺傷されたかなしみと、すべてをこめておよみになった「ああ広島」の一句がおそらく痛切なおもひで過よられてゐたにちがひない。

両陛下はその後、広島赤十字原爆病院を御訪問、入院患者をお見舞になった。陛下はすでに皇太子殿下の時代に三回訪れてをられるが、そのたびごとに新たなおもひがおありになるのだらう。新聞の報ずるところによれば、病院側では比較的軽い患者がある六つの部屋だけを御案内申し上げる予定であったが、両陛下はドアのあいてゐる部屋に次々におはひりになり、どの部屋でも患者の目をみつめながら、心をこめて語りかけられたといふ。

第三首の一句目は「平らけき世に」と歌ひはじめてをられるが、戦争の傷あともすべて忘れ去つたやうな平和な世であればあるほど、一步病院の中にふみこまれたとき、四十五年前の悲しみが壁一つをへだて、深々とたへられてゐることに強い衝撃をおぼえたまうたのに違ひない。

沖繩の摩ま文ぶん仁にヶ丘を訪れて「戦ひの終りてここに三十年くりかへし思はむこの岡のこと」と詠みたまうたのは昭和五十年、すでに十五年前のことになるが、沖繩にしても広島にして

も、大東亜戦争の悲劇が最も痛烈な思ひ出として国民の胸に刻みこまれてゐるところ、陛下の御心は常に、その悲しみの底ひを見つめられ、底深く沈んで、ともすれば人々から忘れられがちになる世界に渾身の力をこめて迫ってゆかれるのである。その御精神は数々の昭和天皇の御製に拝せらるゝところ、また歴代の天皇方の御製に一貫して流れる天皇の御政治の基本をなす大御心であつた。

まれびとを迎へて開くうたげにて彼の^{くにびと}国人の経し道を聞く

アフリカ中南部の新興国ジンバブエのムガベ大統領が来日したのは昨年十月十五日、翌十六日、天皇陛下は赤坂の迎賓館で行はれた歓迎行事に御出席のあと、大統領と御一緒に皇居にお帰りになられ、宮殿「竹の間」で御会見、その夜改めて宮殿の豊明殿で行はれた大統領歓迎の宮中晩餐会に御出席になられた。「まれびと（客人）を迎へて開くうたげ」とあるところから、御製はその夜の晩餐会の折のものであらう。

ジンバブエは一九八〇年（昭和五十五年）南ローデシアが白人政権を倒して独立、ジンバブエ共和国として発足して未だ十年に満たぬ新興独立国である。ムガベ大統領はジンバブエにアフリカ民族同盟といふ黒人解放組織を結成、武装闘争をつゞけ、遂に黒人支配国家を誕生させた人物、そのムガベ大統領の語る「彼の国人の経し道」はそれこそ苦難に満ちた民族

独立悲願達成の道であつたに違ひない。

この遠いアフリカの国の独立運動も、思へば東亜の独立解放を悲願とした大東亜戦争の激震が生んだ世界史的な重大な成果であつた。しかも大統領は新帝陛下が初めて国賓としてお迎へになつた外国の元首であり、その新しい御体験といひ、激烈な独立闘争の経過を語る大統領の語り口にも、忘れがたい印象を胸中深くとどめたまうたのであらう。賑やかな宴席の騒音も耳にとまらぬごとく、ひたすら大統領の言葉に耳傾けらるゝ御姿が偲ばれる御製であつた。

父君をしのび務むる日々たちてはや一年の暮れ近付きぬ

「父君をしのび務むる日々たちて」——陛下にとつてこの一年の御苦勞いかばかりであられたらうか。だがこの一年、陛下の御心を占められてゐたものは常に昭和天皇の「ありし日のみ顔」であつた。日々の務めに精根を傾けられることと、父君をしのびたまふことは決して二つのことではなかつた。「ここに、皇位を継承するに当たり、大行天皇の御遺徳に深く思いをいたし、いかなるときも国民とともにあることを念願された御心を心としつつ」と仰せられた踐祚の折の朝見の儀の御言葉をはじめ、平成二年の年頭の御言葉「昭和天皇をおしのびして日々の務めを果し」に至るまで今上天皇の御言葉のすべてには、昭和天皇敬慕のおも

ひが満ちあふれてをられる。

皇統百二十五代、そのいづれの時にも想像がつかなかったやうな時代の荒波をまともにおうけになり、戦前の皇族方も大半は臣籍に御降下、天皇をお支へ申すべき華族、貴族の存在もなく、臣下とて心を許して語りあふべき者も寥々として暁天の星のごとき有様、その中にあって天皇としての御地位に思ひをめぐらしたまふ時、どんなにか陛下には昭和天皇の御存在がなつかしく、慕はしく思はれたまふことであらう。

「父君をしのび務むる日々たちて」、その一句にこめられた陛下のひたぶるのおもひ、そしてそこにたゞ、へられたおかなしみをお慰びするとき、このたゞならぬ世に生くるわれら日本の国民の生くべき道はたゞ一筋に示さるゝのである。

*

以上で拙い感想を閉ぢさせていたゞくが、いまかうして五首の御製を拝誦して気付くことは、この五首全体の構成である。

いふまでもなく、最初と最後には昭和天皇追慕の御製が配せられ、中の三首の中、はじめの二首は国内における原爆といふ文明のもたらす最大の問題を、そして後の一首には白人による黒人差別といふ、世界をゆるがす問題を配し、いはば国の内外にあって、時代の苦しみに全身をもつて耐へてゐる人々のかなしみに深くこころを寄せつゝ、それを包みこむやうな

形で昭和天皇への切々たる追憶の二首の御製が前後に配されてゐる——それはいま陛下がいだいてをられる大御心のいはゞ縮図ともいふべきものではなからうか。陛下はそのやうなおもひをこめて、この五首の御製を年頭に御発表になつた、私にはさう思はれてならないのである。

*

なほ天皇の御製については実は十二月二十七日、地方行幸に際して詠まれた三首の御製が発表されてゐる。これは東京新聞にのみ掲載されたもの、日本青年協議会の「祖國と青年」の編集部からの連絡により、はじめて知ることが出来た。

我々はこれらの御製によつて、天皇陛下が昭和天皇の時と同じく「全国植樹祭」においても「国民体育大会」においても、さらに今回は「全国豊かな海づくり大会」においても、かくも心をこめてお歌を御詠みになつてゐることを知ることが出来たのである。それは新帝陛下のもとに平成の時代を生きるわれわれにとつて何とありがたいことだらう。

「開かれた皇室」といふ言葉があつて、ことさらに皇室に対して国民の側に窓を開いていただくやうに期待する動きがあるが、ここに示された御製の数々こそ、何にもまして天皇の御心を国民に対して開きたまうた、かけがへのない心の窓ではあるまいか。天皇が自らのみ心を、かくも赤裸々に国民の前に示し給ふ、これほど開かれた王室をもつ幸せが世界の一体



神山森林公園の植樹祭で苗をお手植えなされる両陛下(平成元年5月21日)

どこにあるのだらう。

俗情をもって天皇の御心をあれこれと付度する前に、自ら開きたまうた天皇の御心を、この御製といふ窓を通して御偲びすることこそ、いまわれわれ国民がなすべき最大のつとめであると思はれる。

神山に「かみやま欲びの歌」鳴り渡り集ふ人々

苗を植えけり

最初の「神山」は、第四十回全国植樹祭が行はれた徳島県みやうごい名西郡の県立神山森林公園のこと、次の「欲びの歌」はベートーヴェンの第九交響楽の最後を飾る「歓喜の歌」の合唱をいふ。

聞くところによれば第一次世界大戦当時、徳島の鳴戸にあったドイツ人捕虜の

人々によって、日本で最初の第九の演奏が行はれた由、それを記念して徳島の人々は第九を県民の歌の如く愛してをり、植樹祭の折も市民や大学、高校、中学の六百名に及ぶ合唱団、オーケストラによって第九が演奏されたといふ。陛下の御手植えの儀が終へられたあと、会場に招待された九千の人々が一齐に植樹、その折、第九交響曲の「飲びの歌」が流れたのである。

従つて最初この御製を拝した時、昭和天皇の御製によく見られた「集ふ人々と苗を植ゑけり」といふやうに、どうして「と」をお入れにならなかつたのか不審に思はれたが、実情は右の如くであり、陛下は自らの植樹を終へたまうたあと、集ふ人々がごぞつて苗を植ゑてゐる手許を温かく見守つてをられる、その情景をおよみになつた御製であつた。

豊かなる海を願ひて人々と育てられたる稚魚放ちけり

陛下は皇太子殿下の時代からこの「全国豊かな海づくり大会」にはとりわけ御心を寄せられ、昭和五十六年（一九八二年）、大分県佐伯市の東、鶴見町で開かれた第一回大会以来、毎回御臨席、御歌集『ともしび』にも、昭和五十七年、第二回の兵庫大会の折のお歌「各地より集ひし人と乗り出でて小鯛放てり香住の海に」が収められてゐる。

今回の第九回大会は先に述べた原爆慰霊碑御参拝の翌九月十日、広島県の東部、瀬戸内海

に面した豊田郡安浦町のグリーンピア安浦で行はれたが、両陛下は海上につき出たデッキにお立ちになって、マダヒ、クロダヒ、ヒラメなど六種の稚魚を放流されたといふ。

幼子の集ひかたどる花々を幼子のでふ駆けめぐり行く

この御製は九月十七日、北海道厚別公園競技場で行はれた開会式でおよみになったもの、幼い子供たちが、あるいは花になり蝶になり、グランド一杯にくりひろげて行く時ならぬ花園の目もさめるやうな美しさ、あどけなさをおよみになったのだらう。一読、両陛下のここにやかな御顔がありありと偲ばれるやうな御製である。

【小柳陽太郎】

平成三年年頭ご発表

天皇陛下御製

大韓民国大統領閣下をお迎へして

さまざまの歴史を思ひ海一つ隔つる国のまれ人迎ふむか

集中豪雨

この年も集中豪雨のまがにより失はれたる命惜しまる

イラク国在留邦人

外国に留め置かれたる人々の上思はれて日々を過ごしぬ

即位の礼饗宴の儀

外国のあまたまれ人集ひ来て宴の夜を語り過ごしぬ

大嘗祭

父君のひなめまつりしのびつつ我がおほにへのまつり行なふ

第四十一回全国植樹祭 長崎県

父君の即位記念の林より育ちし苗を我ら植ゑけり

第十回全国豊かな海づくり大会 青森県

くろそいとひらめの稚魚を人々と三沢の海に共に放しぬ

第四十五回国民体育大会秋季大会 福岡県

さまざまの小旗や花を打ち振りて歩む選手の晴れやかにして

【平成三年歌会始】

森〔御題〕

いにしへの人も守り来し日の本の森の栄えを共に願はむ

(年頭ご発表に含まれてゐない前年の御製)

晴〔昭和天皇を偲ぶ歌会御題〕

父君を見舞ひて出づる晴れし日の宮居の道にもみぢばは照る

昭和天皇崩御後初めて明治天皇例祭に参りて

今の世の国の基もとの築かれし明治の御代みよを尊みしのぶ

近江神宮五十年祭にあたり

日の本の国の基もとを築かれしすめらみことの古いにしへ思ふ

皇后陛下御歌

昭和天皇崩御「平成元年」

セキレイの冬のみ園に遊ぶさま告げたしと思ひ醒さめてさみしむ

明治神宮御鎮座七十年にあたり

聖ひじりなる帝みかどに在まして越こゆるべき心の山のありと宣のらしき

御即位を祝して

長き年目としに親しみし御衣みころもの黄丹わうにの色に御代あさの朝あけ

【平成三年歌会始】

森〔御題〕

いつの日か森とはなりて陵みささぎを守らむ木木かこの武蔵野に

（年頭ご発表に含まれてゐない前年の御歌）

晴〔昭和天皇をお偲びする歌会御題〕

かすみつつ晴れたる瀬戸の鳥々をむすびて遠く橋かかりたり

近江神宮御鎮座五十年にあたり

学みやこぶ道都ひなに鄙みかどに開かれし帝にましぬ遠くしのばゆ

旬祭

神まつる昔の手ぶり守らむと旬祭しゅんさいに発たたす君をかしこむ

昨年こぞの秋、御即位ご即位の御大典ご大典の盛儀せいぎを無事齋行むじしやくしたまうた、天皇・皇后両陛下こうごにはおすこやかに平成三年へいせい三年（一九九一年）の元旦げんげんをお迎へになつた。

「神社新報」の報ずるところによれば、天皇陛下は一月一日午前五時半、御即位ご即位の式にお召ましになつた、あの黄櫨染くわうしせんの御袍ごほうを召まされて剣璽けんじとともに宮中三殿みやちゆうさんでんの傍ら、神嘉殿かみかでんの南庭なんていに出御しゆつぎよ、庭燎にはびのかぶり火ひの中玉歩なかつたまを進め給ひ、二双ふたごの四季しきの屏風びんぷうをめぐらし白砂しろすなの上に真薦まこもと厚畳あつじやうを敷いた御拜座ごはいざに着御ちやくご、伊勢神宮いせじんぐうをはじめ四方しほうの神社じんじやならびに各山陵さかやまらうを御遙拜ごえうはいになり、五穀ごこくの豊穰ゆほうと国家国民こくかこくみんの安寧あんねいを御祈念ごきねん、四方拜しほうはいの儀ぎを終へられ、続いて宮中三殿みやちゆうさんでんの歳旦さいたん祭さいに御臨ごりんみになつたといふ。

昭和四十五年しやうわしやうごごごねん（一九七〇年）以降、昭和天皇しやうわてんかうが御高齡ごたうれいになられたため、従来、四方拜しほうはいは吹上御所ふきあごで行はれ、歳旦祭さいたんさいも御代拜ごしろはいであつたが、実に二十二年ぶりに天皇御親てんかうごしんらの御祭りごまつりが、暁闇あやみ明けやらぬ宮中みやちゆうの奥深く、神代かみしろさながらにとり行はれたのである。

かうして迎へた元旦げんげんの新聞の紙面しめんに、私達国民わたくしだたみこは今年もまた天皇陛下てんかうごの御製ごせい五首ごしゆ、それに今年ことしはまた新たに皇后陛下こうご下の御歌みうた三首さんしゆを拝うやまつすることが出来たのである。思へば、この年頭としごしらの御親祭ごしんさいと、御製ごせいの御発表ごはつぷとは、まさしくかの山上憶良かみかみおくらの歌うたに示された「皇神すめがみの厳いづくしき国くに、言靈ことたまの幸さちはふ国くに」の国柄くにがらのありやうを、開けゆく新しき年の初はつめに天皇御自ら示したまふといふ、他の国々ほかのくにには絶えて見られない、日の本の国ひのくににのみ許されたさきはひであらう。

以下、年頭の御製ごよせい、御歌みうたを中心に、最近御発表になった御作について感想を述べさせていたゞきたいと思ふ。

さまざまの歴史を思ひ海一つ隔つる国のまれ人迎むかふ

周知の通り、韓国の盧泰愚大統領の来日に際しては、陛下がどのやうなお言葉をお述べになるか、新聞ではその問題をめぐって、連日、慎しみと礼節を忘れ去った奇怪な記事が紙面を埋めた。だがこの一首にあふれるものは、「大韓民国大統領閣下をお迎へして」といふ節度正しい詞書きのお言葉にも拝されるやうに、世上の憶測を遙かに越えて、隣国の賓客を心をこめてお迎へになる真摯な御心であった。

五月二十四日の宮中晩餐会の席上、臨席の大統領の顔をのぞきこむやうに、一句一句、真情を吐露してお言葉をお述べになる陛下、テレビを拝見しながら、私達の心を強く打ったのは、その真情あふれる御表情であった。

日本と韓国と、隔て、ゐるのは僅か海一つにすぎないが、その海をめぐって、古来どんな複雑な歴史が織りなされてきたことか、その歴史の一部分をとりあげて論あげつらつてみたところで、到底論じつくすべくもない国と国との間の果てしない悲劇——。「さまざまの歴史を思ひ」の一句にこめられた痛恨の御心情、しかもそれを越えてこの「海一つ隔つる国のまれ

人」に対する深々とした情愛、それをお慰びすることを措いて、今後の日韓両国の交流と親善はあり得ぬことを知るべきであらう。

この年も集中豪雨のまがにより失はれたる命惜しまる

昭和五十七年（一九八二年）、昭和天皇は、その年の七月北九州を襲った豪雨によって、長崎県内で三百名に近い死者、行方不明者を出した大惨事をはじめ、連続する災害に心を痛めたまひ、「わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば」と沈痛のおもひを一首に託し給うたが、今上天皇御製の「この年も」の「も」にこもるおもひは深い。或いはこの時、陛下は先の昭和天皇の御製を思ひ出されてゐたのかもしれない。そして「この年も」と詠み給うたのかもしれない。

ともあれ人力を越えた禍、その濁流の中に吞まれてゆく人々のかなしみは陛下のお心を離れることはないのである。

外国に留め置かれたる人々の上思はれて日々を過ごしぬ

このお歌の焦点は何といつても「思はれて」の一句にある。「人々の上を思ひて」ではなく「人々の上思はれて」と詠みたまふのである。「思ひて」と「思はれて」の差は大きい。

他の事に心奪はれてゐても、ふと我に帰り給うたとき陛下の御心に自づと浮ぶものは、イラクに抑留された邦人の運命である。

八月二日、イラクがクウェートに侵入、一日にして国を奪つたその日から、人質として留めおかれた邦人全員の解放が発表された十二月六日まで、日々、陛下の御心を領してゐたのは、「外国に留め置かれたる」邦人の安否であつた。

昭和天皇が終戦後、未だ祖国に帰りぬ人々を思うて、「外国にながくのこりてかへりこぬ人をおもひてうれひはふかし」とよみたまうたあのかなしみが偲ばれ、元旦に御発表になつたお歌のうちの一首が、やはり、いまの時代にあつて、とりわけきびしい試練に耐へつ、ある同胞への憶念をよみ給ひしお歌であることの意味を思はずにはをられないのである。

外国のあまたまれ人集ひ来て宴の夜を語り過ごしぬ

即位の礼を終へたまうた十一月十二日の夜、外国の賓客たちは午後七時ごろから続々と宮殿の南車寄に到着、「松風の間」で天皇・皇后両陛下にご挨拶のあと、「豊明殿」に入られたが、午後九時すぎ、両陛下のご着席と同時に雅楽が奏せられ、「饗宴の儀」がはじめられた。この祝宴は十五日まで計七回、延べ三千五百人の賓客が招待されたといふ。第一回は百五十一カ国、二国際機関の代表ら約三百五十人が出席、世界の人々が利害にせめぎあふ現実

を一時忘れて、睦まじく語りあふ浄福の一刻ひとときであった。

世界の平和と人々は口にはするが、その平和が内心にたしかめられるためには、お互ひの心と心がふれあふ体験をつみ重ねる以外に道はない。陛下がこれまで御訪問になった国は、非公式にお立ち寄りになった国々を含めれば実に四十八カ国。しかもその一つ一つの国について、御訪問前には実に心細かな御研究をつみ重ねられ、こんなことまで御存知なのかと、外国の人々も驚嘆の目を瞠みはるといふ。

その御心配りと、無私の御心は、このやうな宴の席でどんなに人々の心を和ませられたことだらう。「松風の間」における両陛下の御挨拶も、儀礼的ではなく、一人ひとりに時間をかけた心のこもった御出迎へがひとときは印象的だったといふ。

「皇室外交」といふ言葉があるが、両陛下の御心情は、その言葉にほのみえる功利の世界を遠く越えた、心と心とをわかちあふよろこびが、数々の御写真に拝せられるやうに、胸一杯に漲つてをられたにちがひない。その無私の御精神のみが、世界の人々の心を一つに結ぶのである。

敢へて誤解を恐れずに言ふならば、八紘を掩いひて宇となすといふ、神武天皇の御言葉に示される歴代天皇の御悲願は、ここ豊明殿において、たまゆらの時とはいへ、まぎれもない現実としてこの世に存在し得たのである。



即位礼正殿の儀(手前が高御座、向ふが御帳台。平成2年11月12日)

豊明殿は杉山寧画伯のデザインになる手織りの絨緞が敷きこまれ、壁面には中村岳陵画伯画くところの、夕空に五彩の雲のたなびく、目にもあざやかなつゞれ織り「豊幡雲」がはめこまれ、天智天皇の「わたつみの豊旗雲に入日さし」のあのお歌さながら、人の心をとらへて放さない。

陛下には昭和五十年（一九七五年）、「朱」と題された「とづくにのまれ人と集ふ夜の宴豊幡雲は朱にたなびく」のお歌があるが、このたびのお歌の背景にも、このお歌と同じ絢爛たる豊旗雲を置いて味識すべきであらう。朱にたなびく豊旗雲、その古代の美の世界の前に、にぎやかにとづくにの「まれ人」の集ふさまは、常若の国のいのちの永遠の象徴である。



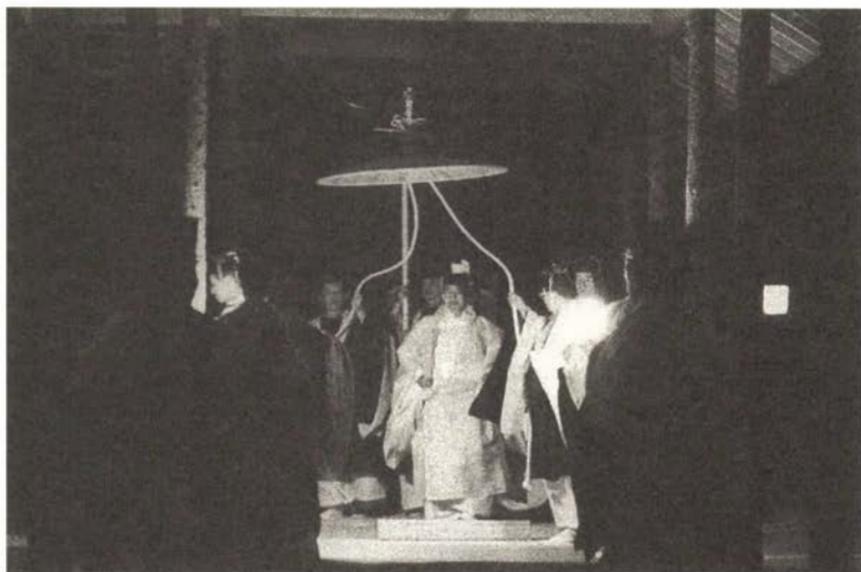
今上陛下の大嘗祭(悠紀殿供饌の儀。平成2年11月22日、皇居・東御苑)

父君のひなめまつりしのびつつ我
がおほにへのまつり行なふ

父君昭和天皇の親祭し給ふ「新嘗祭」に
おける今上陛下の数々のお歌は、その荘重
な調べとともに、一読忘れがたい印象を
とゞめ給ふ名歌であった(二八五頁参照)。

いふまでもないことながら大嘗祭は即位
後最初に斎行し給ふ新嘗の祭りを、全国民
奉賛の御祭。として、新たに悠紀^{ゆき}、主基^{すき}の
両殿をしつらへ、その殿舎の奥深く、神々
と新穀共食の秘儀を、さらに厳肅に、さら
に莊重にとり行はれる、一世一代の重儀で
ある。

十一月二十二日の夜から二十三日の暁に
かけて行はれたこの大嘗祭に御臨みになら



今上陛下の大嘗祭(主基殿供饌の儀。平成2年11月23日、皇居・東御苑)

れた陛下の御胸に浮びくるもの、それはすぎし日、新嘗の祭に、幽闇の中、白い生絹の束帯にひそやかな衣ずれの音をたてながら、神殿の奥深く歩を進めたまふ、今は亡き父君昭和天皇の御姿であり、漆黒の闇の中から聞えくる、神前に告文を読みたまふ「おほどかなる」御声であった。その昭和天皇のみあとをうけて、いま陛下は「我がおほにへ（大嘗）のまつり」をとり行ひたまふのである。

この「我が」といふ御言葉は、万世一系の皇位を継承し給ひ、悠久の歴史の重みを、我が胸の奥深くかみしめたまふ、切々たる大御心の凝縮した御表現であった。

皇后陛下の御歌

セキレイの冬のみ園に遊ぶさま告げたしと思ひ醒めてさみしむ

先帝崩御のあと、今上陛下の御胸に常に去来したまうたのは、亡き先帝の面影であったが、その点、皇后陛下も全く同じ御心で日々をおすごしのやうである。

皇后さまの最初の御歌、冬の皇居の御庭に飛来したセキレイ、「あ、セキレイが」と、とりわけ鳥に興味をおもちの父君の陛下に申し上げようとされたが、我に帰ってみれば父君はすでにこの世にはいませぬ——。そのさびしさ、眼うらににじまれる亡き陛下の御姿。

記者団から先帝崩御直後のおもひを聞かれた皇后さまは「おそばで過ごさせて頂いたかけがえのない日々が、とうとう終わりに来てしまったという寂しさだけを感じておりました」とお答へになったが、その切々たるお言葉に偲ばれる先帝追慕のおもひが、このお歌では見事に結晶した挽歌として読む人の心をはげしく打つのである。

これらのお歌に拝せられる両陛下の御心を占める昭和天皇の御存在の大きさ、それはどのやうにお偲びしてもつくせないものがあるといへよう。

聖なる帝ひじりに在まして越こゆるべき心の山のありと宣のらしき

長ちき年とし目に親ましみし御衣みころもの黄丹わうにの色に御代あきの朝あけ

なほ皇后さまのお歌の二首目は、明治天皇の「静かなる心のおくにこえぬべき千年の山はありとこそきけ」といふ御製を拝してよませたまうたもの。あの聖帝、明治の大みかどですらそのみ心の中には、永遠に乗り越えていかなければならない遠いはるかな山脈やまなみがある、まして私の身にとっては——、といふ明治天皇を鏡として我が身を顧みたまふ皇后さまの謙虚なみ心を詠みたまうたもの。

三首目の「黄丹わうに」とは皇太子殿下がお召しになる御袍ごぼうの色、黄丹を曙の太陽の色と見て、やがて天皇の御位につく皇太子の地位を表はしたものといはれてゐる。

三十年の長い年月の間、宮中のお祭りのたびに皇太子殿下がお召しになってゐた黄丹の御袍、そのなつかしい色の中に、いよいよ御夫君が皇位をお継ぎになる、新たな時代の朝明けを感じとられたのであらう。「目に親しみし」といふお言葉の中に、心をこめてお祭りにお仕へになる陛下の後姿をじっと見守つてをられた皇后さまの目差まなざしの俣まばれるお歌である。

*

平成二年（一九九〇年）十二月二十八日、天皇陛下は平成二年に行はれた植樹祭、豊かな海づくり大会、及び国民体育大会に御臨席の折お詠みになったお歌を、それぞれの主催県、長崎、青森、福岡の各県にお示しになった。

父君の即位記念の林より育ちし苗を我ら植ゑけり

五月二十日、島原半島北部、南正面には雲仙の高峯を望み、北には大きく有明の海原を見はるかす国見町百花台森林公園において第四十一回全国植樹祭が開かれた。両陛下はお言葉をお述べになったあと、ヒノキの苗木三本づつをお手植ゑになり、さらにヒノキの種子をお撒きになった。

その後、長崎県ととりわけ友好の関係にあるオランダ、中国など世界九カ国から寄せられたシンボルツリー、県内七十九市町村の子どもたちが持ちよった、それぞれの「町の木」など四千本の苗木が、ぬけるやうな五月の青空のもと、参加者全員によって植樹され、華やかな祭典がくりひろげられていった、その折の陛下の御歌であるが、実はこの時、陛下がお手植ゑになったヒノキの苗木は、昭和三年（一九二八年）の昭和天皇の御大礼を記念して行はれた「大札記念県行造林」事業で植ゑられたヒノキのうち、現在まで残されてゐた北有馬町

(鳥原半島南部)の造林から採取された種子から育てられたものであり、その種子も同じ北有馬の造林の種子であった。

そのことは当時長崎県発行の印刷物には若干紹介されてゐたが、新聞報道などは一切行はず、人々はこのたびのお歌によってはじめて、昭和天皇と深いえにしにつながる苗木を手にし給うた陛下の御心情をお偲びすることが出来たのである。陛下がどれほど深い感慨を胸にお手植えされたのか、その冒頭の「父君」といふお言葉にこもる痛切の情はかりそめではない。

くろそいとひらめの稚魚を人々と三沢の海に共に放しぬ

この「全国豊かな海づくり大会」に寄せ給ふ陛下の御心は深く、昭和五十六年(一九八一年)の第一回大会からか、さず御臨席になつてをられる。今回は、青森県の三沢漁港で開催されたが、陛下のお言葉のあと、大漁旗や日の丸を立てた三十隻の漁船の勇壮な海上パレードが行はれ、さらに二台のねぶたの海上運行で「ラッセラーラッセラー」のかけ声も勇ましく大会はクライマックスに達した。

続いて午後三時、このお歌にあるやうに、県の魚ヒラメやクロソイの稚魚を放流されたが、その時刻に合わせて県内二十八の市町村で一斉に放流が行はれたといふ。



第10回全国

青森県・三沢漁港で開催の全国豊かな海づくり大会にご臨席、稚魚を放流される両陛下(平成2年7月22日)

なほクロソイについては、青森出身の長内俊平氏(前国民文化研究会事務局長)のお話によれば「私達が住んでゐた下北半島ではアブラメ(アイナメ)とともに上等の魚として目出度い時に使はれてゐた」由、青森の人々が特に愛着をもつてゐる魚なのであらう。

このお歌で心ひかれるのは「人々と」「共に」といふお言葉である。そこには、この大会におもひをこめる青森の県民たちと一体になり給うたおよろこび、自他を分たぬひろやかな御心のひろがりがある。陛下は広島で行はれた昨年の大会でも「豊かなる海を願ひて人々と育てられたる稚魚放ちけり」と詠み給ひ、第二回大会(兵庫県)の折には「各地より集ひし人と乗り出でて小

鯛放てり香住かすみの海に」と詠んでをられる。

豊かな海を「人々と共に」つくってゆくよろこび、そのころのふれあひの中に生まれる豊かさ、この心のひろがりの中に、海もまた豊かさをとりもどしてゆくのであらう。

さまざまの小旗や花を打ち振りて歩む選手の晴れやかにして

福岡市の東平尾公園に新設された「博多の森陸上競技場」で、第四十五回国民体育大会秋季大会の開会式が行はれた。

史上二番目といはれる二万を越す選手団が入場行進を行ったが、選手の手にかざす色とりどりの県旗や国体旗の小旗、或いは富山の選手団はチューリップといふやうにそれぞれゆかりの花を手に入場する華やかな様子をおよみになった歌である。特に今回の国体からは日体協の通達もあって、従来の挙手の方式をやめたため、とりわけ工夫をこらした選手団が多く、そのためか殊の外陛下はこの入場行進をおよろこびになったやうである。

この日もまた紺碧の青空、晴れやかな選手の表情に、平成の未来を支へる若人の力強さを賞でたまうた一首である。

*

最後に今年一月十日、宮中「松の間」で行はれた歌会始の折の両陛下の御歌について一言

ふれておきたい。

いにしへの人も守り来し日の本の森の栄えを共に願はむ

平成元年（一九八九年）、四月二十九日、昭和記念公園で行はれた「みどりの日制定記念式典」の折のお言葉。昨年四月二十三日、「第一回全国『みどりの愛護』の集い」が大阪の花の万博会場で行はれた折、御臨席になった折のお言葉。そこには常に昭和天皇への追慕のおもひが繰り返し語られてゐる。

みどりといへば昭和天皇、その切なるおもひの中でおよみになった御製であれば、ここにもまた直接御表現になられてはゐないが、やはり昭和天皇の御姿が重なってくる。「いにしへの人」、遠い昔から日本の森を守りついできた人々、陛下はその系譜の最後に位置する方として恐らくは昭和天皇の御姿を思ひ浮べ給うてゐたに違ひない。「こりて世にいだしはすとも美しくたもて森をば村のをさたち」昭和二十二年（一九四七年）、皇室林野局が農林省に移管された時の昭和天皇の御製である。

明治以来、林野局が帝室になってゐたことの意味はかりそめではない。日本のみ社は常に森にかこまれ、日本の神々は常に鬱蒼と茂る森に、天そゝる樹々を伝うて天降りたまふのである。日本の森を守ること、それは世にいふ環境問題にとゞまらず、それを遙かに越えた日

本のいのちそのものを守ることである。

今上陛下が御即位後はじめてお示しになった御題が「森」であることの意味もあはせて心に刻むべきであらう。

いつの日か森とはなりて陵みささぎを守らむ木木かこの武蔵野に

皇后さまもまた、昭和天皇の武蔵野の御陵、今はまだ緑もまばらであるが、それがいつの日にか豊かな森の茂みとなって御陵の山全体を蔽ひつくす日がくることを念じたまふ。この御歌もまた、御題の「森」に託しながら、昭和天皇へのただならぬ思慕のおもひを表現された、忘れがたい一首であった。

【小柳陽太郎】

平成四年年頭ご発表

天皇陛下御製

春

中庭の白^{しろく}紅^{くれなゐ}の梅咲きてるやわざの日は春の氣満つる

雲仙岳噴火

人々の年月^{としつき}かけて作り来^こしなりはひの地に灰厚く積む

旅先に台風の報を聞く

台風^{こく}に故^{じん}国^{めい}の人命^う失せしことタイの地にして悲しくも聞く

タイ、マレイシア、インドネシア三ヶ国訪問を終へて

旅終へて立ちし空港は雨にして訪ひ来し国の乾きを思ふ

オランダ国女王陛下を国賓としてお迎へして

若き日に知り親しみしオランダの君なつかしく迎へ語りぬ

「ふれあいの森」育てむと集ひ来しあまたの人と苗植ゑにけり

第四十六回国民体育大会秋季大会 石川県

縄文の土器かたどりし炬火台に火はあかあかと燃え盛りけり

地方事情御視察の際 福井県

人々に迎へられつつひつぢ田の続く福井の旅行きにけり

第十一回全国豊かな海づくり大会 愛知県

くるまえび豊浜漁港に放てれば青き深みに泳ぎ行きけり

地方事情御視察の際 岐阜県

川の辺にあまたの人の集ひ来て振るともしびを遠く望みぬ

【平成四年歌会始】

風〔御題〕

白樺の堅きつばみのそよ風に揺るるを見つつ新年思ふ

皇后陛下御歌

立太子礼奉祝御題 春

赤玉の緒をさへ光りて日嗣ひつぎなる皇子みことし立たす春をことほぐ

雲仙の人びとを思ひて

火を噴ける山近き人ら鳥渡るこの秋の日日安やすからずるむ

多磨全生園を訪ふ

めしひつつ住む人多きこの園に風運びこよ木の香か花の香

【平成四年歌会始】

風〔御題〕

葉かげなる天蚕てんさんはふかく眠りみて櫟くぬぎのこずゑ風渡りゆく



立太子宣明の儀に臨まれ、両陛下の御前で決意のお言葉を述べられる皇太子殿下(平成3年2月23日、皇居・宮殿)

平成四年(一九九二年)元日、天皇陛下御製五首、皇后陛下御歌三首が宮内庁から発表された。

中庭の白紅しろくれなゐの梅咲きてるやわざの日

は春の気満つる

御製一首目は「春」と題され「中庭の白紅の梅咲きてるやわざの日は春の気満つる」と詠まれた。るやわざは礼業、礼式。この場合は立太子礼。二月二十三日立太子礼のめでたいその日、皇居の中庭には白梅紅梅が咲き、馥郁かぐやくと清香を放つてゐた。そこに、天地に漲る春を感得されての御詠である。

平成元年には、御父君昭和天皇の御喪に服され、「父君をあらきの宮に思ひつつ日

はたちゆきて梅は咲き満つ」と切々たる思ひを歌はれた。「梅は咲き満つ」と終止形で打切られた結びからは強いお悲しみが迫ってくる。このたびの御製は「春の気満つる」とのびやかに余情を残して連体形にされた。お喜びが余韻となつてひびいてくる。

御製を拝誦しながら、川出麻須美の昭和十七年（一九四二年）の作「ありがたき国土なるかな朝廷に紅梅咲きて雲の静けさ」を想起し、五十年の歳月を隔てて、あらかじめ御製に唱和申し上げてゐるやうな感慨に浸り、両首くりかへし味誦したことであつた。

赤玉の緒さへ光りて日嗣なる皇子とし立たす春をことほぐ

皇后陛下も「立太子札」（「瀬音」ご収録時「春」と改題）と題して「赤玉の緒さへ光りて日嗣なる皇子とし立たす春をことほぐ」と詠まれた。一誦ただちに想起するのは『古事記』豊玉毘売命の日子穗々手見命への献歌の「赤玉は緒さへ光れど」の語である。赤玉は赤く輝き、その緒までも輝いて、いま徳仁親王が正式に日嗣の御子とおなりになる春を、神話伝承の語を用ゐてお祝ひなされたのである。

古来「玉の緒」は「魂の緒」、いのちを象徴するものとされて来た。連綿悠久の皇統のいのちの緒を嗣ぎます太子の赤々とした輝きといったイメージがこの御歌に豊かに揺らめいてゐるのである。

人々の年月かけて作り来しなりはひの地に灰厚く積む

七月十日、両陛下はなほも火を噴き続けてゐる雲仙の被災地を見舞はれ、ワイシャツを腕まくりされ、スリッパも召されず、床の上に御膝を着かれ、近々と御顔を寄せて被災者を慰め励まされ、住民たちは嗚咽せんばかりに感動した。そのお姿はテレビでも大きく報道された。この一首、人々の多年にわたつての辛苦勞苦の地を埋めて、火山灰の厚く積もつた光景に御心を痛められ、その痛切な思ひをそのまま詠まれたのである。

火を噴ける山近き人ら鳥渡るこの秋の日日安からずむ

皇后宮もまた御帰京後の秋、渡り鳥をご覧になり、被災者の上を思ひやられたのである。

台風に故国の人命失せしことタイの地にして悲しくも聞く

御製三首目は台風の惨禍に御心を痛められての御詠。

両陛下は十月、東南アジア諸国を歴訪された。折しも台風十九号が日本列島各地に大災害をもたらし、陛下は旅路でこの悲報を聞かれた。「故国の人命」と漢語をそのまま用ゐられ、歌語に置き換へることのできぬ切迫した思ひを直叙されたのである。

旅終へて立ちし空港は雨にして訪ひ来し国の乾きを思ふ

四首目は東南アジアの旅を終へて、雨うちしづく日本の空港に下り立たれ、湿润の祖国に對比して、乾燥しきつてゐたそれら諸国の風土を痛々しく思ひやられ、「旅終へて立ちし空港は雨にして訪ひ来し国の乾きを思ふ」と詠まれた。自国に対すると同じやうにアジア諸国民の上を切実に思はれたのである。

若き日に知り親しみしオランダの君なつかしく迎へ語りぬ

五首目はオランダ国女王陛下を迎へての御製。若き日、即ち昭和二十八年（一九五三年）、当時、御年二十歳の皇太子殿下（現、天皇陛下）は欧米諸国を歴訪され、その折オランダ王室から受けられた好意をなつかしまれ、久しぶりの御対面を喜ばれたのである。女王の筑波研究学園都市視察には、両陛下が親しく案内され、浦安市のホテルまで御同車で見送られた。両陛下が国賓の地方視察に同行案内されたのは前代未聞のことであつたといふ。

すぐる大戦で、日本は敢然起つて、東亜を植民地としてゐた欧米諸国と戦つた。オランダとも戦つた。同国民の日本に対する怨恨は今も深い。また日本に活かを入れられ、独立したアジア諸国も、その国土が戦場となつたための被害は甚大で、それが今なほ根深く尾を引いて

ある。天皇陛下は、それらアジア諸国を歴訪して、友好親善のため御心を砕かれ、ひるがへつてオランダ女王を迎へ、その歓待に誠心誠意を尽くされた。

「西ひがしむつみかはして」は日本皇室伝統の御念願である。国際情勢の複雑に揺れ動く中で、すべての結び目としての天皇のお立場と御心労をあらためて偲びまつるのである。

*

この他、五首の御製が年末、宮内庁から発表された。

「ふれあいの森」育てむと集ひ来しあまたの人と苗植ゑにけり

五月二十六日、京都府宇治市「ふれあいの森」で第四十二回全国植樹祭が「みどりの祭典」と銘打って開かれ、陛下は北山杉の苗、皇后陛下は枝垂れ桜の苗を、各二本づつ植ゑられ、一万六千人の全国からの参加者がサッキ・ツツジ・カツラ等の苗を植ゑ、陛下は「『ふれあいの森』育てむと集ひ来しあまたの人と苗植ゑにけり」と詠まれた。

その率直な御詠風に、御父君昭和天皇の御詠風を思ひ、植樹祭の伝統をそのまま受け継がれての御わざをあらためて感銘深く思ふのである。

縄文の土器かたどりし炬火台に火はあかあかと燃え盛りけり

十月十二日には、石川県金沢市で第四十六回国民体育大会秋季大会が開かれ、両陛下は小松空港経由で行幸啓され、開会式に臨まれた。大会に先立って両陛下は県立博物館で真脇遺跡出土の見事な縄文土器を興味深く御覧になったが、大会の炬火台はその縄文土器を型取ったものであった。

能登半島真脇遺跡の縄文文化には「北陸の地熱」ともいふべき力が、はねかへり渦巻いてゐる。その迫力ある姿の炬火台に今点火された火は燃えさかつてゐる。それを「縄文の土器かたどりし炬火台に火はあかあかと燃え盛りけり」と詠まれた。「火」は太古から現代に至るまで人類生活の「揺らぐ要^{かなめ}」である。それを詠まれた御製に、縄文以来数千年の日本人の生活の歴史をひたひたと思ひ味はふのである。

人々に迎へられつつひつち田の続く福井の旅行きにけり

十四日、両陛下は石川県から隣の福井県まで御足を延ばされ、この御製をもとのされた。

北陸は早場米地帯。すでに刈り取られた、広々とした田^{たのち}面は、^{ひつち}穧（刈り株から再び生えてくる稲の小さな葉）に点々と彩られてゐた。「冬とはいへど日の照る水田に、みどりの小草、さびし小春日」（三井甲之作長詩「沁刻」の一節）といった光景である。人々の歓呼にお答へになりながら、ひつち田の続く北陸の風景をしみじみと御覧になったのであらう。「旅行きに

けり」と、ひつぢ田の緑のやうな柔らかな御詠嘆である。

くるまえび豊浜漁港に放てれば青き深みに泳ぎ行きけり

十月二十七日には第十一回全国豊かな海づくり大会が愛知県豊浜漁港で開かれ、全国の漁業関係者ら約一万人が出席、クルマエビやクロダヒの稚魚を海に放流した。両陛下は休む間もなくこの大会にも臨席され、手づからエビの稚魚を放されたその時の御製である。

「放てれば」は「放てり」の已然形に「ば」のついた形であるが、「放てば」よりも、その動作が遥かに強い。放された、透きとほるやうに白い幼いエビが、波に揺られながら、真青な海の深みに融けこむやうに遠ざかってゆく。その感じを鮮明に、しかも縹渺ひょうびょうと「青き深みに泳ぎ行きけり」と詠まれた。「放てれば」といふ強い語がはづみとなつて、一層下の句が柔らかく余韻をかなでてゐるのであらう。

かつて陛下は、皇太子時代の昭和三十七年（一九六二年）、「舷かたぐりに見入る朝海の紺青をそうだがつをのつらぬき走る」と詠まれた。同じ紺青の海であるが、たくましい成魚が貫き走る勇壮なさまと、みづみづしい幼生が揺れ遠ざかってゆく可憐なさまとが対照的である。また昭和二十四年（一九四九年）には「静かなる海の面おもてにしばし波をたて押し寄せ来るうろくづの群」と詠まれた。押し寄せてくる魚群と、遠ざかりゆく幼生群との対照も興味深い。

ハゼを研究テーマとされる陛下には、魚類に対するいきいきとしたお歌が多い。そしてこの魚たちこそ日本人の食生活を支へる重要な海の幸、水の幸であることをあらためて思ふのである。

川の辺にあまたの人の集ひ来て振るともしびを遠く望みぬ

愛知の大会に続いて両陛下は岐阜県に行幸啓された。十月二十九日夜、陛下お泊りのホテルの対岸、長良川の左岸河原に人々は二千個の提灯ちやうちんを打ち振り熱烈に歓迎申し上げた。両陛下はホテルから答札に立たれた、その折の御製である。

昭和天皇は、民の振る灯、民のともす灯について幾たびも御製を詠まれた。その先帝御製に合はせて今上御製を拝誦し、皇室を敬慕する民の魂が、光の輪となり光の渦となつて続いてゆくことを実感するのである。

めしひつつ住む人多きこの園に風運びこよ木の香花かの香

なほ、新春ご発表の皇后陛下のいま一首は、三月四日、国立療養所多磨全生園を訪ねられた時の御歌である。同園は明治四十二年（一九〇九年）創設の日本最古のハンセン病療養施設で、両陛下は昭和五十一年に続いて二回目のお見舞であった。

御歌は、目の見えぬ人の多いこの園に、木の香花の香が風に運ばれて来て、不幸な人々の慰めとなることを祈念されたもの。いかにも後の宮らしい柔らかく美しい調べである。

畏れ多いが、皇后陛下の皇太子妃時代の御歌には、古来の皇室のお歌の調べとはやや異なる調べもあるやうに拝したが、昨今の御歌は皇室伝統の調べに融けこまれ、しかもそこに従来になかった新鮮な感覚をみづみづしく流露なさっていると、うれしくありがたく拝するのである。

*

以上の新春発表御製五首・御歌三首をすべて掲載した中央紙は産経新聞ただ一紙（地方紙では北陸中日・北日本・富山も全首掲載）。朝日は御製・御歌各一首。読売は御製二首・御歌一首。日経は御製五首で御歌なし。毎日には全く掲載せず。また年末ご発表御製五首のうち三首は産経十二月二十八日紙上に掲載されたが、他紙には一首も見当たらず（同じ新聞でも版によつて紙面の異なることがあるので、以上はどこまでも富山で私の点検した版についてである）。

【廣瀬 誠】

平成五年年頭ご発表

天皇陛下御製

戦没船員の碑

いくさび
戦日に逝きし船人を悼む碑の彼方に見ゆる海平らけし

理化学研究所

新たななる機器用ひつつ研究所に外国人も交りいそしむ

第二十五回オリンピック競技大会

日の本の選手の活躍見まほしく朝のニュースの画面に見入る

西安

いにしへの我が国人の踏みし地を千年を越えて我ら訪ふ

上海

笑顔もて迎へられつつ上海の灯ともる街を車にて行く

第四十三回全国植樹祭 福岡県

夜須^{やす}高原に苗植^えゑにけり人々の訪^まひて楽しむ森とならまし

第四十七回国民体育大会秋季大会 山形県

車椅子の人も交りて選手らの入場の様見るはうれしき

第十二回全国豊かな海づくり大会 千葉県

荒波の寄せ来る海に放たれしひらめはしばし漂ひ泳ぐ

【平成五年歌会始】

空〔御題〕

外国の旅より帰る日の本の空赤くして富士の峯立つ

(年頭ご発表に含まれてゐない前年の御製)

日本遺族会創立四十五周年にあたり

戦に散りにし人に残されしうからの耐へしながとせ思ふ

皇后陛下御歌

草生

春の光溢るる野辺の柔かき草生くさぶの上にみどり児を置く

桐の花

やがて国敗やぶるるを知らず疎開地そかいちに桐きりの筒花つづばなひろひるし日よ

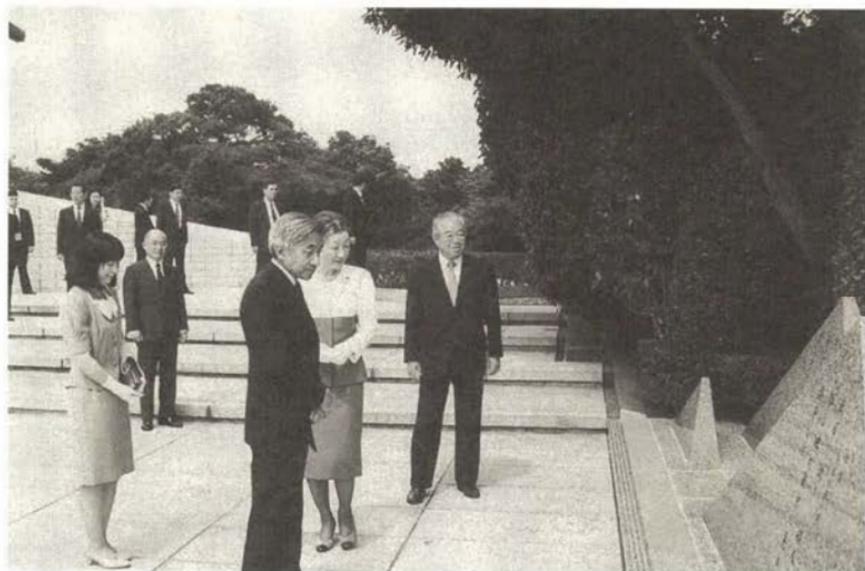
シヤトル

名を呼ぶはかくも優しき宇宙なるシヤトルの人は地の人を呼ぶ

【平成五年歌会始】

空〔御題〕

とづくにの旅いまし果て夕映ゆふはゆるふるさとの空に向ひてかへる



天皇・皇后両陛下は終戦50周年の折にも紀宮殿下を伴はれて戦没船員の碑へご参拝になった(平成7年9月14日、写真右の三角形の碑は御製碑と御歌碑)

戦日いくさびに逝いきし船人を悼む碑の彼方に
見ゆる海平うみらけし

平成四年(一九九二年)一月二十日、横須賀の観音崎公園内にある戦没殉職船員の石碑に、両陛下がお参りになった時の御製ぎよせいです。ここには、大東亜戦争で戦没した船員及び戦後の海難事故で殉職した船員、六万二千人余りのみ霊がまつられてゐます。昭和四十六年(一九七一年)三月に建立され、五月六日に追悼式が行はれ、以来毎年五月十五日に追悼式が行はれてきました。「戦日に」ではじまるこのお歌の主語は「海」であり、「平らけし」が述語です。一句から四句までは「海」にかかる修飾語です。

石碑の彼方に、波も静かに凪いでゐる冬の太平洋の海を御覧になられつつ、過ぎ去りし戦ひの日々、逆巻く荒海のなかで、資源のない日本への物資の輸送に従事して殉職された私達の父祖を、万感の思ひで偲んでいらっしやる、この陛下のお姿をお偲び申し上げるだけで、感動つきぬものがあります。何と慈愛深い、痛切な思ひに満ちたお歌でありませうか。お気持ちこそそのまま直叙なさつてをられるだけに、よむ人に与へる感動は大きいのです。

二句目の「逝きし船人を」は字余りで、「逝きし船人」と七文字にしてもよいやうに思ひますが、むしろ「船人を」の「を」があることにより、おもひが深められ、緊張した調べになつてゐるやうに思はれます。技巧よりも、ご自分のお気持ちを正確に表現なさることを大切にしてをられる陛下のお人柄が偲ばれ、今の世の中をもつとも誠実に生きていらっしやるのは陛下であるとおつくづく思はしめられます。

昭和四十六年五月に「戦没船員の碑」の追悼式にお出ましになられた皇后陛下（当時は皇太子妃殿下）は、次のやうな絶唱とも云ふべき御歌をお詠みになつてゐます。平成四年五月六日、このお歌を刻した歌碑の除幕式が皇太子殿下ご臨席のもとに行はれました。

かく濡れて遺族らと祈る更にさらにひたぬれて君ら逝き給ひしか
〔昭和四十六年〕

新たなる機器用ひつつ研究所に外国人も交りいそむ



埼玉県和光市の理化学研究所をご視察になる今上陛下(平成4年3月12日)

両陛下は、平成四年三月十二日に埼玉県和光市にある特殊法人・理化学研究所を、ご視察になりました。同研究所の仁科記念棟で重イオン科学用加速器や、世界最大の大型放射光施設の説明を受けられたほか、脳の仕組みを研究する思考機能研究棟などを約一時間ご視察、その後、研究職員と約四十分にあつたご歓談なさいました。

お歌には難しい言葉は一つもありませんので、内容は誰にでも理解できます。研究所を御覧なされたご様子を具体的に、一息にお歌ひになつてみます。最先端の機器を駆使しながらいそしんでゐる多くの人たちが、陛下の慈愛あふるるお眼差しに明るく照らされてゐます。

「外国人も交りいそしむ」とのお言葉に

は、日本人が諸外国の人々と仲良く共に生きて欲しいとの念ひが感じられ、とりわけ、外国人と付き合ふ機会の多い私は、陛下のお気持ちに葉にして、業務にいそしみたいといふ新たな決意が湧いてまゐります。

日本の選手の活躍見まほしく朝のニュースの画面に見入る

スペインのバルセロナで開催されたオリンピックにおける岩崎選手、有森選手、森下選手ら日本選手の活躍に私たちが心を躍らせたことは記憶に新しいところです。国務ご多忙のなかを日本選手の活躍如何にとじつと朝のテレビを御覧になつてをられる、陛下のお姿を想像するだけで、陛下のご存在が大変身近に感じられ、無性に嬉しくなつてまゐります。

陛下の、日本の若人にお寄せになるお心がひしひしと感じられます。

いにしへの我が国人くにびとの踏みし地を千年を越えて我ら訪ふおせとな

陛下は平成四年十月二十六日に西安をご訪問になりました。陛下は、十月二十三日に北京において、楊主席主催の正餐に臨み、西安と上海に関し、次のお言葉を述べられました。

「貴国と我が国との交流の歴史は古く、特に、七世紀から九世紀にかけて行われた遣隋使、遣唐使の派遣を通じ、我が国の留学生は長年中国に滞在し、熱心に中国の文化を学び



北京市郊外の万里の長城「八達嶺」をご視察になる両陛下(平成4年10月24日)

ました。両国の交流は、そのような古い時代から長い間平和裡に続き、我が国民は、長年にわたり貴国の文化に対し深い敬意と親近感を抱いてきました。(中略)

私共は北京のほか西安と上海を訪れることになっております。西安では、かつて我が国から、航海の危険を冒しつつ唐に渡り、長安で中国の文化を学んだ遣唐使や留学生の労苦をしのびつつ、貴国の歴史に触れたいと思います。また、上海では、貴国の新たな発展の息吹に触れることができるでありましょう。

聖徳太子の隋の煬帝やうたいに宛てた国書に示されるごとく、遣隋使は、対等外交を推進すべく身の危険をかへりみず遙かな道のりを

渡航した私たちの祖先です。陛下が、我が国と彼の国とが、対等に外交を行ってゐた隋や唐の時代からの歴史を深くお心にとどめて、訪中されたことがよく理解出来ます。

このお歌の「千年を越えて」といふ大胆にして率直なご表現にこめられた意味は実に深く、千三百年以前から、果敢に対等外交を推進した遣隋使が当時の長安（今の西安）の地を踏んだことをお偲びになつてをられ、この陛下のお姿にゆるぎなき信頼を覚えさせられます。

笑顔もて迎へられつつ上海の灯ともる街を車にて行く

十月二十七日の夕刻に両陛下は、御宿泊所からお車で上海の街をご見学になりました。重きおつとめを果たされ、ご訪中も終りの段階で、上海の人々のあたたかい笑顔に迎へられつつ方々の上海の街をお車で行かれたときのお歌だと拝察されます。

陛下はご帰国に当たり「人の心と心は誠意を持って接すれば、国境を越えて通じると考えています」と述べられましたが、一昨年十一月にインドネシアをご訪問の際、陛下を間近に拝した現地の人々の間に感動の渦が湧き上がったのと同じ印象を、上海の人々にも残されました。このお歌には、ご緊張の連続であられたであらうおつとめから解放され、上海の人々との出会いを心から喜び安らいでいらっしやる、陛下のご様子がうかがえます。



ご即位後、初のご外遊でインドネシアのボロブドール寺院をご見学なされる両陛下(平成3年10月5日)

夜須^{やす}高原に苗植^なえにけり人々の訪^まひ
て楽しむ森とならまし

戦乱により荒廃した国土に緑を回復させるため、昭和二十五年（一九五〇年）に昭和天皇・皇后両陛下のご臨席を仰いで始まった全国植樹祭が昨年第四十三回を数へ、五月十日、今上天皇・皇后両陛下を御迎へして、福岡県の南に位置する夜須^{やす}高原において行はれました。

天皇陛下は杉の若木を、皇后陛下は山桜の若木を、それぞれ二本づつお植^くえになり、櫻と桜の種子をお手蒔^まきなさったと当日の新聞は報じてゐます。

このお歌はその全国植樹祭に両陛下がご臨席なされた時のお歌です。このお歌は一

首一文になってゐますが、「苗植多にけり」との、緑化に対する陛下の強いご意志のご表現と、「人々の訪ひて楽しむ森とならまし」の「ならまし」といふ強いご念頭のご表現により、全体がつよきしらべに統べられてゐます。国民と常に喜びも悲しみも共になさつてをられる陛下のお気持ちに深く感動させられます。

新聞に掲載されたお写真では、陛下が横向きに杉の若木を木の鋏くはにてお植ゑになり、そのお姿を、やはり木の鋏をお持ちになられた皇后陛下がにこやかに御覧になっていらつしやいます。陛下のお姿と皇后陛下の笑顔が、快晴に恵まれた夜須高原の庭園に咲いた赤、黄、桃色の草花、それにお手伝ひの少女の服の緑と渾然一体となつて実に気高く、美しく、見てゐるだけで心が洗はれる思ひがします。

車椅子の人も交りて選手らの入場の様見るはうれしき

昨年十月四日に山形県天童市の総合グラウンドで行はれた「べにばな国体」秋季大会の開会式に、両陛下がご臨席なさつた時のお歌です。意気揚々として入場してくる選手団に交り、車椅子で入場してくる選手を、はつきりと御覧になつてをられる陛下のご様子が目に浮かんできます。「見るはうれしき」とお気持ちそのままの率直なご表現によつて、私たちも陛下のお気持ちに直にひきこまれるやうに感じられます。

陛下が、皇太子殿下の時代にお詠みになった次のお歌（全国身体障害者スポーツ大会のために岩手県と栃木県を訪れたときのお歌と拝察されます）と合はせよむとお気持ちさがさらによくわかります。

足並を揃へ入り来る身障者陸奥の競技場拍手鳴り渡る 「昭和四十五年」

うなりゆく車椅子の音きしる音籠球場は声援に満つ 「昭和五十六年 歌会始御題「音」」

荒波の寄せ来る海に放たれしひらめはしばし漂ひ泳ぐ

勝浦市の守谷海岸もりやで昨年十二月八日、天皇・皇后両陛下ご臨席の下、「第十二回全国豊かな海づくり大会」が開かれ、両陛下はマダヒ、スズキ、ヒラメの稚魚を放流なさいました。守谷海岸は千葉県の東に位置し太平洋に面してあります。水槽で成魚となり、荒波を知らないヒラメが、大海に放たれ、とまどひながらしばし漂つてゐる、そのヒラメに寄せられる、生物学者でもありません、陛下の慈しみ深い純真無垢なお心は譬たとへやうもなく、気高く美しいお心は歴代の天皇様の御製に仰ぎ見るお心です。

前日の十一月七日、両陛下は千葉県にある幕張メッセに行幸啓なさいましたが、産経新聞の十二月二十八日付千葉版は両陛下が幕張メッセ玄関前にご到着された時の様子を次のやうに報じてゐます。

〔両陛下がゆっくりと車を降りられると、谷底から上がってくるようなため息の波。それがやむと同時に、今度はものすごい歓声である。日の丸の小旗を破れんばかりに振る人々の顔が、目にとびこんできた。気が動転した。天皇制、日の丸、君が代……そんな言葉は頭の中から消えた。残ったのは両陛下を一目見ようと集まった人たちの純粋な気持だけだった。〕

千葉県人として、本当に嬉しい記事でした。

皇后陛下の御歌

春の光溢るる野辺の柔かき草生くさふの上にみどり兎を置く

やがて国敗やぶるるを知らず疎開地そかいちに桐きりの筒花つっぱなひろひるし日よ

名を呼ぶはかくも優しき宇宙なるシャトルの人は地の人を呼ぶ

皇后陛下のお歌は、女性らしい、繊細なお心のおふるる自然なお歌です。特に第三首目の

お歌で、毛利さんが外国人に交り、シャトルで宇宙を旅してゐる最中に地上にゐる人の名前を呼んだ声を「かくも優しき」と示されたお言葉には、宇宙をも含むすべてをつつみこむやうなおほらかなやさしいお心が感じられます。

*

ご発表の御製・御歌及び関連記事を入手することは極めて難しく、年頭ご発表の御製・御歌を全部掲載したのは産経新聞のみで、特に十二月二十八日ご発表の行幸に関する御製に至っては、ほとんどの新聞に報道されませんでした。誠に悲しく思ひました。

【澤部 壽孫】

平成六年年頭ご発表

天皇陛下御製

沖繩平和祈念堂前

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

奥尻島

壊れたる建物の散る島の浜物焼く煙立ちて悲しき

故ポードウワン国王御葬儀参列

四十年をむつみ過ごししベルギーの君まさずして宮訪ねけり

ベルリン

東西を隔てし壁の払はれて「歓喜の歌」は我を迎ふる

勤勞奉仕の人々に会ひて

地方より奉仕作業に來し人に痛みつつ聞く長雨のわざ

第四十四回全国植樹祭 沖縄県
弥勒世ミルケよ願ユニガテイて揃スリりたる人たと戦場の跡イクサバに松アトウニよ植マツゑたん

第四十八回国民体育大会秋季大会 香川県・徳島県

香川の火徳島の火をかかげつつ選手ら二人炬火台に向かふ

第十三回全国豊かな海づくり大会 愛媛県

県の魚まだひの稚魚を人々と共に放しぬ伊予の海辺に

【平成六年歌会始】

波【御題】

波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎へ祝はむ

皇后陛下御歌

皇太子の結婚を祝ふ 御兼題「青葉の山」

たづさへて登りゆきませ山はいま木木青葉してさやけくあらむ

御遷宮の夜半に

秋草の園生そのふに虫の声満ちてみ遷りうつの刻次第ときに近し

移居

三十余年さんじふよねん君と過とごししこの御所に夕焼の空見ゆる窓あり

【平成六年歌会始】

波〔御題〕

波なぎしこの平たひらぎの礎いしずえと君らしづもる若夏うりずんの鳥



沖縄平和祈念堂で遺族代表にお声をかけられる両陛下(平成5年4月23日)

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけ
き海その果てに見ゆ

天皇・皇后両陛下は平成五年(一九九三年)四月二十三日から二十七日まで、第十四回全国植樹祭へのご臨席のため、沖縄をご訪問になった。両陛下は直ちに南部戦跡へ向はれ糸満市摩文仁いとまんしまぶにの戦没者墓苑にご到着、摩文仁ヶ丘にのぼられて、沖縄戦で散華さんげされた十八万余柱が眠る納骨堂前の参拜所で深々と御一礼をなされたのである。沖縄の歴史上、天皇陛下としての初めてのご訪問は実に「英霊への御祈り」から始まった。

続いて沖縄平和祈念堂に移られ、陛下は遺族の代表約百五十人を前に「お言葉」を

述べられた。この御製は、その時のことをお詠みになったお歌である。「激しかりし」は字余りであるが、そこにこもるお心持を拝察しなければ、と思ふ。

日本の総力を挙げての最後の戦ひが沖繩戦であった。事実、沖繩において米軍の激しい艦砲射撃と地上戦に加へ、極度の食糧不足のために住民を含む二十万人が亡くなつてゐる。その歴史の重みが、「激しかりし」の五文字には込められてゐる。

激しかつた戦場の跡で往時を偲びつつ、英霊にお祈りになり、しばし佇まれて、かつての戦場を眺めていらつしやる、御視線の彼方に、何事もなかつた如く、波穏やかに風いでゐる海、その海を見入られたのであらうか。「激しかりし戦場の跡」と「平らけき海」に、「往時」と「現在」、「動（戦争）」と「静（平和）」とが鮮やかに、かつ見事に、一首に続べられてゐる。

往時の「激しき戦ひ」を偲びつつ、現在の「平らけき海」を、万感の思ひで御覧になつてをられる陛下のお姿が、眼に浮かんでくる。

壊れたる建物の散る島の浜物焼く煙立ちて悲しき

昨年七月十二日に発生、ほとんどの建物を壊滅させ、二百人以上の人命を奪つた奥尻島おくしりとうの大地震と津波による災害は、いまだ記憶に新しい。七月二十七日に現地をご訪問になつた両



奥尻島・青苗地区で被災者を激励される両陛下(平成5年7月27日)

陛下のお姿に、奥尻島の人たちがどれほど
勇気づけられたかは、想像に難くない。島
原の人たちもさうであった。「煙立ちて悲
しき」の「煙立ちて」との具体的御表現
と、「悲しき」と直叙された結びが素晴ら
しい。

国民の悲しみをご自分のお悲しみとなさ
る両陛下の御心に、我ら民草は生きる力を
得るのである。昭和天皇の「よろこびもか
なしも民と共にして年はすぎゆきいまは
ななそぢ」との御製が思ひ出される。かか
る皇室をいただいでゐる我々国民、日本人
としての幸を思はずにはをられない。

よそとせ
四十年をむつみ過ごししベルギーの
君まさずして宮訪ねけり

天皇・皇后両陛下は、昨年八月六日から九日までボードゥワン国王御葬儀（八月七日）に参列されるため急遽ベルギーをご訪問になった。国王は、七月三十一日に、六十四歳の若さで急逝されたのである。

陛下は四十年前の昭和二十八年（一九五三年）、皇太子殿下の時代、英国女王の戴冠式に参列された際にベルギーを初めてご訪問になり、ボードゥワン国王にお会ひになってをられる。爾来四十年（「よそとせ」とよむべきであらう）に亘って、数々の機会に御交誼を温めて来られた。ボードゥワン国王は昨年四月にも訪日され、陛下と楽しく一夜を過ごされてゐる。そのお立場、御年齢から見ても、陛下の数少ない、外国のご友人であられたらう。四十年來のご友人であられたその国王の御葬儀に御参列になった、陛下のお悲しみをただお慰び申し上げるばかりである。

東西を隔てし壁の払はれて「歓喜の歌」は我を迎ふる

平成五年九月三日から十九日までの十七日間にわたり、両陛下はイタリア、ドイツ、ベルギーの欧州三カ国をご訪問になった。

昨年九月五日、両陛下が訪問されたのは、「統一後のドイツ」であった。陛下は皇太子殿下の時代、昭和二十八年に西ドイツをご訪問になってゐる。人間の自由を長きにわたり束縛

し、猛威をふるった共産主義は終焉をつけ、ベルリンの壁が取り払われたのは平成元年（一九八九年）十一月九日のことであった。他国により分断されてゐたドイツが、統一の偉業を成し遂げたのは、壁が撤去されて一年に満たぬ、平成二年の十月三日であった。

ドイツの人々は、ベルリン少年少女合唱団によるベートーベンの第九・「歓喜の歌」の合唱でもって、両陛下をお迎へしたといふ。この御製にはまた、奇跡の統一を成し遂げたドイツ国民の喜びを、御自分の喜びとして分ち合つていらつしやる、陛下のひろやかなお気持ち

が拝される。

地方より奉仕作業に来し人に痛みつつ聞く長雨のわざ

「痛みつつ聞く」のお言葉にこのお歌の中心がある。国民の苦勞に寄せられるお心の深さをしみじみと思ふのである。

昨年は冷夏で、日本各地で農産物に甚大な被害が出て特に東北地方の被害はひどかった。戦後の道徳は退廃し、人倫は無くなったやうに云ふ人もあるが、さうではない。皇室を崇め敬ひ、自分の生きる拠り所と思つてゐる人も多く、皇居の勤勞奉仕に全国各地から人々がびつきりなしに訪れてゐる。この御製の勤勞奉仕の人は東北地方のお百姓さんであらうか。

自分の悲しみは悲しみとして、陛下のお側に侍る喜びにあふれて、奉仕作業に従事して

る国民、そのそば近くお立ちになり、長雨がもたらした被害の状況をお聞きになる陛下、相
当にひどい被害であることを、胸を痛めつつ、お聞きになってゐる、ここに、まさに日本の
伝統に脈々として流れて止まない君臣一体の美しい姿がある。

ミルクユニニガテイスリケル
弥勒世よ願て揃りたる人たと戦場の跡に松よ植ゑたん

一首目の御製拝誦で述べた如く、昨年四月二十五日、第四十四回全国植樹祭に、天皇・皇
后陛下はご臨席になり、陛下は県木「琉球松」の苗木を、皇后陛下は「福木」の苗木をそ
れぞれ御手植ゑになった。その時のことをお詠みになったのがこの御製である。

この御製は琉歌である。陛下は、沖縄の歴史や文学をよく研究されてゐて、沖縄の万葉集
ともいへる「おもろ」を学び、琉歌にも造詣が深く、詠まれた琉歌は三百首にもものぼると云
はれてゐる。

「ゆたかな世を念願しつつ、沖縄の人々と一緒に、沖縄のかつての戦場の跡地に万感の思
ひで琉球松を植ゑた」といふ意味である。「弥勒世よ」の「よ」、「松よ」の「よ」は「を」
であり、「植ゑたん」の「ん」は感嘆の助詞である。「弥勒世」とは「弥勒菩薩がこの世に下
り、衆生を救ふと信じられてゐることから、沖縄では「ゆたかな世」すなはち「豊年満作の
世」といふ意味に使はれてゐる。

植樹祭の行はれた糸満市の南部戦跡の一角に位置する米須・山城地区は、摩文仁ヶ丘のすぐ隣に位置し、激しい艦砲射撃で焼き尽され、焦土と化し、四十七年を経た今でも木が生えないのだといふ。かつての激戦地、この米須・山城に沖繩の人々とご一緒に植樹を終へられた、陛下の御感慨は、どんなにか深いものであられたらう。

陛下の沖繩にお寄せになる御心は、今に始まったのではなく、長く、深い。両陛下は、皇太子・同妃殿下の時代に五回も沖繩を訪問されてゐる。その中には昭和五十年（一九七五年）、左翼過激派が跋扈する中、初めて沖繩をご訪問になり、ひめゆりの塔で火炎瓶を投げつけられたご体験もおありになる。

そのおぞましき日の夜、陛下は、「私達は沖繩の苦難の歴史を思い、沖繩戦における県民の傷跡を深く省み、平和への願いを未来につなぎ、ともどもに力をあわせて努力していきたいと思います。払われた尊い犠牲は、一時の行為や言葉によってあがなえるものではなく、人々が長い年月をかけて、これを記憶し、一人ひとり、深い内省の中にあつて、この地に心を寄せつづけていくことをおいて考えられませんか」と、お述べになつてをられる。

この御製を拝誦しつつ、しきりに思ひ出されたのが、ご病床で「もう駄目か」と沖繩ご訪問を最後まで念願された昭和天皇のことであつた。「思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを」（昭和六十二年）に拝される昭和天皇の御遺志はまさしく受け継がれ、

重きつとめを陛下御自ら果たされてゐることを、私たちは心に深く刻み込むべきである。

香川の火徳島の火をかかげつつ選手ら二人炬火台に向かふ

天皇陛下は、昨年十月二十三日から二十七日まで、第四十八回国民体育大会（東四国国体）秋季大会の開会式にご臨席のため香川、徳島両県に行幸あそばされた。御体調をくづされた皇后陛下のお姿はなく、御一人の行幸であった。

「香川の火」、「徳島の火」との具体的な御表現は、陛下ならではのものであり、両県への深い愛情が感じられる。同時に、聖火を掲げて炬火台に向かふ選手たち、若人にお寄せになるお気持ちが生きたと伝はつて来る。

県の魚まだひの稚魚を人々と共に放しぬ伊予の海辺に

天皇・皇后両陛下は、昨年十一月六日から十日まで、愛媛、高知両県に行幸啓あそばされた。十一月七日、愛媛県伊予市での「第十三回全国豊かな海づくり大会」にご臨席になり、愛媛県の魚「まだひの稚魚」などを放流された。

陛下はお心を「まだひの稚魚」と「人々」と「伊予の海辺」に寄せられ、放流などの人々の努力により、海の資源が豊かになり、海の環境が改善されることを念願してをられる。一

昨年十二月八日、勝浦市では御製「荒波の寄せ来る海に放たれしひらめはしばし漂ひ泳ぐ」とお詠みになってゐる。

皇后陛下の御歌について

皇后陛下は一部マスコミの心なき中傷により、御体調をくづされ、お言葉が出なくなりました。まことに申し訳なく、心痛むばかりである。例年の多忙なご日程に加へ、国民が待ちに待った、皇太子殿下の御成婚といふ一大慶事があつた。

国と国民を思ひつつ、重き努めを日々果たされてゐる両陛下、まして、民間から皇室の一員となられた皇后陛下のご苦勞を思ふとき、心なき仕打ちをするのは、日本人とは云へまい。一日も早い御平癒を切に祈願するものである。

たづさへて登りゆきませ山はいま木木青葉してさやけくあらむ

この御歌は、皇太子殿下と同妃殿下の六月九日の御成婚をお祝ひなされたお歌である。御兼題「青葉の山」とは、御成婚の前夜に「青葉の山」の御題にて皇族方がそれぞれにお歌を詠まれたことをさす。



結婚の儀に臨まれる皇太子徳仁親王殿下(平成5年6月9日)

時まさに木々の青葉がさやかな季節、お二人の門出を山登りに譬へてお詠みになったお歌で、お二人の門出をお祝ひなさる、優しく、細やかな、さはやかなお気持ちがあふれてゐる。「たづさへて」のお言葉に、お二人への温かい御眼差しが感じられる。

秋草あきくさの園生そのふに虫の声満ちてみ遷りうつの刻次第ときに近し

二十年毎に行はれる伊勢神宮の第六十一回「式年遷宮」の儀は、昨年十月二日に内宮ないくうで、五日に外宮げくうで執り行はれた。伊勢において「式年遷宮」の最も重要な儀式である「神遷しの秘儀」が行はれる二日と五日の同時刻に、天皇陛下におかせられて

は、恭々しく皇居内の神嘉殿しんかでん前の南庭上に下り立たされ、はるか伊勢の方を、地に伏して、御遥拝あそばされた。皇祖御礼拝のゆかしき御作法である。皇后陛下は赤坂御所で御遥拝になつた。

日本の長い歴史の中に、絶えることなく続けられて来た、重々しくも深々としたみ祭、そのみ祭が近づいて来た緊張感と、庭に鳴く虫の声とが一体となり清らかな御調べとなつてゐる。日本文化継承の調べ、といふべきか。

三十余年君と過さんじふよねんごししこの御所に夕焼の空見ゆる窓あり

両陛下は昨年十二月八日に、赤坂御所から皇居内の御所にお移りになつた。三十年余りの間お住ひになつてゐた赤坂御所（旧東宮御所）に別れを告げられるとき、夕焼けの見える御所の一部屋の窓を思ひだされてゐる、女性らしい、やさしきお歌である。

【澤部 壽孫】

平成七年年頭ご発表

天皇陛下御製

硫黄島 一首

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

戦火に焼かれし島に五十年も主なき蓖麻は生ひ茂りぬ

豊受大神宮参拝

白石を踏み進みゆく我が前に光に映えて新宮は立つ

マヨルカ島

スペインの君らと共に乗る馬車に人ら手を振る高き窓より

一年を顧みて

豊年を喜びつつも暑き日の水足らざりしいたづき思ふ

たかはら
第四十五回全国植木祭 兵庫県
高原の風さはやかに吹ける中人らと集ひ苗木植ゑけり

第四十九回国民体育大会秋季大会 愛知県

国体の炬火きよかは再び入り来ぬ四十年よそとせを経てこの会場に

第十四回全国豊かな海づくり大会 山口県

手渡しし稚貝稚えびを手に持ちて若き海人あまびと港出で行く

【平成七年歌会始】

歌〔御題〕

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

皇后陛下御歌

硫黄島

慰霊地は今安らかに水をたたふ如何いかばかり君ら水を欲ほりけむ

過疎地

高齢化の進む町にて学童の数すくなきが鼓笛を鳴らす

植樹祭会場 兵庫県村岡村

村

今一度訪ひたしと思ふこの村に辣菲の花咲き盛るころ

鳥取県福部村

【平成七年歌会始】

歌〔御題〕

移り住む国の民とし老いたまふ君らが歌ふさくらさくらと

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

初春を迎へ、今年もまた天皇陛下の御製、皇后陛下の御歌を拝することができた。今年には戦後五十年の節目を迎へる年であるが、その年頭にまづ硫黄島の二首の御製を拝し、深く胸を打たれたのであった。

昭和二十年二月、米軍は日本本土爆撃の拠点として重要な位置にある小笠原諸島、硫黄島を総攻撃した。日本にとっては国土防衛上必須の地であり、守備する二万数千の兵は決死の防衛戦を戦ったのであった。米軍の圧倒的な戦力に対し、日本軍はこの島に二八キロメートルもの壕を掘ってこれに備へようとした。硫黄島はその名の示すごとく硫黄のたち上る灼熱の地であり、壕の中の温度は五〇〜六〇度にも達し、作業は難航を極めた。水はほとんどなく、唯一のわき水も硫黄の臭気が強く熱くたぎつてゐたといふ。

かうして開始された戦闘において、米軍のすさまじい攻撃に耐へつつも日本兵二万百余名が玉碎し、硫黄島は遂に米軍の占領する所となった。戦後、遺骨の収集努力が行はれたにも拘らず約五千といふ日本軍の兵士は、未だ地下壕の中に眠られたままになつてゐるといふ。

小笠原諸島復帰二十五周年に当る昨年二月、天皇・皇后両陛下は硫黄島を訪ねられた。硫黄島は東京から実に一二〇〇キロ、折しも降りしきる大雪の中を御出発、海上自衛隊輸送機

でお渡りになったが、輸送機内の騒音はすさまじく、その御不便をおしての行幸啓であった。二月十二日、天山の慰霊碑を拝礼された両陛下は、側にたたへられた水を汲んで碑の上に注がれ、白菊をお供へになり、御霊を慰められた。

第一首目の冒頭「精根を込め戦ひし」といふ凝縮された言葉の強さ、激しさ。陛下がこのやうに表現されることは稀である。国土を守る戦ひに全身全霊を込め、そして亡くなつていった兵士と思ひをひとつにしようとされる大御心が伝はつてくるのである。その兵たちの遺骨は故郷に帰ることもなく、灼熱の地下に埋もれたままになつて眠つてゐる。そのことに深く思ひを寄せられ、陛下は「悲しき」と直截にお詠みになるのである。

戦火いくさびに焼かれし島に五十年いそとせも主なき菟麻ひまは生ひ茂りぬ

「戦火に焼かれし島に」——島が焼かれるとは想像を絶する表現であるが、事実、米軍の砲撃はすさまじく、投じられた爆弾は島全体を蔽ふほどであつたといふ。かつて硫黄島に住んでゐた人々は、戦時中に強制疎開を命じられ、日本軍が敗れた後は米軍の占拠する所となり、祖国復帰後も五十年余に亘つて住むことを禁じられてゐるとのことである。「主なき」とは、島に深い愛着をもつこれらの住人がゐない、といふことと拝察する。

「菟麻ひま」は辞書によれば「唐たうごま」を指し、一―三メートルの赤い茎に八つ手のやうな葉



硫黄島・鎮魂の丘の慰霊碑に献花される両陛下(平成6年2月12日)

をもつ亜熱帯の植物であり、硫黄島に広く生育してゐるのであらう。この焼きつくされた島にも蓖麻は生ひ茂つてゐる。島の人々にとつてはなつかしいこの草木も、今はかへりみる人もなく生ひ茂つてゐる。その草木に陛下のおんまなごしは注がれるのである。

白石しろいしを踏み進みゆく我が前に光に映はえて新宮にひみやは立つ

伊勢神宮の式年遷宮が行はれたのは平成五年（一九九三年）秋であつたが、天皇・皇后両陛下は昨年三月二十八日、神宮御参拝のため伊勢に行幸啓され、二十九日午前に外宮げぐう、午後ごごに内宮ないぐうの正殿に玉串を捧げて御拝礼になつた。豊受大神宮とは伊勢の外宮のことであり、豊受大御神とようけのおほみかみ、すなはち私どもの食物を豊かにお約束下さる神様をお祀りしてゐる。

冒頭の「白石しろいし」についてであるが、御遷宮を目前にした真夏、お白石持行事がとり行はれる。これは新宮の御敷地に神殿が造営されたあと、伊勢の宮川の清流から拾ひ集めた清浄な白石をその御垣内みかきうち一面に敷きつめる行事であるが、地元伊勢の人々だけでなく全国各地から一日神領民が揃ひの法衣に鉢巻姿も勇ましく神殿の垣根を埋めつくすほどに集ひ、それぞれの人ひとが白石を神域に捧げるのである。

「白石を踏み進みゆく」といふお詞からは、このやうにして真心こめて白石を敷きつめた人々の思ひをお受けとめになり、一つ一つの白石を足裏に確かめながら踏みしめて歩まれる

御姿が拝されるのである。「新宮」とはいふまでもなく遷宮になったばかりの新しい神殿である。ひのきの白木造りに独得の萱屋根をふいた新宮が「光に映え」る様は、何と清浄で神々しいことか。陛下は歌の最後を「新宮は立つ」と堂々と結ばれてゐる。

唯一ゆいいつしんめいづくり神明造と呼ばれる伊勢神宮だけに原初から伝はる造営では、太柱（掘立柱）を礎石の上に乗せるのでなく、柱根を土中深く埋めて立てる。これから二十年間、太柱はしっかりと神殿を支へるのである。

なほ、二十年前の御遷宮の際、昭和天皇もまた外宮にご参進なさり、「みどりこき杉並木みちすすみきて外宮ををろがむ雨はれし夕」（昭和四十九年）と詠まれたのであった。

スペインの君らと共に乗る馬車に人ら手を振る高き窓より

マヨルカ島は地中海に浮かぶ気候温暖の島。ここにホアン・カルロススペイン国王の別荘があり、天皇・皇后両陛下は昨年十月にフランスとスペインを御訪問になった折、この島をお訪ねになってスペイン国王御夫妻と水入らずの時を過ごされたさうである。

御製の「スペインの君ら」と親しく呼ばれてゐるのはカルロス国王御夫妻であり、御夫妻が結婚して間もなく日本を訪問されて以来、この三十二年の間に両陛下とは幾度もお会いひになり、友情を育んでこられたのであった。

御製は平明で、地中海の青い空を思はずやうに明るい。マヨルカ島の暖い日ざしを受けて同じ馬車に乗られ、高い窓から手を振る島の人々を見上げながらにこやかに手を振ってお応へになる両陛下のお顔が目に浮かぶやうである。公式行事から離れ、ほっとする一時をすごされたそのお喜びが伝はってくる御製である。

豊年とよとしを喜びつつも暑き日の水足らざりしいたづき思ふ

一昨年は冷夏で長雨が続き、米の不作など農作物に甚大な被害をもたらし、国民生活に重大な影響があったが、昨年は一転して例年にならない豊作の年であった。

その「豊年」を陛下はともに喜び給ふのであるが、一方、西日本を中心に空梅雨に始まって日照り続きの猛夏、秋になってもまとまった雨のほとんど降らぬ日が続いた。水不足の生活は現在も広い地域の人々を悩ましてをり、長崎県など一日数時間以内といふ給水制限が既に数カ月に亘って続いてゐる地方もある。

このやうに水の足りない生活を国民はどのやうに送ってゐるのであらうかと、陛下は思ひを馳せられるのである。陛下は昨年も「地方より奉仕作業に来し人に痛みつつ聞く長雨のわざ」と詠まれた。

国民の生活を常に思ひ給ふ大御心は、御製に毎年のやうに拝察されるのであるが、それは

思へば太古より延々と続く天皇様の御伝統である。万葉集第一巻にみられるやうに舒明天皇は天の香具山に国見をされ、「国原は煙立ち立つ海原は鷗立ち立つうまし国ぞ蜻蛉島大和の国は」と詠まれ、国民のかまどの煙の立つ様を御覧になって「うまし国ぞ」と詠嘆されたが、このやうな大御心の伝統に包まれる我ら国民の幸を思ふのである。

高原の風さはやかに吹ける中人らと集ひ苗木植えけり

「森の緑で心の豊かさを」を大会テーマに、第四十五回全国植樹祭が五月二十二日、兵庫県美方郡村岡町の十石高原・瀬川平において天皇・皇后両陛下をお迎へして開催された。一読何の説明も要らぬ平易なお言葉の御製であり、またタカハラノカゼサハヤカと続くa音の明るい響きによつて、高原の風とともに陛下のさはやかな御心が真直ぐに伝はってくる。

この日、天皇陛下は兎塚杉、ブナ、トチノキを、皇后陛下はナナカマド、ヤマボフシ、ナツバキの苗木をお手植えになった。天皇陛下はこの日のお言葉の最後を次のやうに結ばれた。

〈豊かな森林が造られるには長い年月がかかります。この植樹祭が、森林を育ててきた人々の苦勞を思う機会となり、資源の供給はもとより、水源の涵養、災害の防止など、森林のもつ様々な意義に皆が思いを致し、自然を慈しむ心を育てる契機となるよう切に希望

します。)

国体の炬火は再び入り来ぬ四十年を経てこの会場に

昨年十月二十九日、第四十九回国民体育大会秋季大会の開会式は名古屋市瑞穂公園陸上競技場において、天皇・皇后両陛下をお迎へして行はれた。御製はこの折のことを詠まれたもので、炬火の入場を御覧になりつつ、およそ四十年前の昭和二十五年（一九五〇年）にこの会場で行はれた第五回国体の開会式をはるか懐古されるのである。

国体開会式に炬火が用ゐられたのはこの第五回国体が初めてであった。昭和二十五年といへば、名古屋の町も戦争の廢墟からやっと立ち直った頃であり、当時の国体の設備などは現代に比べ貧弱なものであったに違ひない。しかしその貧しさの中にあつて、国民は全国から集つた若人の競技を喜びをもつて見たであらうし、将来の日本再建の希望をもつたであらう。この第五回国体で昭和天皇は、「日の丸をかかげて歌ふ若人のこゑたのもしくひびきたれる」、また「名古屋の街さきに見しよりうつくしくたちなほれるがうれしかりけり」（さきにみしより||昭和二十一年の名古屋巡幸）と詠まれた。

戦後の廢墟から立ち直つた日本、その復興を支へたものに昭和天皇の御身を挺されての御巡幸があつた。その時から四十年余、この時の流れ世の移りを、今上陛下はしみじみと感じ

てをられたのだと拝察する。

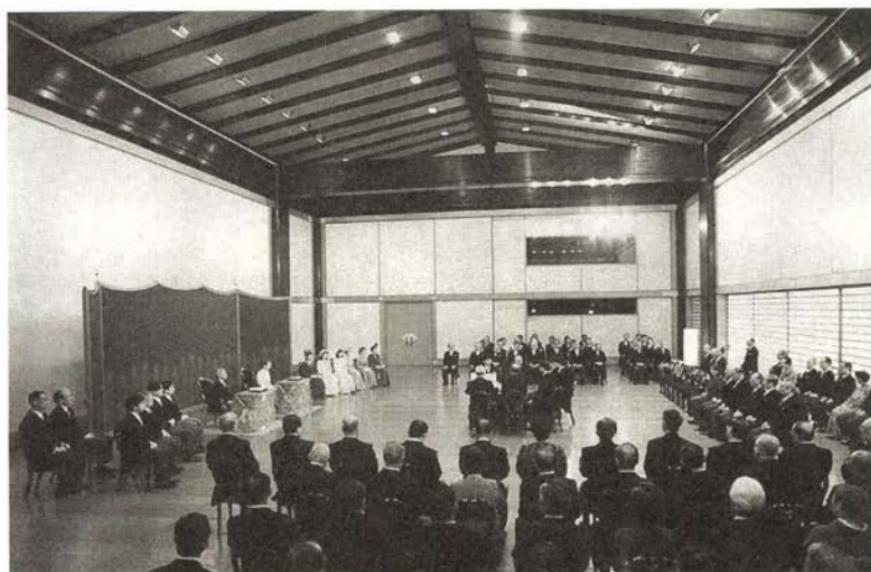
手渡しし稚貝稚えびを手に持ちて若き海人あまびと港出で行く

昨年十一月二十日に開催された第十四回全国豊かな海づくり大会のため、両陛下は山口県に行幸啓になった。前日十九日には萩市を御訪問になり、吉田松陰の松下村塾を御視察になったが、松陰神社の前では、御予定になかったにも拘らず社殿の前で服装を正され、深々と御拝礼になったとのことである。

翌日、両陛下は、長門市の仙崎漁港での「全国豊かな海づくり大会」に御臨席になった。大会ではトラフグやカサゴなど五種の稚魚を放流された。その後、漁業後継者の二組の夫婦にアハビと車エビの「稚貝稚えび」を御手渡しになり、これを頂いた漁師夫婦の乗った放流船の船出をお見送りになったとのことである。

御製はこの時のことをお詠みになってゐるが、貝や海老など海の生き物が豊かに育つていくことを、そして船出する若い漁師たちの幸を願はれる大御心が、おのづから伝はつてくるのである。

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く



歌会始の儀(写真は平成9年1月14日皇居「松の間」)

今年(平成七年)の御題は「歌」であったが、天皇陛下は歌の中でも、我が国伝統の和歌についてお詠みになった。御製は、歌会始の儀における一般国民からの入選者の歌が披露された時のことを詠まれたといふ。昨年の入選歌をみると、日々の生活の中で詠まれた心を打つ歌がいくつもみられる。陛下はそれらの人々の過ごしてきた生活、人生を思はれながら、朗々と詠はれる歌会始独得のあの調べをお聞きになっているのである。

御製は平易なお言葉で、なんの飾りもなく詠まれてゐるが、拝誦すると悠久の時の流れをも感じるのは何故であらうか。歌は人々の思ひの中から顕れて言葉の調べとして結晶し、それがまた人々の心に響き合ひ

伝はつていく。歌会始では、陛下はじつと国民の声を、心をお聞きになつてゐる。それが年の始めに行はれる我が国古来の伝統の行事なのである。

明治天皇は「歌」と題して「こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ国のすがたも」と詠まれた。日本の国の本来の姿、それは人々の素直な思ひが自づから通ひ合ふところに生まれいづるのではないだらうか。

皇后陛下の御歌

慰霊地は今安らかに水をたたふ如何ばかり君ら水を欲りけむ

高齢化の進む町にて学童の数すくなきが鼓笛を鳴らす

今一度訪ひたしと思ふこの村に辣蕪の花咲き盛るころ

移り住む国の民とし老いたまふ君らが歌ふさくらさくらと

皇后様には、お言葉を発することのできない大変お辛かったですであらう時期をお過ごしになつたが、今では少しづつ回復されてゐるとのことであり、お慶び申し上げるとともに、再びこのやうなことがないやうにとお祈りしたい。



ご訪米の折、ロスアンゼルスの日系人引退者ホームを訪ねられた皇后陛下(平成6年6月23日)

皇后様は、天皇陛下が国内にまた海外に行幸される時にもいつもお側にあつて、陛下をお支へになつてをられる。そのやうな皇后様の御心は、そのまま御歌にも拝察される。

硫黄島での御歌。灼熱の地、燃え尽すやうな激戦でなくなった人々が、どれほどか水を飲みたかつたであらうかと、慰霊地にたたへられる水を前に心を寄せられ、天皇陛下とともに碑に水を注がれたのであつた。

植樹祭会場での御歌。高齢の方が多い町に、おそらくはおぢいちゃん、おばあちゃんともに住む数少ない学童たちが、一所懸命に鼓笛を鳴らす姿を慈しむごとく詠まれてゐる。

また、鳥取県に御出ましの御歌では、砂丘地帯に育つ辣蕪らつきまうの素朴な花、秋に咲く紫の花に遠く心を寄せられる。華やかではなくとも日々を大切に生きてゆく福部村の人々や草花に、皇后様の御目差しは注がれてゐるのである。

歌会始の御歌は、昨年六月二十三日、米国のロスアンゼルスの日系人引退者ホームを訪問された折のことを詠まれてゐるが、米国に移住して米国人として生き、今は年老いてホームに生活する人々の来し方に思ひを寄せながら、その人々が故国を思ひつつ「さくらさくら」と歌ふ歌声に心で和してをられると拝察されるのである。

皇后様もまた、国民の心に深く思ひを寄せながら、天皇陛下とともに歩まれるのである。

平成八年年頭ご発表

天皇陛下御製

阪神・淡路大震災

なるをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

平和の礎いしづ

沖縄のいくさに失せし人の名をあまねく刻み碑は並なみ立てり

原子爆弾投下されてより五十年経ちて

原爆のまがを患いふ人々の五十年そとせの日々いかにありけむ

雲仙普賢岳噴火の被災地を訪れて

四年余よとせも続きし噴火収まりて被災地の畑はたに牧草茂る

勤労奉仕団の人々より今年の作柄を聞きて

豊かなる実りなりしといふ人の多き今年の秋を喜ぶ

第四十六回全国植樹祭 広島県

平らけき世をこひねがひ人々と広島の地に苗木にけり

第五十回国民体育大会秋季大会 福島県

福島の競技場の空晴れ渡り第五十回国体開く

第十五回全国豊かな海づくり大会 宮崎県

すこやかに育てきたりしおおにべを油津漁港の海に放しぬ

【平成八年歌会始】

苗〔御題〕

山荒れし戦の後の年々に苗木植ゑこし人のしのばる

（年頭ご発表に含まれてゐない前年の御製）

戦後五十年 遺族の上を思ひてよめる

国がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

皇后陛下御歌

春燈

この年の春燈しゅんとうかなし被災地に雛なき節句めぐり来りて

植樹祭

初夏はつなつの光の中に苗木植うるこの子供らに戦いくさあらずな

広島

被爆五十年広島広島の地に静かにも雨降り注そそぐ雨の香のして

【平成八年歌会始】

苗〔御題〕

日本列島田たごとの早苗そよぐらむ今日わが君も御田みにいでます

(年頭ご発表に含まれてゐない前年の御歌)

戦後五十年遺族の上を思ひて

いかばかり難かたかりにけむたづさへて君ら歩みし五十年いとせの道

なるものがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

平成七年（一九九五年）一月十七日未明、兵庫県南部を震源地とする大地震が発生。阪神・淡路地方は甚大なる被害を蒙り、六千を超える人々の命が失はれた。

天皇陛下は六時すぎのニュースでいち早くこれを御覧になり、侍従に被害状況を逐次届けるやう指示された。一月十九日には亡くなられた方々の遺族に対し哀悼の意を表されるとともに、厳寒の中で不自由な生活を続けてゐる被災者や、救援のために尽してゐる人々の労苦に対してねぎらひのお言葉を賜はり、一月三十一日には天皇・皇后両陛下お揃ひで神戸に行幸啓になった。

交通もままならない中でヘリコプターを乗り継いで幾つかの避難所を廻られ、被災者に直接お声をかけられ励まされたのであった。とくに大火災によって多くの人が亡くなり焼け野原となった長田地区ながたでは、両陛下は焼け跡に向つて深々と礼を捧げられ、皇后陛下はその朝御所のお庭でお摘みになった水仙の花束をお供へになったとのことである。

御製第一句「なる」は地震のことである。両陛下が御見舞された折、丁度雨が降つてゐたのであらう。

家も物も失つた人々が戸外で立ち働いてゐる、そこに無情にも冬の冷たい雨が降つてゐる



阪神・淡路大震災の被災地へ行幸啓になった両陛下(平成7年1月31日)

る。その様を御覧になり、「悲しき」と直截にお詠みになるのである。被災者の人々と悲しみと苦しみをひとつにしてをられる御姿が拝されるのである。陛下のこのやうな慈愛にふれた人々の思ひはいかばかりだったであらう。どれほどの慰めと勇気を与へられたであらう。

大震災の直後から自衛隊は活動を開始し、三万ものボランティアの人々がかけて、多くの会社が会社ぐるみで救済にあたったといふ。そして世の人々を感動させたのは、この大惨事の中にあり、暴動もなく整然として、かつ人々が真に協け合ふ姿であった。真の悲痛の中で却って人々の心はひとつに結ばれ、共に生くる喜びさへ生じたのである。両陛下はこの非常の時に当

り、率先して直ちに行動されたのだった。

自づから思ひおこされるのは、昭和二十年（一九四五年）三月、東京大空襲の直後、焼け野に向はれて国民をお慰めになった昭和天皇の御姿、「戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ」である。「国民とともにあり」の大御心は、平成の御代にも厳然と受け継がれてゐることを思ふのである。

沖繩のいくさに失せし人の名をあまねく刻み碑は並み立てり

戦後五十年を迎へた昨年、天皇陛下はとりわけ大きな戦災を被つた地として、長崎、広島、沖繩そして東京への御訪問を強く希望された。その願ひは、七月末から八月始めにかけての「慰霊の行幸啓」となつて実現された。天皇・皇后両陛下は八月二日沖繩に向はれ、沖繩戦終結の地となつた糸満市摩文仁の戦没者墓苑において祈りを捧げられた。御製は、そのち平和祈念公園を訪れ、「平和の礎」を御覧になつた折のものである。

「平和の礎」は、沖繩戦で亡くなつた方々の追悼と平和を祈念して建てられたもので、沖繩戦終結の日から五十年目にあたる昨年六月二十三日に、その除幕式が行はれた。「いしじ」は琉球語の読みである。

昨年、私も機会があつてここを訪れたが、南アフリカ産の黒御影石で造られた屏風状の碑

百十四基が広く放射状に建てられ、その一つ一つの面に沖縄戦の戦没者の名前がびっしりと刻まれてをり、その名をたどりながら歩いていくと胸がしめつけられる思ひであった。刻まれたその総数は二十三万四千余で、沖縄県民十四万七千余人、県外七万二千余人の他、米
国、台湾、朝鮮など国内外全ての戦没者の名があるといふ。

御製の「あまねく」は、兵士と民間人、日本人と外国人の分け隔てなく、戦に身を捧げた全ての人々の名を刻んだ碑に、深く御心を動かされての御表現であらう。

この御製を拝しながら思はれるのは、沖縄戦で死闘を続け、最後に自決された海軍司令官太田実中将のことであった。太田中将はその最期に当って海軍省に電報を打つ。そこでは戦災に全てを失ひつつある沖縄県民が、それでもなほ黙々として身を捧げて戦ってゐる実状を伝へ、「一木一草焦土ト化セン、糧食六月一杯ヲ支フルノミナリトイフ、沖縄県民斯克戦ヘリ」と述べたあと、これらの県民に対し「後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と訴へてこの電文は結ばれてゐる。

このやうに沖縄県民は老いも若きも、全てを捧げて戦に臨み、県民の四分の一もの人々が命を失つた。島は焦土と化した。この時から五十年、陛下の御目にこの碑はどれほどか悲しく映られたであらう。

陛下は沖縄にはことのほか御心を寄せられ、七度もの慰霊の御旅をお続けになり、また琉

球古語による詩歌である琉歌を、御親らお詠みになるほど、沖縄の人々を大切にされてきた。「平和の礎」の除幕式の前夜祭には、昭和五十年当時、皇太子として南部戦跡を巡拝された折に詠まれた琉歌「ふさかいゆる本草めぐる戦跡くり返し返し思ひかけて」が、琉球音楽の調べに乗せて歌ひあげられたとのことである。天皇として最初の御訪問となった平成五年、やはり沖縄平和祈念堂において「激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ」とお詠みになり、平らなる世への強い願ひを示されたのであった。

原爆のまがを思ふ人々の五十年の日々いかにありけむ

第一句「原爆のまが」は原爆による災禍のことである。陛下はこの度の慰霊の行幸にあたって、次のやうなお言葉を発表されたが、このお言葉の中に御製にこめられた大御心が具さに顕れてゐる。

（五十年前、広島と長崎に落とされた二発の原子爆弾は、両都市の市街を一瞬にして焦土と化し、二十万を超える人命が失われました。放射能は長く人体に影響を与え、被爆後も多くの人々が亡くなりました。身近な人々を亡くした遺族や、後障害に悩み、あるいは、健康に不安を抱き続ける被爆者の悲しみ、苦しみは、いかばかりかと思われます。）

天皇・皇后両陛下は、七月二十六日に長崎市を訪問され、恵の丘長崎原爆ホームを御慰問

になった。両陛下は被爆者の方々にお見舞のお言葉をかけられ、皇后陛下は、下半身の自由な九十歳の老人の前で膝まづいてお声をかけられ、その足をさすられたといふ。翌二十七日には、広島に御到着。猛暑の中を原爆慰霊碑において拝礼された後、原爆養護ホーム「倉掛のぞみ園」を御訪問になった。陛下はここでも入所者ひとりひとりにお言葉をかけられ、この五十年の悲しみを語る老人の言葉に、一心にお耳を傾けられたとのことである。

陛下は平成元年に広島赤十字原爆病院を訪問された折にも、「平らけき世に病みあるを訪れてひたすら思ふ放射能のわざ」の御製を詠まれてゐる。平和になった現在にあつてもなほ、悩み続ける人々の思ひを、しっかりと陛下は受けとめてをられるのである。

四年余も^{よとせ}続きし噴火収まりて被災地の^{はた}畑に牧草茂る

平成三年（一九九一年）六月、雲仙普賢岳が噴火、その大規模な火砕流によつて四十四人の方が亡くなられ、多くの人々がその家も土地も失つて避難生活を始めてより約四年。昨年の夏やうやく、普賢岳の活動はひとまづ停止したと発表された。

平成三年七月、天皇・皇后両陛下はまだ活発な活動を続けてゐる普賢岳の麓、島原を御慰問になったが、この折、陛下は「人々の年月かけて作り来しなりはひの地に灰厚く積む」の御製をお詠みになった。昨年十一月十日、両陛下は再び島原を御訪問になり、この四年余

の間災害復興に勤めて来た人々や、被災者の方々をねぎらはれたのであった。火砕流をおこした水無川流域の広大な畑地は、今も灰に覆はれ、傾いた家屋は灰に埋もれたままである。

陛下はこの度の行幸で水無川周辺を御視察になった。この折、荒れた山腹の緑化事業についての説明に、両陛下は草木のことなどについてことのほか熱心に質問されたとのことである。御製は平明に詠まれてゐるが、被災地の畑にもやうやく牧草が茂り、被災者の生活が立ち直っていくことをお喜びになる大御心が、しみじみと伝はるのである。

豊かなる実りなりしといふ人の多き今年の秋を喜ぶ

終戦直後、宮城県の有志の方々が荒れた皇居の清掃を思ひたつて勤勞奉仕を始めて以来、毎年全国各地から勤勞奉仕の方々が皇居を訪れてゐるが、その数はすでに百万人を超えてゐる。陛下は必ずこれらの人々にお会ひになり、直接お声をかけられるのである。陛下は年々の農産物、ことに稲作の作柄を常に心配してをられる。御製は、人々に今年の作柄をお尋ねになり、豊かに実つてゐると申し上げる人々が多いのを聞こしめして、今年の秋をお喜びになつてゐるのである。

平成五年（一九九三年）は冷夏が続き、全国的に酷きびしい米の不作で国民生活に不安をもたらした。この年陛下は、やはり勤勞奉仕団の人々にお会ひになつて、「地方より奉仕作業に

来し人に痛みつつ聞く長雨のわざ」と詠まれ、宸襟しんきんを悩ませられたのであった。しかし今年
は三年ぶりの良い作柄である。御製は澹々として何のかざりもないが、最後の「秋を喜ぶ」
といふ大きな豊かな調べを味はひたいと思ふ。

陛下は御親ら皇居内の水田でお田植をされ、秋には実った稲をお刈り入れになり、新嘗
祭ではその新米を神前にお供へされるのを毎年の勤めとされてゐる。天皇陛下のお田植は
昭和天皇から始められたが、今上陛下はその大御心をお継ぎになるとともに、平成二年から
は御手づから種を播まく行事も始められたとのことである。皇室の伝統は、かくして陛下の孤
高の御努力によつて受け継がれ、育ままれてきたことを思ふのである。

平らけき世をこひねがひ人々と広島の地に苗植ゑにけり

第四十六回全国植樹祭は五月二十一日、広島県豊田郡の広島県立中央森林公園において、
天皇・皇后両陛下をお迎へして開催された。広島に原爆が投下されて五十年、草木も焦がし
尽す原爆の被害を受けた広島での植樹祭は、陛下に特別の御感慨をもたらしたものと思はれ
る。一句目の「平らけき」の詞、それは陛下が繰り返し用ひられる詞である。

陛下は、平らけき世を「こひねがひ」と強いお言葉を使ってをられるが、「ねがひ」だけ
では言ひ切れぬ思ひがこめられてゐる。御製は「広島に」ではなく「広島の地に」と詠まれ

てをり、原爆によつて荒涼たる野と化した広島の上に深く心を寄せられ、この地に木々が豊かに育つていくことを、そして戦火によつて再びこの国土が荒廢にさらされないことを願つてをられると拝察されるのである。

植樹祭の日、天皇陛下はアラカシ、皇后陛下はイロハモミヂの木をお手植ゑになり、平和公園から運ばれた「平和の水」を注がれた。

福島の競技場の空晴れ渡り第五十回国体開く

第五十回を迎へる国民体育大会は、両陛下をお迎へして十月十三日より福島県で開催された。戦後の廢墟の中から立ち上つた国民が力強い復興に向けての志から国民体育大会を始め、丁度五十年目を迎へた今日、折からの快晴。陛下は、そのお喜びをそのままに一点の曇りもなく、広やかにお詠みになつてゐるのである。

すこやかに育てきたりしおおにべを油津漁港あぶらつの海に放しぬ

十一月十二日、天皇・皇后両陛下は、「第十五回全国豊かな海づくり大会」に御臨席になつた。水産資源の保護と育成を目的として続けられてゐるこの大会は、今回、宮崎県日南市の油津漁港で行はれた。油津は神武天皇御誕生の地と伝えられる所に近く、訪れられた陛下

の御感慨もひとしほであつたらう。

大会式典に続いて、両陛下は放流棧橋にお移りになられ、オオニベ、マダヒ、ヒラメなどの稚魚を御放流になった。オオニベはスズキ科に属し、日本近海から中国にかけて棲む体長約六〇〜九〇センチの魚。大切に健やかに育てられたオオニベの稚魚を海に放たれ、豊かな海の幸を願はれる御製である。

山荒れし戦いくさの後の年のち々に苗木植とえこし人のしのばる

昨年の広島における全国植樹祭の式典の折、天皇陛下は「ここに集う皆さんと共に、戦後の荒廃から森林の回復に向けて、営々と努力された関係者の労苦をしのびつつ、平和への思いを新たにしたいと思います」と述べさせられた。

御製は、このお言葉そのままの御心をお詠みになってゐる。戦によって荒れた山に苗木を植ゑ育てて来た幾多の人々をお思ひになつての御製であるが、陛下の御胸には亡き昭和天皇への追慕の情がおりになつたのではないだらうか。

全国植樹祭は昭和二十五年（一九五〇年）甲府で始められたが、昭和天皇は毎年親臨され、植樹を御親ら推進されたのであつた。年々の御製がのこされてゐるが、昭和三十二年、岐阜県では「人々と苗木をうゑて思ふかな森をそだつるそのいたつきを」とお詠みになられ

た。みどり深き日本の山河、それは我らが生命の源である。そしてその森や林は、営々としてこれを育ててきた人々の労苦の賜物であることを教へ給ふのである。

皇后陛下の御歌

この年の春燈しゅんとうかなし被災地に雖なき節句めぐり来りて

この御歌みうたは、阪神・淡路大震災の被災者に心寄せて詠まれたものである。お雛祭りのお節句がめぐってきたが、楽しいはずの春の夜の灯も、今年ばかりは悲しい、震災によってお雛様を失ってしまった女の子たちの悲しみを偲ばれた、切々たる御歌である。

初夏はつなつの光の中に苗木植うるこの子供らに戦いくさあらずな

植樹祭での御歌。「初夏の光の中に」、それは新緑の美しい季節の中で、生命力にあふれ、生き生きと動く子供らの輝く姿を彷彿とさせる表現である。その子供たちには戦がないやうにと祈られる。皇后様の御目には、苗木を植ゑてゐる子供らに対するいとほしい御心があふれ、子供たちも苗木とともに健やかに伸びてほしいとの願ひがこめられてゐるやうである。

被爆五十年広島島の地に静かにも雨降り注ぐ雨の香のして

「被爆五十年」といふ漢語字余りの重い表現。それは皇后様の胸をふたぐやうな重い御感概でもあらう。静かに降りそそぐ雨、その「雨の香のして」といふ細やかにして幽玄の調べは、この五十年といふ年月を静かにしのばすごとくである。

日本列島田ごとの早苗そよぐらむ今日わが君も御田にいでます

歌会始の御歌。何と大きな豊かな御歌であらうか。「日本列島田ごとの早苗そよぐらむ」といふその御発想の雄大さよ。この御歌もまた初句は漢語字余りであるが、そこには潑刺たる大きなまなざし、喜びがあふれてゐる。御目は日本中のひとつひとつの田にそよぐ早苗から、一転して御親らも早苗を植ゑられる天皇陛下に注がれるのである。今日、わが君もまた皇居の中の御田にいでます。お年を召しても、若き日の御心そのままに天皇様を敬ひ、お慕ひなさつてをられる。その御心はさはやかな風となつて、広く日本の田の面を吹きわたるかのごとくである。

【小柳 左門】

平成九年年頭ご発表

天皇陛下御製

山梨県

山間やまあひに広がる里の道行けば桃の林に花咲き満つる

旧日光田母沢御用邸を訪ねて

疎開せし日光の住処すまいかい五十年いとせを越えたる夏におとなひにけり

ベルギーの君と足利市を訪ねて

ベルギーの君と乗りゆく列車より実り豊けき秋の田を見る

長野県土石流災害

土石流のまが痛ましき遺体捜査凍てつく川に今日も続けり

五十年いとせを顧みて

五十年いとせの国進みこし年月にいたづきし人の功いさをしをしのぶ

第四十七回全国植樹祭 東京都

埋立てし島に來たりて我が妹といてふの雄木と雌木植ゑにけり

第十六回全国豊かな海づくり大会 石川県

珠洲すずの海に放ちし鯛の稚魚あまたいづれかたの方を今泳ぐらむ

第五十一回国民体育大会秋季大会 広島県

慰霊碑の火の燃え続く広島に国体選手あまた集へり

【平成九年歌会始】

姿〔御題〕

うち続く田は豊かなる緑にて実る稲穂の姿うれしき

皇后陛下御歌

秩父宮妃殿下をお偲びして

もろともに蓮華れんげ摘まむと宣のらししを君在まさずして春のさびしさ

終戦記念日

海陸うみくがのいづへを知らず姿なきあまたの御霊みたま国まち護るらむ

彼岸花

彼岸花咲ける間あはひの道をゆく行き極きはまれば母に会ふらし

【平成九年歌会始】

姿〔御題〕

生命いのちおび真闇まやみに浮きて青かりしと地球の姿見し人還かへる

山間やまのに広がる里の道行けば桃の林に花咲き満つる

両陛下は昨平成八年四月二十三日から二十五日まで山梨県へ行幸啓になった。両陛下には県庁で県勢の事情を御聴取されたほか、県立考古博物館や県工業技術センター等を御視察、地方事情の進展ぶりを具さに御覧になった。

昨年こぞの四月と言へば公的重要行事が相次ぎ、十七日は米国大統領歓迎の宮中晩餐会、十九日は皇居内の苗代で種粃をお手播き、二十二日は靖国神社の春の例大祭に勅使御差遣等々、まことに毎日毎日のおつとめを真心をかたむけて御精励遊ばされる陛下の御蔭により、日本は辛うじて保たれてゐることを思はされるのである。

さういふ中、地方にお成りになり、皇后様と共に歩かれ、道の辺に寄りくる民と触れ合ふひとときは、何にもましてのおよろこびであり、お疲れも癒されたのではないかと拝するのである。

「桃の林に花咲き満つる」とは何とおほどかな御表現かと思ふ。「満つる」と連体形で止められ余韻が漂ふ。咲き誇る桃の花々が陛下の御心をおなぐさめしてゐるのである。

疎開せし日光の住処すまいかい五十年いそとせを越えたる夏におとなひにけり

両陛下は七月二十三日、御静養のため栃木県那須御用邸に御到着。二十五日、栃木県護国神社を御参拝になり、翌二十六日、両陛下は紀宮殿下を伴はれて、日光市の旧田母沢たもざは御用邸をおとなはれた。

ここは元、大正天皇の御用邸であり、陛下が終戦間際（昭和十九年七月からはほぼ一年間）に疎開されてゐた場所で、陛下は往時のままの各部屋や庭の防空壕跡をなつかしさうに御覧になった。天皇の御座所としては質素を極めたたはずまひである。

日光は雨の多い所で、この御用邸も老朽化が著しく、近く取り壊されるときく。陛下は大正天皇をお偲びし、この御用邸に最後のお別れに行かれたのであらう。

疎開当時、陛下は御年十一歳、傅育官ふいくたちは当時の皇太子殿下をきびしくお鍛へ申し上げ、殿下はハードな鍛練生活をお送りになり、日に日に逞しくなられたのである。また同級生には週末、親兄弟が訪ねて来るのに、殿下の所へは御両親が訪ねておいでになるといふことはなく、お寂しい時期も過ぎたといふ。

かうして迎へた八月十五日、奥日光、湯元の南間ホテルの一室で、戦争終結を告げる父陛下下のラジオ放送を、正座してお聴きになったのである。「五十年を越えたる夏に」と、ただならぬ五十年をさりげなく表現され、「おとなひにけり」と限らない詠嘆の御言葉で結ばれたのである。



両陛下とベルギー国王・王妃がお乗りになるお召し列車(平成8年10月24日)

ベルギーの君と乗りゆく列車より実
り豊けき秋の田を見る

ベルギーのアルベール二世国王とパオラ王妃が来日されたのは十月二十一日。翌十二日、両陛下主催の宮中晩餐会が催され、翌二十三日、地場産業御視察とベルギー国王・王妃を御案内のため、栃木県へ行幸啓。二十四日、両陛下はJR小山駅をよまに御到着になったベルギー国王・王妃をお迎へになり、「お召し列車」と呼ばれる専用の特別列車で足利駅まで御案内。御一緒に史跡足利学校等を御視察になったのであるが、二日間にも亘る、かくも睦まじく誠心誠意の御同行は異例のことであらう。

陛下は昭和二十八年(一九五三年)、皇太

子として英国女王の戴冠式に御参列になった際、初めてベルギーを御訪問になりラーケン宮に御宿泊、国王の兄君、故ポードゥワン国王から心のこもったおもてなしを受けられたが、そのときの陛下の御詠がある。「若き君の運転し給ふ自動車は日のもるる林馬場へと急ぐ」。今その弟君とお召し列車に御同乗になり、尽きぬ語らひに御友情をふかめ給うたのである。国と国との外交は所詮、功利の世界に終りがちであらうが、君主と君主の心と心をわかち合ふよろこびはそのやうな世界をこえて、二つの国の心を直接に一つに結ぶのである。瑞穂の国に来給うたかの国の国王とともに車窓に広がる豊かな秋の田に見入られる陛下の満ち足りた御心を偲ぶのである。

土石流のまが痛ましき遺体捜査凍てつく川に今日も続けり

昨年も胸のつぶれるやうな大災害が起きた。二月、北海道の積丹半島しやこたんで、道路のトンネルを巨大な岩盤が押しつぶすといふ信じられない事故が起き、バスの乗客ら二十人が犠牲となった。そして年末の十二月六日、長野県小谷村をたりで災害復旧工事現場を土石流が襲ひ、十四人を呑み込んだ。警察、自衛隊の必死の捜査活動は困難を極め、凍てつく川に続けられる救出作業を私たちは凍える思ひでテレビに見入ったのであった。

「まが」(禍)は災ひ。「遺体捜査」といふ漢語表現に切迫した御心懐が偲ばれる。平成三

年、雲仙普賢岳の噴火、平成五年、奥尻島の大地震、平成七年、阪神・淡路大震災、打ちつづく禍に呑みこまれてゆく人々のかなしみは陛下の御心を去ることはないのである。「今日も続けり」といふ、その「今日も」といふ一語の中にこめられた陛下のおもひは深い。

五十年の国進みこし年月にいたづきし人の功をしのぶ

過ぐる大戦における三百万もの同胞の犠牲は余りに甚大な惨禍であつた。この御製を拝し、灰燼に帰した焼け野原からもう一度立ち上り、復興の奇蹟を成し遂げた人々が先づ思はれるのである。終戦の詔書にある「堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍」んだ、余りにも辛い現実があつたことは、戦後生まれの筆者の如きには想像を絶するものがあるが、この再び立ち上る力を与へ給うたのが「常二爾臣民ト共ニ在リ」(終戦の詔書)とも仰せられた昭和天皇の全国御巡幸にあつたと確信せしめらるるとき、父祖の勞が身に沁みるのである。

その御父君であられる昭和天皇の御心の深さを誰よりも御体得になつてをられる今上陛下が、「堪へ難キヲ堪へ」、心魂を勞した人々の「功をしのぶ」と仰せられた。

「いたづきし人」とは、この国を支へてきたすべての私達のみ祖らである。名も無き民に賜つた御勞ひのこのお言葉、亡くなった者にとつてはこれほどの有難い供養の御言葉もなく、戦後、なりはひに励み、家を支へ、家族を守つて来た名も無き民も畏み謹んで陛下のお



東京都で初めて開かれた全国植樹祭に臨まれた今上陛下(平成8年5月19日)

声をきくのみである。

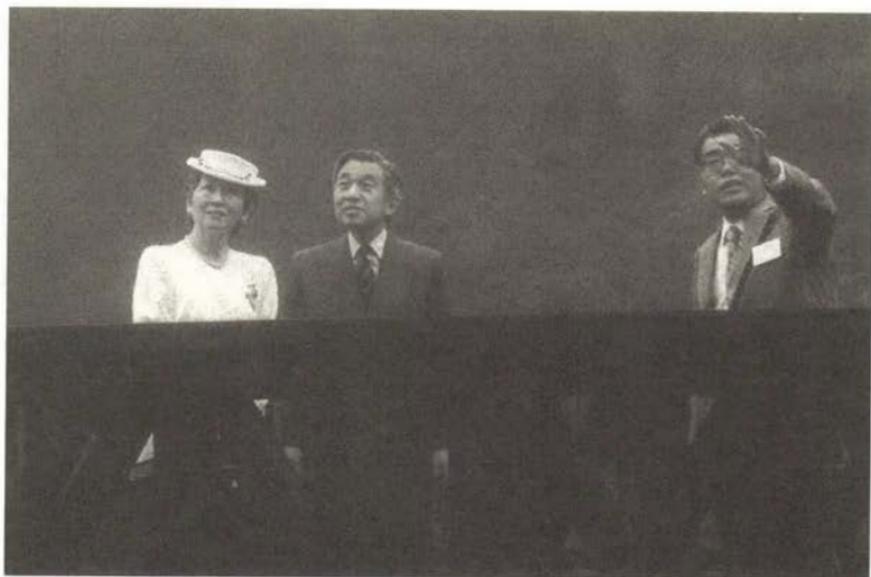
また、この御製には「し」の音韻が間隔をおいて踏まれてをり、一読音声のひびきには忘れ難いものがあり、その御心のふかさが自づと高きしらべになってゐることに気付かされるのである。

埋立てし島に來たりて我が妹といて

ふの雄木と雌木植ゑにけり

戦後、海外居住の同胞六百六十万人が内地に引揚げたとき、緑の日本列島に接して誰もが堪へがたいおもひに涙したと聞く。しかし戦争遂行のために伐採された木の数はおびただしく、山河は荒廢の極に達してゐた。

昭和天皇は昭和二十一年（一九四六年）



檜原都民の森「山の森」に行幸啓になった両陛下(平成8年7月8日)

二月より全国を御巡幸になられ、荒れ果てた国土に御心をお痛めになった。全国植樹祭はその昭和天皇の御心を体して始められたのだが、今回ですでに四十七回を迎へ、昨年は五月十九日、東京都で初の開催となった。そしてこの度は異例の、街・海上・山の三会場、すなはち「街の森」(たろふの森海浜公園)、「海上の森」(中央防波堤内側埋立地)、「山の森」(檜原村)の三つの会場を衛星中継でつなぎ、大型映像画面を設置しての同時開催で、三会場あはせて一万二千名が参加した。

当日、両陛下は「街の森」と「海上の森」に行幸啓されたが、御製は「海上の森」で植樹遊ばされた折のもので、天皇陛下がイチヤウの雄木とスダジヒ、皇后陛下がイチ

ヤウの雌木とオホシマザクラをお手植えになった。尚、「山の森」へはご日程上訪問されなかつたが、その後、七月八日に「山の森―檜原都民の森」に行幸啓になった。

この御製を幾度も声を出して拝誦してゐると、そのリズムの快さは何処から来るのだらうと思つた。上の句の「a」音が明るく響き、下の句の「i」音に緊張感が漂ふやうで、上の句と下の句が織りなすハーモニーが美しく聞こえてきて、陛下の御よろこびがそのまま歌のしらべに寄り添つてゐるかのやうである。

珠洲すずの海に放ちし鯛の稚魚あまたいづれの方かたを今泳ぐらむ

両陛下御臨席のもと、九月十六日、石川県能登半島の突端、珠洲市すずの蛸島漁港たこじまで「第十六回全国豊かな海づくり大会」が開催された。水産資源の保護と育成を目的としてつづけられてゐるこの大会に、陛下は殊の他ふかい御関心を寄せられてゐる。今年も放流行事会場では、豊かな水産資源の実りを祈つて棧橋からマダヒ、クロダヒ、ヒラメの稚魚を放流遊ばされた。

「稚魚」といふ御言葉は、毎年の御詠の中によく拝される（平成二、三、六年）。手のひらに踊る稚魚が何年かの後、水も滴る見事な桜色や銀灰色の鱗を纏ふ成魚に成長する。魚肉蛋白なしに、この列島に棲む民族の生存はなかつた。魚は海の富であり、魚のいのちをいだだ

くことへの感謝を、海の神に捧げずにはをられない。それが海の民として生きた日本人ならではのこころであらう。この大会は神事なのである。

陛下は当日、地元御船神社に伝はる「伴旗祭り」や大漁旗を掲げての歓迎漁船パレードを拍手を送られながら笑顔で御覧になった。

魚のいのちをいとほしまれる陛下の、いかなる種の魚であれ、絶やしてはならぬとの思し召しが、「稚魚」といふ一語に偲ばれてならないのである（伴旗祭—御神輿をのせた御座船が和紙数百枚を貼り合せて作られた高さ一六、七メートルに及ぶ大きな伴旗を立てた船を従へて渡御される神事、大国主命の神話を伝える）。

慰霊碑の火の燃え続く広島に国体選手あまた集へり

三年連続して両陛下をお迎へした広島県。すなはち、平成六年（一九九四年）に広島アジア大会、平成七年に全国植樹祭、そしてこの度、第五十一回国民体育大会秋季大会に御臨席のため十月十一日から十三日にかけての行幸啓である。

一 昨年は「平らけき世をこひねがひ人々と広島の地に苗植ゑにけり」との御詠あり、また平成元年には「死没者の名簿増え行く慰霊碑のあなた平和の灯は燃え盛る」とお詠みになつてゐる。慰霊碑のかなたに燃え続く「平和の火」をみつめられ、ひたすら「平らけき世をこ

ひねが」はれる陛下は、開会式において次のやうなお言葉をお述べになった。

〔近年、国民体育大会に参加する選手のほとんどは戦後に生まれた人々で占められていることと思われます。戦争によりとりわけ多くの苦しみを経たここ広島県において、この度の国民体育大会が行われ、ここに集う人々が、共に過去を振り返る機会を得たことは、非常に意義深いことと思ひます。〕

あまりにも悲惨な惨禍を蒙つた広島県民の感情には複雑なものがあるが、三年連続の行幸啓、そして両陛下の広島に寄せられる御心に応へんと、小雨の中、延べ七千人の人々が提灯と日の丸の小旗を手に、お泊りのホテル周辺まで行進したが、午後七時すぎ、両陛下の部屋の明かりが消え、二つの提灯が浮かび上つたのである。提灯がゆっくり揺れると、参加者からどよめきの声と、聖寿の万歳があがり、国歌「君が代」が高らかに斉唱されたのである。

皇后陛下の御歌

もろともに蓮華摘まむと宣らししを君在さずして春のさびしさ

海陸のいづへを知らず姿なきあまたの御霊国護るらむ

彼岸花咲ける間の道をゆく行き極まれば母に会ふらし

十月二十日、六十二歳のお誕生日を迎へられた皇后様は宮内記者会で、皇室への無関心層が増えてゐるやうだが、との質問に「国の大切な折々に、この国に皇室があつて良かった、と国民が心から安堵し喜ぶことの出来る皇室でありたい」とお述べになった。心ない記者団の質問とは全く次元を異にした、日本の国がらの根幹に迫る御言葉に胸打たれる。

一昨年の阪神・淡路大震災の折の行幸啓に、被災者はどれほどの慰めと勇気を与へられたことか。また平成七年元旦御発表の御製、御歌の計八首のうち三首までもが硫黄島の戦死者を弔ひ給ふものであり、国民はそのただならぬ思ひに愕然としたのである。その折の皇后さまの御歌は「慰霊地は今安らかに水をたたふ如何ばかり君ら水を欲りけむ」であつた。両陛下ともども慰霊碑に柄杓をとつて何杯も何杯も水を御かけ遊ばされたのである。

このたびの皇后陛下の「終戦記念日」の御歌とともに拝するとき、祖国のために戦ひ斃れ今なほ遙かなる祖国を護りつづけてをられる、海陸の何辺いづこへを知らぬあまたの御霊みたまを決して忘れてはならぬと思はしめられる。そしてまた、両陛下の日々の祈りの中に私たちが護られてゐることを沁み沁み思はされるのである。

また、いつも陛下のお側にあつて陛下をお支へになつてこられた皇后様も、民間から皇室

に入られたこの四十年近い歲月、どんなに御苦労がおありであつたことであらう。そんな皇后様を明るく、力強く支へてこられた秩父宮妃殿下を一昨年失はれたお悲しみはいかばかりであつたらう。

また、昭和六十三年（一九八八年）に他界された母君正田富美子様を偲びつつ、さらに母を思ふ国民^{こくたみ}すべてにおもひを寄せてお詠みになつた「彼岸花」の御歌。どんなにお年を召されても母はなつかしく、つきせぬ思ひがにじむ絶唱かと思ふ。秋、真紅の彼岸花を見ると、私たちはこの御歌を思ひ出すであらう。

歌会始の御製、御歌

うち続く田は豊かなる緑にて実る稲穂の姿うれしき

陛下のお歌は昨年秋、石川県を御訪問になつた際、沿道に広がる水田を御覧になり、稲穂の出そろつた様子を詠まれたものである。

「田は豊かなる緑にて」この明るいきずみはたとへやうもなく、陛下のおよろこびは、お歌の節々に波打つてゐる。お米のいのちをいただき、日本人のいのちは養はれて来た。お米

の豊作が日本人のよろこびであった。天皇陛下が御親ら稲作をされる例は昭和天皇がお開きになったものであるが、平成二年からは稲穂をお手播きになる新例を開かせられたことにも伺へる大御心を偲びたいと思ふ。

生命^{いのち}おび真闇^{まやみ}に浮きて青かりしと地球の姿見し人還^{かへ}る

皇后様の御歌は、宇宙飛行士の若田光一さんが昨年一月、宇宙から無事帰還したときの御感想を、地球の青さを織り込んで詠まれたものである。

両陛下のお歌を合はせ拝誦すると、稲穂の姿と地球の姿といふ、天と地の綾なす交響楽を聴いてゐるやうで、その御発想の新鮮さと豊かさに驚くばかりである。かういふお歌を我ら国民が仰ぐこのよろこびは、永遠に伝えてゆきたいものである。

【宝辺矢太郎】

平成十年年頭ご発表

天皇陛下御製

在ペルー日本大使公邸占拠事件

我が生れし日を祝ひたる集ひにてとらはれし人未だ帰らず

ブラジリア

赤土のセラードの大地続く中首都ブラジリア機窓に見え来

和歌山県

白浜に宿りし朝の海の面を旗なびかせて漁船行く

御所に帰らむとして

宮殿を出づれば暮るる冬空に月と明星並みて輝く

對馬丸見出ださる

疎開児の命いだきて沈みたる船深海に見出だされけり

第四十八回全国植樹祭 宮城県

荒れし野を再び森になさむとて集ひし人と苗植ゑにけり

第十七回全国豊かな海づくり大会 岩手県

放たれしまつかはの稚魚は大槌おほつちの海の面も近くしばしたただよふ

第五十二回国民体育大会秋季大会 大阪府

幼きも老も交れる人々の集団演技見つつ楽しむ

【平成十年歌会始】

道〔御題〕

大学の来こしかた示す展示見つつ国開ひらけこし道を思ひぬ

皇后陛下御歌

大震災後三年を経て

嘆なげかひし後の眼のちの冴まなこえざえと澄みぬし人いづら何方かたに住む

日本海重油流出事故

汚染されし石ひとつさへ拭ぬぐはれて清まりし渚あるを覚おぼえむ

香

かなたより木の花なるか香かり来かる母宮ははみやの御所に続くこの道

【平成十年歌会始】

道〔御題〕

移民きみら辿りきたりし遠き道にイペーの花はいくたび咲きし

我が生れし日を祝ひたる集ひにてとらはれし人未だ帰らず

一昨年十二月十八日、事件はベルーの首都リマに於て、今上天皇のお誕生日を祝ふ大招宴の最中に、爆弾の炸裂から始まった。

リマの日本大使公邸を襲つて占領したテロリストは、天皇の名誉と尊厳を蹂躪した。公邸は日本の分身であり、日本にとって重大な恥辱事件であった。在外公館にとって、天皇のお誕生日の招宴は日本の「ナショナル・デー」として最も重要な年中行事であり、できる限り多くの賓客を招いて、日本国の尊厳の源泉が天皇であることを理解してもらふ機会としたのであった。

日本は何が何でもこの事件を解決し、世界に自国の權威を示さねばならなかったが、対応策を打つ術もなく、ただ人質を安全に解放してくれと解決策をベルー大統領に一任、成り行きを見守るだけに終始した。

事件は明けて平成九年（一九九七年）四月二十二日、フジモリ大統領の決断による特殊部隊の急襲、二人の軍人と一人の人質の尊い犠牲のお蔭で、日本人二十四人を含む七十一人の人質の解放、ゲリラ全員の射殺をもって百二十七日ぶりに解決した。しかし、NHKの第一報が「邦人全員救出」だけを繰り返してゐたのには暗い気持ちになった。かの国の人の安否



ブラジルをご訪問中、日系人主催の歓迎会行事で老婦人らと
歓談される両陛下(平成9年6月7日、パラナ州クリチバ市)

をこそ気遣ふべきだらうに。

御詠の「とらはれし人」とは、国と国が
「我が生れし日を祝ひ」交誼を深めるため
に集ってくれた全ての人々であり、その人
たちの無事をひたすら祈られるのである。
そして、深くみ心を痛められつつ御越年遊
ばされた。

赤土のセラードの大地続く中首都ブ
ラジリア機窓に見え来

天皇后両陛下は、五月三十日から六月
十三日にかけて、ブラジル、アルゼンチン
両国からの招待をお受けになり、両国を公
式に御訪問になった。皇太子殿下の時代か
ら数へると三度目、天皇としては歴代を通
じて初めてのことである。



アルゼンチンをご訪問中、歓迎行事で琉球舞踊を披露した日系人女性に声をかけられる両陛下(平成9年6月11日、ブエノスアイレス)

ブラジルとは平成七年(一九九五年)、アルゼンチンとは平成十年、修好百周年を迎へる古くからの友好国。現在、ブラジルには百三十万人、アルゼンチンには四万人の日系人が暮らしてをり、この度の御訪問において両陛下は、とりわけ移民の初期に苦勞の多かった一世の人々に対して、懇ろな慰勞と励ましの御言葉をおかけになり、「長生きしてよかった」と一世の感激も一入であったといふ。

「セラード」は農業に向かない赤土の灌木地のこと。「セラード」「大地」「首都」「ブラジリア」「機窓」と、片仮名と漢語を交錯され、最後に「見え来」と強く言ひ切られた。その御心の内の烈しい高鳴りがお歌のしらべに波打つてゐるかの如くであ

る。セラードと格闘し、想像を絶する辛苦に耐へ、ブラジルの国づくりにも多大な貢献をなしてきた我が父祖たちは、移民小屋に明治天皇の御真影を飾り、困難を乗り越えてきたのである。

この度アルゼンチンは休日変更といふ措置までとって両陛下をお迎えし、両国は国をあげて歓迎した。しかし、二世も三世も叫んだ「天皇陛下万歳」のコールを、日本のマスコミは無視し、両国に対しても冷やかな態度をとり続けたのであった。

コーパス・サンパウロ州知事主催の午餐会で、氏は「土壌が肥沃で、国民が勤勉で、人格が高潔な皇族の皆様が国民の象徴となつてゐる幸福な島国が存在することに思ひを馳せざるを得ません」と述べた。私達がどれほど幸せな島国に生存してゐるのか、一番よく知つてゐるのはかの国の人たちである。

白浜に宿りし朝の海の面を旗なびかせて漁船行く

大阪府で開催された国体の開会式に御臨席になつた両陛下は、翌十月二十六日、和歌山県へ行幸啓になられた。和歌山市では約三万五千人の人々がお出迎へ申し上げた。また、お泊り所の和歌山市和歌浦のホテル前では、午後八時半から県民約三千人の提灯による奉迎を受けられた。

翌二十七日、県内御視察。この御詠は翌二十八日、お部屋から御覧になった早朝の景色の一齣かと拝する。その日もいつもの日と変はらず生業に励む人たちに心寄せ給ふ御まなざしの温さを思ふのである。

「旗なびかせて漁船行く」の御言葉に、早朝の空気を破る景気のいいエンジン音はつきりと聞こえて来る。漁業に携はる者の心意気をも御嘉尚なされたのである。両陛下は和歌山を離れられるにあたり「海や山の美しさとともに、ミカンが至る所たわわに実っている光景も心に残るものでありました。(中略) 秋風の中、各地で歓迎してくれた多くの人々に感謝し、県民の幸せを祈ります」とお述べになった。

宮殿を出づれば暮るる冬空に月と明星な並みて輝く

この御詠は十一月頃のものかと拝する。この月も国事行為が目白押しで、御休息の暇もありにならない。宮殿での御執務も多かったが、その間、皇居を掃き清めるために馳せ参じた各地の勤労奉仕団に七度も御会釈を賜ってゐる。直かに民と接し給ふひとときをこの上なくお楽しみにされてゐるのではなからうか。

また二十三日は、一年の内でも最も御心を注がせ給ふ新嘗祭である。陛下は夕刻六時から「夕の儀」、午後十一時から二十四日午前一時にかけての「暁の儀」を、宮中神嘉殿しんかでんにて

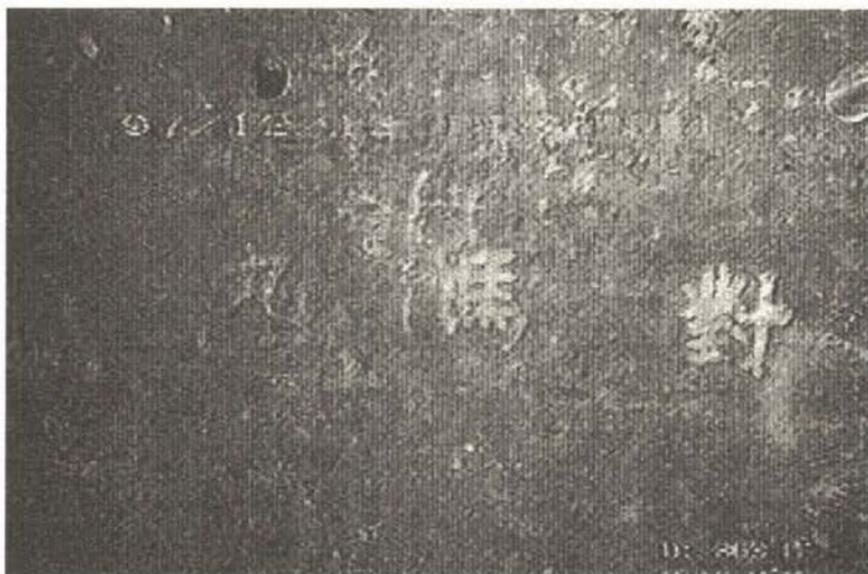
御親祭なされた。純白の御祭服を召され、神饌しんせんを御手づからお供へになり、御拝礼の上、御告文を奏されたのち、御直会にて新穀をきこしめされた。我ら眠つてゐるとき、かくも重大秘儀がおごそかに宮中で執り行はれてゐたのである。民族のいのちを養ふ五穀豊穰への祈りと感謝をこめて、陛下は神々の前に伏し拝まれたのである。

宵の明星（金星）は日没して一、二時間の間にしか見られない。凜と漲る冬の夜空に煌々と輝く月と明星、その雄大な天の運行の一齣をお詠みになった。日々のおつとめを一心に果たさせ給ふ陛下の充実した御心が、冷たい冬の夜氣にふれ、まことに忘れ難いしらべとなつて迫ってくるのである。

疎開児の命いできて沈みたる船しんかい深海に見出だされけり

戦時中に米軍の攻撃を受けて沈没した学童疎開船「對馬丸」の沈没推定海域を調査してゐた海洋科学技術センターは十二月四日、「海底に長さ約一一〇メートル、高さ約二〇メートルの物体を発見した」と発表した。現場は鹿児島県吐噶喇列島とから悪石島あくせきの北西約一〇キロ、深さ八七一メートルの海底。そして終に無人深海探査機のビデオカメラが船首右舷に右から左に書かれた船名をとらへた。

對馬丸は昭和十九年（一九四四年）八月二十二日、那覇から長崎へ向かふ途中、米潜水艦



今上陛下と同世代の児童ら1484人を呑み込んで米潜水艦に撃沈された
対馬丸(写真は、平成9年12月12日、海底で確認された対馬丸の船名)

の魚雷を受け沈没した。沖縄戦に備へ集団疎開する児童七百三十八人を含む千四百八十四人が死亡する大惨事となった。

たしかに筆者も新聞で見てその事実は記憶にあつたが、陛下は對馬丸と確認されるまでの一週間、冷たい海底に沈む幾多の骸^{むくろ}を思ひつづけてをられたのであらう。

戦死者の魂は、陛下のお心の中に生きてゐるのだと気付いたとき、私は驚愕した。戦死者を思はない人の心の中には生きてゐないといふ衝撃が走った。みたまが何処^{いづこ}にさまよつてゐても、天皇といふ方のみ胸にいだかれることを信じてつはものは戦つたのかとも思った。

力も尽きはて、父母の名を呼びつつ消えていった幼らのいのちは、今、陛下にいだ

かれて懐しい日本に帰ってきたのである。学童の父母も存命者は少なからうが、泉下の父母たちも泣いてゐることであらう。

荒れし野を再び森になさむとて集ひし人と苗植ゑにけり

両陛下は第四十八回全国植樹祭に御臨席のため、宮城県白石市しろしの国立南蔵王青少年野営場に行幸啓遊ばされた。青空のもと約一万二千人の参加者が起立してお出迎へする中、午前十一時会場に御到着、会場中央のステージにお着きになった。

この日、天皇陛下はブナ、皇后陛下はオホヤマザクラの苗をお手植ゑになり、スギとミツキの種もお手蒔きになられた。

戦後、蔵王のふもとに入植した人々の懸命の開墾にもかかわらず、かなりの標高のある現地は強風に吹き悩まされ入植者たちは引きあげてしまひ、森が育たなくなつてしまつた。御詠の「荒れし野」とあるのはそのことを偲ばれてのものとする。

昭和三十年（一九五五年）、昭和天皇が同県黒川郡大衡村での植樹祭にお成りのときの御製に「茂れとし山べの森をそだてゆく人のいたつき尊くもあるか」とあるが、このときのお手植ゑで育つた松の間伐材を使って作られた鋤を陛下はお手持ちになられた。御父陛下の温もりのこもる鋤で、緑豊かな国土をと祈りをこめさせ給ひ、苗を植ゑられたのである。

放たれしまつかはの稚魚は大槌おほつちの海の面近くしばしただよふ

天皇・皇后両陛下御臨席のもと、十月五日、岩手県上閉伊郡かみへい大槌町おほつちの大槌漁港で「第十七回全国豊かな海づくり大会」が開催された。漁業関係者ら約二万三千人が参加し、地元の漁民の大漁旗を掲げての歓迎漁船パレードを御覧になったのち、棧橋から豊かな水産資源を祈られ、マツカハ、ヒラメ、クロソイの稚魚を御放流になった。

御詠の「まつかは」とは、茨城県から千島に分布するカレヒ科の魚で成魚は七〇センチにもなり、大変美味ときく。西日本に住む私などにはほとんど馴染みのない種であるが、それだけにこの魚名を詠まれた御心が偲ばれるのである。

平成三年、愛知県にお成りのとき「くるまえば豊浜漁港に放てれば青き深みに泳ぎ行きけり」と詠まれた。くるまえばの幼生とまつかはの稚魚が未知の大海に溶け込んでゆく御表現の対照も興味ぶかい。

また「海の面近く」と単に「海の面」ではない、海面下の微妙な稚魚の位置をもお示しになり、「しばしただよふ」と幼いまつかはのとまどひも伝はってくるやうで、その生き生きとした調べが心に残るのである。

幼きも老も交れる人々の集団演技見つつ楽しむ

両陛下は、十月二十五日に大阪市長居陸上競技場で行はれた第五十二回国民体育大会（なみはや国体）秋季大会の開会式に御臨席になった。第一回大会（大阪を含む近畿圏主催）以来五十一年ぶり、単独開催としては初の大阪での開催となった。

大会は三十八年ぶりの薄暮開催で、選手観客ら七万五千人を擁して行はれた式典につき、開会式のクライマックスは日没三分後に始まった「式典後演技」である。和太鼓やシンセサイザーの音楽に合はせて、たいまつと火とレーザー光線が交錯するフィールドで千七百人が歌舞伎風ダンスを繰り広げた。

御詠に「幼きも老も交れる」とあるが、五歳の園児から八十歳のシニアも交り、小中高の学校団体による集団演技に見入られる陛下であった。他県の大会に比べ地域の高齢者の参加が多かったのは本年の特色で、陛下はそこに御まなざしを注がせ給ひ、「見つつ楽しむ」とおよろこびを直叙せられたのである。

皇后陛下の御歌

嘆かひし後の眼の冴えざえと澄みぬし人ら何方に住む

平成七年一月三十一日、大震災お見舞のため兵庫県に行幸啓された両陛下のお写真を拝すると、皇后陛下は実に温かな御笑みで被災者の手を取って見つめてをられる。菩薩様にいだかれたやうな被災者の安心の面持ちすら伝はってくる。何もかも失って了った人たちの眼は冴え冴えと澄んでゐた。その人たちの安否を決してお忘れになつてはゐないのである。

汚染されし石ひとつさへ拭はれて清まりし渚あるを覚えむ

昨年一月二日、鳥根県隠岐島沖でロシアのタンカーが重油一万九〇〇〇トンを積んだまま沈没。その重油流出事故で周辺日本近海がどす黒く汚染され、環境が破壊された。

大震災では御世話になつたとて、今度は関西の某高校がバスを列ねてポランティアに馳せ参じたりもした。この国の人たちはロシアに恨みつらみを言ふ前に、お互ひに扶け合ふのである。石一つ一つの油の汚れを拭ふといふ気の遠くなるやうな作業を黙々とやる国民である。こんな国が世界の何処にあらうか。その信じ難い労苦によつて報はれた「清まりし渚」をふかく御心に刻まれたのである。

かなたより木の花なるか香かり来る母宮ははみやの御所に続くこの道

昨年みうたの御歌「彼岸花咲ける間あはひの道をゆく行き極きはまれば母に会ふらし」が思ひ出される。

この度の御歌の「母宮」は皇太后様であられる。毎週、両陛下は紀宮様と共に吹上大宮御所に伺つてをられ、その道すがら、木の花であらうか、「香り来る」と詠まれた。

昨年みうたの御歌にも「道」といふ御言葉が拝され、「道」に漂ふ「香」に、母宮、さらにはまた他界された母君を思はれる尊いお気持ちこころが偲おもばれてならない。

歌会始の御製、御歌

大学この来しかた示す展示見つつ国開ひらけこし道を思ひぬ

陛下のお歌は昨年十一月二十六日、両陛下が東京大学創立百二十周年記念「東京大学展—学問の過去・現在・未来—」を御覧のため、東京大学大講堂へ行幸啓になった折のものである。我が国の学術文化の発展を具さに御覧になった陛下は「国開けこし道」と偲おもばれた。明治開かれてこの方、東洋の弱小国日本が世界に伍して競ひ合ひ、日本の光輝を世界に知らし

めた幾多の学徒の苦闘を嘉し給うたものと拝する。

また、昨年の御製「五十年の国進みこし年月にいたづきし人の功をしのお」も合はせ拝すれば、その「道」のけはしくも雄々しきさまが偲ばれるのである。

移民きみら辿りきたりし遠き道にイペーの花はいくたび咲きし

皇后さまの御歌は、昨年ブラジルを訪問されたときのもので、移住者の長い歴史を「辿りきたりし遠き道」と詠まれ、ブラジルを代表する花「イペー」の咲く季節に重ね合はせて、そのみ思ひを託された。イペーの木は高さ約三〇メートル、春一斉に黄色の花が咲く。

両陛下とも国の歩みに御眼を留めさせられたことに驚かされるとともに、我らが行く道をも暗示せさせ給うたものと拝されるのである。

【宝辺矢太郎】

平成十一年年頭ご発表

天皇陛下御製

長野パラリンピック冬季競技大会

競技終へしアイススレッジの選手らは笑みさはやかにリンクを巡る

英国訪問

戦ひの痛みを越えて親しみの心育てし人々を思ふ

デンマーク訪問

デンマークの君らと乗れる船の上にクロンボー城の砲声響く

奥尻島の復興状況を聞きて

五年の昔の禍まがを思ふとき復興の様しみてうれしき

集中豪雨の被災者を思ひて

激しかりし集中豪雨を受けし地の人らはいかに冬過ごすらむ

長野オリンピックク冬季競技大会

会場に世界の人と共に歌ふ歡喜の歌は響き渡れり

第四十九回全国植樹祭 群馬県

種々の木々植ゑにけり人々と「二十一世紀の森」に集ひて

第五十三回国民体育大会秋季大会 神奈川県

若き人も年重ねたる人々も集団演技に共に繩飛ぶ

第十八回全国豊かな海づくり大会 徳島県

細き葉のあまもの苗を手渡しぬ稚魚を育む藻場になさむと

〔平成十一年歌会始〕

青〔御題〕

公害に耐へ来しもみの青葉茂りさやけき空にいよよのびゆく

(年頭ご発表に含まれてゐない前年の御製)

日本傷痍軍人会創立四十五周年にあたり

国のため尽くさむとして戦たたかひに傷つきし人のうへを忘れず

皇后陛下御歌

英国にて元捕虜の激しき抗議を受けし折、かつて「虜囚」の身となりしわが国人くわにびとの上もしきりに思はれて

語らざる悲しみもてる人あらむ母国ぼこくは青き梅実る頃

サッカー・ワールド・カップ

ゴール守まもるただ一人なる任にんにして青年は目を見開きて立つ

うららかに

ことなべて御身おんみひとつに負おひ給ひうらら陽ひのなか何思なにおほすらむ

天皇誕生日月次御詠進歌

【平成十一年歌会始】

青〔御題〕

雪原せつげんにはた氷上にきはまりし青年の力ちから愛かなしかりけり

（年頭ご発表に含まれてゐない前年の御歌）

日本傷痍軍人会創立四十五周年にあたり

復興の国の歩みに重ね思ふいたつきに耐へ君らありしを

競技終へしアイススレッジの選手らは笑みさはやかにリンクを巡る

昨年三月、冬季五輪長野大会に引き続いて開催された長野パラリンピック冬季競技大会は、わが国選手のファイト溢れるプレーによって、多くの国民に心暖まる感動をもたらした。

天皇・皇后両陛下は、冬季五輪の後再び長野県に行幸啓になり、三月十一日の午後、パラリンピック・アイススレッジスピードレースの男子・女子千メートル競技をご観戦になった。

翌日の信濃毎日新聞は、このときの様子を次のやうに伝えてゐる。

〔両陛下は各選手の力走に盛んに拍手を送られた後、予定を延ばして表彰式も観戦。日本選手らの活躍を喜び、満員の観客が順に立ち上がりながら人の波をつくると、一回、二回と一緒に両手を上げるしぐさで参加された。それを見たスタンドがさらに沸いた。〕

御製は、競技後の選手らの様子をお詠みになったものであるが、「笑みさはやかにリンクを巡る」といふご表現に、堂々の勝負を終へて満たされた面持ちのわが子を静かに見守る、父親のやうな御眼差しを拝する思ひがする。

かつて、わが国戦後の復興と威信の象徴となったオリンピック東京大会に際し、昭和天皇



エリザベス女王主催の晩餐会を前に(写真右より、エリザベス女王、両陛下、エリザベス皇太后、エディンバラ公。平成10年5月26日、バッキンガム宮殿)

はその華やかさの陰で、「この度のオリンピックにわれはただことなきをしも祈らむとする」とお詠みになったのであったが、競技後の何気ない場面に目を止められた今上天皇のこの御製にもまた、至高の父性の自づからなる発露を仰ぎまつるのである。

戦ひの痛みを越えて親しみの心育て
し人々を思ふ

天皇・皇后両陛下は、五月二十三日から六月五日にかけて、ポルトガル国をご訪問の後、国賓として公式に英国とデンマーク国をご訪問になった。

四年前、英国では戦勝五十周年事業としてVJデー(対日戦勝記念日)が盛大に催され、年間を通じて反日報道の嵐が吹き荒

れたところであり、ご訪英直前にも五月三日付の英紙「インデイペンデント」が陛下と殺人犯の写真を同列に扱ひ、外務省が遺憾の意を表明するなどの事件があった。

このやうななかでのご訪英に際して、天皇陛下は、宮内記者会代表質問に「戦後両国は良好な関係になつてきていますが、その陰には戦争の傷を癒やすために、双方で地道に力を尽くしている人々の努力があつたことを忘れることはできません」とお答へになり、ご訪英中も、エリザベス女王主催の晩餐会において同様の趣旨のお言葉を述べられたばかりでなく、日英関係四団体（日本協会、英国日本人商工会議所、ロンドン日本クラブ、日英協会）が共催したレセプションにおいて、日英関係促進への努力に対し深く感謝の意を表されたといふ。

御製の「戦ひの痛み」とは、避け難い運命により戦ひを余儀なくされた者同士の名状し難い心の痛みであり、同時にそれは陛下のお心の痛みでもある。「人々を思ふ」とは感謝の念のご表明にはかならないが、静かで莊重な調べのなかに、名もない国民の誠意に直結するゆるぎないご信頼と御真心とが慎み深い形をもって顕れてゐるのを拝しまつるのである。

デンマークの君らと乗れる船の上にクロンボー城の砲声響く

五月三十一日にデンマーク国をご訪問になり、マルグレーテ女王ご一家の歓迎を受けられた天皇・皇后両陛下は、翌六月一日、王室のヨット「ダンネブロー」で暫しの舟遊びをお楽



クロンボー城沖に行く王室専用ヨット「ダンネブロー」(写真左より、マルグレーテ女王陛下、両陛下、ヘンリック殿下。平成10年6月1日)

しみになった。

クロンボー城は、首都コペンハーゲン近郊の海岸にある美しい城である。シェークスピアの名作「ハムレット」の舞台として知られてをり、中世において、バルト海航行の要衝の地オースアン海峡の通行税を徴収するため、フレデリック二世が十一年の歳月をかけて造営したといふ。

マルグレーテ女王陛下と王族方はこの日、天皇・皇后両陛下の全てのご日程に行されたのであるが、彼方にスウェーデン大地を望みつつ北欧の海を滑るヨットの上のご歓談は、ご多忙なご旅行のなかで数少ないおくつろぎのひとつでありましたであらう。

天皇陛下は、アンデルセンの国の遠い昔

をお俵びになりながら、礼砲だったであらうこの日の砲声を、いかにも床しくお聞きになられたことと拝する。「クロンボー城の砲声響く」と現在形で詠み切られたところに、爽快な臨場感を覚える。

いつとせ
五年の昔の禍を思ふとき復興の様しみてうれしき

平成五年（一九九三年）七月十二日の深夜、北海道南西沖におけるマグニチュード七・八の大地震と大津波の発生により、奥尻島と対岸の本道の町村は、瞬時にして北海道の地震災害史上最大の災禍に見舞はれた。

それから五年経った昨年三月、奥尻島は「完全復興宣言」を行った。

天皇陛下は、災害には格別お心を煩はされ、災害発生のおときはばかりでなく、復旧復興がままならない地域のことについては、幾年にも亘り幾たびも、その後の状況を災害地の知事その他の関係者にお尋ねになる。

奥尻島の「完全復興宣言」をお聞きになったとき、その力強く明快な言葉の響きを、陛下がどれほどお喜びになられたか計り知れない。御製は「しみてうれしき」と連体形により強く結ばれてゐるが、深く噛みしめるやうな安堵のご様子も、「しみて」といふ短いお言葉のなかに澄んだ宝石のやうに凝縮されてゐる。

激しかりし集中豪雨を受けし地の人らはいかに冬過ごすらむ

八月二十六日から三十一日にかけて、本州上に停滞した前線の影響により、関東北部と東北南部の広い地域が記録的な豪雨に襲はれた。なかでも栃木県や茨城県の被害は著しく、橋梁流失や河川の氾濫による浸水などの被害が相次いだ。

また、九月二十四日と二十五日には高知県がかつてないほどの集中豪雨による被害を被った。

天皇陛下は、機会あるごとに各地の被災状況をお尋ねになり、多数の犠牲者に対する悼みと復旧に努めてゐる関係者への労ひのお気持ちをし、侍従長を通じて被災地の県知事にお伝えになられた。

寒さが身にしみる頃となり、折りに触れて陛下のお心に懸かるのは罹災した国民の暮らしのことである。長崎県普賢岳の噴火による被災地のことなど、いまでも県知事をお召しになつてお尋ねになつてゐるのであるが、奥尻島のやうに災害地の復興が成るまでは、陛下のお心が安まることはないのである。

会場に世界の人と共に歌ふ歓喜の歌は響き渡れり

昨年二月、長野県において開催された冬季五輪長野大会は、前述の長野パラリンピックと併せて、経済不況や政治混乱のために暗く重苦しい雰囲気を漂はせてゐたわが国にとって、久々に、明るく爽やかな話題を提供する催しとなった。

札幌大会以来二十六年ぶりの国内開催の五輪となった本大会では、善光寺の鐘が開幕を告げ、諏訪神社の御柱祭「健御柱」や大相撲横綱曙関の土俵入りで会場が清められるなど、わが国の文化を努めて紹介しようとする試みもなされた。

大いに盛り上がった開会式は参加者五万人余の「歓喜の歌」の大合唱によって締め括られたのであるが、「世界の人と共に歌ふ」とお詠みになったところに平和への限りないご希求の念を拝するのであり、「歓喜の歌は響き渡れり」といふ下の句のダイナミックなご表現にそのお気持ちの強さを窺ひまつるのである。

種々の木々植ゑにけり人々と「二十一世紀の森」に集ひて

今年の第四十九回全国植樹祭は、五月十日、群馬県立森林公園「二十一世紀の森」において開催された。

首都圏の上流に位置する群馬県は、昔から水源地域として森林育成に努めてきたところであり、利根川水系を中心として森と水への関わりはとりわけ深い。

この日、会場に集った一万七千五百人の参加者とともに、天皇陛下はスギ、ブナ、コナラの苗木を、皇后陛下はヒノキ、オホヤマザクラ、ヤマボフシの苗木をそれぞれお手植えになった。

御製の「種々の木々」は多様な大自然を彷彿とさせ、「人々と」は一句ながら、昭和二十五年以来、一大国家運動として営まれてきた国土緑化推進事業の歴史をも偲ばせる端的なご表現となつてゐる。また、「二十一世紀の森」といふ固有名詞をそのままお遣ひになつたのは、森林の健やかな未来を連想させるその呼称を、こよなくお喜びになつたからであらうと拝察されるのである。

若き人も年重ねたる人々も集団演技に共に繩飛ぶ

大東亜戦争敗戦直後、連合軍総司令部による制約のなかで財団法人大日本体育会（現、日本体育協会）を中心としてスポーツ振興運動が展開され、翌二十一年の京阪地方における第一回大会以来、国民体育大会は、国内最大のスポーツの祭典として日本スポーツの再建と進展の足跡を記し、昨年の「かながわ・ゆめ国体」をもって五十三回を数へた。

天皇・皇后両陛下は、十月二十四日、横浜国際総合競技場で行はれた秋季大会開会式にご臨席になつた。



横浜国際総合競技場で行はれた「かながわ・ゆめ国体」に臨まれた両陛下(平成10年10月24日)

神奈川県では、「いきいき体操フェア」「マイペースウオーク」を国体プレイベントとして開催するなど、国体への県民参加に配慮してきたところであり、開会式の式典の前のアトラクションの一つに県民参加による長縄跳びがあった。

世代断絶の時代と言はれて久しいが、老いも若きも入り交じってともにスポーツを楽しむ様は、国民の健全な心身の養成を旨指したこの事業の目的を象徴する光景であり、陛下は、関係者への労ひのお気持ちも滲ませつつ心からお喜びを表明されたのである。

細き葉のあまもの苗を手渡しぬ稚魚
を育む藻場になさむと

十一月十五日、天皇・皇后両陛下ご臨席のもと、第十八回全国豊かな海づくり大会が、徳島県鳴門市鳴門ウチノ海総合公園で開催された。

徳島県は、播磨灘、紀伊水道、太平洋の特徴ある三つの海に囲まれ、その漁業環境に合はせた栽培漁業や資源管理型漁業への取組みが盛んであるといふ。

両陛下は式典の後、マダヒ、ヒラメ、オニオコゼの稚魚をウチノ海に放流されたが、このとき海藻も一緒に放流されたのであらう。

「あまも（甘藻）」は花が咲き種が生じる顕花植物の一種ださうであるが、御製は、「細き葉のあまもの苗」がやがて美しく繁るであらう海底の様を想像せしめ、国土緑化と相並ぶ海づくり事業の大切さをお諭しになってゐるのである。

皇后陛下下の御歌

語らざる悲しみもてる人あらむ母国は青き梅実る頃

御歌はご訪英の折に詠まれたものであり、「英国で元捕虜の激しい抗議を受けられた折、
『虜囚の身』』となったわが国の人々の上をも思はれて詠まれた御歌」との宮内庁の説明が付

されてゐる（「道」では詞書に改められてゐる）。

皇后陛下は、昨年のお誕生日における宮内記者会の質問へのご回答のなかで、「英国では元捕虜の人達の抗議行動があり、一つの戦争がもたらすさまざまな苦しみ思いをめぐらせつつ旅の日を過ごしました。先の戦争で、同様に捕虜として苦しみを経験した日本の人々のこともしきりに思われ、胸塞ふたぐ思ひでした。傷ついた内外の人々のことをこれからも忘れることなく、平和を祈り続けていかなければと思います」と述べてをられる。

「母国は青き梅実る頃」に遠い英国の地にあられて、皇后様は、運命のいたでを敢へて語らない多くの人々の悲しみを心から憶念され、その健気な随順の生き様を篤く慈しまれたのである。

ゴール守まもるただ一人なる任にんにして青年は目を見開きて立つ

昨年六月十日から七月十二日にかけて開催されたワールドカップ・フランス大会は、わが国が念願の初出場を果たした記念すべき大会となった。

世界の壁は厚く、ゲームでは一勝も上げられなかったが、わが国代表選手の奮闘ぶりに多くの国民が熱狂し、感動した。会場では遙々応援に駆けつけた若者らの国歌の大合唱が響き渡り、国旗が幾つも大きく打ち振られたのであった。

世界の強豪を相手に堂々の戦ひを演じる選手らの活躍の中で、ゴールキーパーの働きには一際目を引かれるものがあつた。

御歌には、孤独な任務に敢然と立ち向ふ屈強の若者への限りない賞賛のお心が、共感と慈愛のご心情を伴って表されてゐる。

ことなべて御身ひとつに負ひ給ひうらら陽のなか何思すらむ

皇后様は、お誕生日における宮内記者会の質問へのご回答において、平成十年目の感想として「この節目の年にあたり、御歴代の御仁慈に改めて深く思いをいたし、平成の御代のつづがなきをお祈りいたします」とお述べになつてをられる。

御歌の「御身ひとつに負ひ給ひ」とは、今上陛下がお継ぎになられたご任務の重さへの切実なご認識を示されたものであり、「何思すらむ」とは「うらら陽」の日にあつても安まることのない大御心を憶念されたものであつて、ひたむきな内助の御眼差しを拝しまつるのである。

まことに恐懼に耐へない次第である。

歌会始の御製と御歌

公害に耐へ来しもみの青葉茂りさやけき空にいよよのびゆく

天皇陛下の御製は、自然のおほらかな生命力をお詠みになったものである。公害は植物にとって理不尽な障害であるが、もみの木はめげることなく「さやけき空」に向って伸びていく。

わが国は戦後永く混迷を続けてきた。立ち返るべき青空のごとき道に向へば、国の命も青葉茂るもみのやうにのびやかさを取り戻すことができる筈である。

雪原せつげんにはた氷上こおりにきはまりし青年ちからかなの力愛ちからしかりけり

皇后様の御歌は、青年の若く強き力をお詠みになったものである。それは、ただ若いがためだけの力ではない。ぎりぎりの限界においてもなほ弛むことのない力である。さうであつてこそ、青年の力は限りなく美しく、いとほしいのである。

第二部

天皇・皇后両陛下の御心を仰ぎて

皇太子殿下を仰ぐ

『ともしび』——皇太子同妃両殿下御歌集拝誦

小野吉宣

(編者注・本稿は
今上天皇ご踐祚前
の昭和62年2月謹
記)

一、神まつる昔のてぶり

皇太子殿下（今上天皇）は昭和五十九年（一九八四年）十二月二十日の記者会見で、「皇族は、陛下の御心を大切にし、また、国民の望みに沿ってつとめを果たしていくということが大切であり、それを誠実に行ってゆくということ、それ自身が帝王学になると思っております」と申された。

ここに言はれる「帝王学」を、皇太子殿下は昭和八年（一九三三年）にご生誕あらせられてから、日嗣ひつぎの御子みことしての御自覚のもとに、歴代の天皇方に学び、今上陛下（昭和天皇）を直接の師として、今日まで踏ませ給うたのである。

殿下は「陛下の御心を大切にし」と申される。陛下の御心をどのやうに、そしてどれほど

大切にされてゐるかは、直に殿下の御心が表現されてゐる和歌を心をこめて味はふことが、何よりも大切なことであらう。幸ひなことに我々国民は、昨年（昭和六十一年）の皇太子殿下のお誕生日を記念して、宮内庁東宮職の編集にかかり婦人画報社より出版された皇太子同妃両殿下御歌集『ともしび』を容易に手にすることができるのである。

戦後私たち日本人は、物質的豊かさを追ひ求めるあまり、本質的な豊かさの源泉はどこにあるのか忘れてしまつてゐる。したがつて精神的豊かさの源泉たるべき「祈り」の価値が正しく国民生活の中に位置づけられなくなつてゐるのである。

ところが皇太子殿下は私たち国民の知らないところで「神まつる昔のてぶり」そのままに祈り給うてゐたのである。

朝

神しん殿でんへすのこの上をすすみ行く年の始の空白み初む
〔昭和四十九年〕

重田保夫東宮侍従長の説明によれば、皇太子殿下は元旦のこの日「四時半ご起床、身を潔められて、五時二十分御所をお発ちになり、宮中三殿に向かわれる。綾りょう綺き殿の一郭で、皇太子のご正装である黄丹わうたんのご袍ほろを召され、賢所・皇靈殿・神殿の順にご拝になる。神殿へお進みになる頃、その年はじめての朝が明け始める。御所で殿下をお見送りになつた妃殿下は、

その同じ頃、御所のお庭にお出になり、殿下のご拝に合わせて東南の方かたに向かって祈られる〔御歌集「ともしび」発刊によせて—東宮殿下のご日常〕のである。

神殿へすすみ給ふ皇太子殿下の御歩みと共に、おそかに年の始めの朝が明け初める。その一瞬を「空白み初む」と詠まれる。「すすみ行」かれる殿下は、無私にして無我、祀り給ふ神と一体になつてをられる。そして白みそめる空、つまり大自然と雅に優しく調和してをられるが故に力強いみ歌と拝されるのである。

二、殿下とご外遊

皇太子殿下は御年二十一歳のとき、学習院大学ご在学中、天皇陛下のご名代としてエリザベス女王の戴冠式に参列された。それを機に昭和二十八年（一九五三年）三月三十日から十月十二日まで欧米十四カ国を公式訪問されてゐた。その後、昭和三十五年には妃殿下とご一緒に日米修好を記念した米国を訪問されてゐる。爾来、両殿下で公式に訪問された国は実に四十一カ国に及ぶと言はれてゐる。

しかしマスコミを通して伝へられる殿下の外国ご訪問のニュースからでは、その意義が納得ゆくやうには、まったくつかみ得ないので、直接、殿下の御歌おうたを拝誦して外交交際の意味を考へて見たいのである。

船出

荒潮のうなばらこえて船出せむ広く見まはらむとづくにのさま [昭和二十八年]

船出される青年皇太子の前には「荒潮のうなばら」が横たはつてゐる。波荒きうなばらを大胆に力強く越えて行かんとされるご心懐が「荒潮のうなばらこえて船出せむ」から拝される。その強いお心持ちが大きくうねるやうに「広く見まはらむとづくにのさま」へと一気に「とづく。」とづくにのさま」を「見まはらむ」とされる。ただ見まはられるのではない。「広く見まはらんとなされた。殿下お一人の「船出」ではない何かもっと大きいもの——戦後の日本そのものの船出を暗示させる勇壮な御歌なのである。

御歌はつづく。殿下の詞書に、

英国女王陛下戴冠式参列のため渡英、引続き欧州

諸国ならびに米国を訪問す。その折の歌 十四首

エディンバラ

人気なき湖の面に白鳥一羽我たたずめば近寄りて来ぬ [同]

人気ないのは夕方なのであらうか朝早くだからであらうか。密なスケジュールの殿下も一

人になられてゐる。たたずみ給ふ東洋のプリンスに挨拶するやうに一羽の白鳥が近寄つて来た。静かな湖の面に小さな波をたてながら白鳥がすいすいと殿下の方に泳いでゆく。思ひ描くに、優雅にして美しい一幅の名画となつてゐるのである。

スコットランド 二首

ヘザー茂る荒野を車走らせてバックルー公の館に向かふ [同]

ヘザーとはHEATHERと綴り、ヒース属のシヤクナゲ科のスコットランドに多い小低木。人間の手が加へられずにヘザーが茂るにまかせてある荒野を「ヘザー茂る荒野」とごく自然に詠まれてゐる。自然の「荒野」と「車」といふ文明の調和が「車走らせて」と続く表現の中にみられ、しかもスピード感がある。それが期待感をふくらませ、歴史を経てゐるであらう「館」に「向か」はせ給ふ。

こげ茶色のヘザーと石ころの岡の上に顔の毛黒き羊群遊ぶ [同]

夜久正雄先生は「神社新報」(昭和六十二年一月十九日号)に右の御歌を拝誦して「何かスコットランドといふ土地の本質が作者の眼力にとらへられ一首に圧縮して表現されてゐるやうに感じられる。作者の眼力のきびしさ——無心に依るものであらうが——が感じられて、

とても二十一歳の人の歌とは思へない」と絶讃してをられる。

イングランドは北海道より緯度が高い。その北部にあるスコットランドは、あてはめるならば樺太の北端くらゐに位置してゐる。暖流の影響があるとはいへ寒帯気候である。おひ茂つてゐたヘザーは緑ではなく「こげ茶色」であり、「荒野」は石ころの多い岡であつた。日本の景色とは違ひ、低い岡が幾重にも波打ち、地平線まで見渡せる。広々としたそこらあたりを住処すみかとして「群遊」んでゐる動物は「顔の毛黒き羊」だったのである。

主観をまじへずに正確に写生された淡々としたご表現であるが、全体の中に部分しんがを確と詠まれ、それだけにとどまらず、心のこもつたあついまなざしを注いでをられるので「群遊ぶ」羊がいとほしくさへ思へてくるのである。欧米の人々に対しては勿論、自然と生きとし生けるものに注がれるこのまなざしがあればこそ外交交際も実を結ぶのである。

三、英国首相チャーチルとの握手

戴冠式前夜

夜ふけて街を歩けば歩道の上はこよひを明かす人々にうまる [昭和二十八年]

エリザベス女王の戴冠式の前夜、「夜ふけて」ロンドンの街に出られた。前夜から式をお



昼食会ご出席のため英国首相官邸に着かれた皇太子殿下を丁重にお迎へするチャーチル英首相(昭和28年4月30日)

祝ひするために街にあふれ出た英国国民の素朴な善意が歌のしらべにあらはれてゐる。皇太子殿下もあたかも英国国民の袖と触れあふやうに歩道を歩かれたのである。

勿論、式当日は日本国民の代表として、総理大臣よりも更に深い歴史的永続的日本国への無限責任をご自覚され参列された。ここにそれを示すによい一葉の写真がある。

W・チャーチル(二八七四―一九六五)は第二次世界大戦の勝者に属する国の首相であった。

この写真(上掲)は大戦後八年、占領から解放されて一年後、勝者英国の老宰相が敗戦国日本の皇太子と握手してゐる写真ではある。

堂々と胸を張り悠揚迫らざる態度でにこやかに手を差し出されてゐるのが我が国の皇太子殿下である。こちらが勝者ではなく、あの戦では敗者の方であった。だが、この写真からは勝者・敗者の関係が逆転してゐるのではないかと思

へる。占領解放一年にしてなぜかういふ姿が現出したのか。

七十九歳の老首相、平生は傲然と大きな葉巻をくゆらせてゐるのだが、ここではいたく謙虚な表情をしてゐる。あの氣位の高いアングロ・サクソンが握手のときに頭を下げてゐる。これが英国の伝統精神の体现であらう。皇室に対する老首相の礼節を讀へねばならない。と同時にこの写真に見る姿は、時の吉田茂総理大臣では起こりえない。天皇陛下のご名代の皇太子殿下に於て、実を結ぶ姿であることを、日本人は永久に忘れてはならない。

殿下のお姿を拝見してゐると、今上陛下の御歌——松上雪が思ひ浮かぶ。

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ 「昭和二十一年」

「み雪」が「ふりつも」ってゐるのは「松」の上であるが、内的には「ふりつもるみ雪に」耐へてをられるのは、敗戦の全責任を負つてをられる陛下御自身のことであると拝察する。重くのしかかるみ雪に耐へて、青々とした瑞々しい色を少しも変へない松を雄々しいと感嘆され「人もかくあれ」と詠まれた。

ここに言ふ人とは我々国民のことであらうが、陛下は切実求道のご体験に立ち歌に詠んでをられるので「人」とは先づもつて陛下御自身の御事であると俚ばれる。本当の戦は今からであるといふゆるがぬ威力が御歌にこもられてゐる。

皇統連綿・万邦無比の皇室、更に年輪を重ねるべきところに皇太子殿下が御座するのである。大東亜戦争敗北の憂き目に会ふとも、皇太子殿下もまた「いろかへぬ松のごとく雄々しく」「誠の道を」ふみ給うたことがこの写真から仰がしめられるのである。

「船出」は決して殿下お一人の船出ではなかった。日本そのものの「荒潮のうなばらこえる」「船出」であった。今上陛下があつく見まもり給ふなか、皇太子殿下は国民全てをそのみ船に乗せてをられる。それを私たちが気づかなかっただけである。

四、外交的「信」

昭和二十八年に殿下がむすばれた外交の絆は、年を経るごとに強くなつてゐることは御歌からうかがはれるところである。

ベルギーのラーケン宮に泊りて

若き君の運転し給ふ自動車は日のもるる林馬場へと急ぐ
〔昭和二十八年〕

セネガルとザイル訪問の途次ベルギーに立寄りて

オランダの君も加はるベルギーの宮居の夜ははや更けゆきぬ
〔昭和五十九年〕

ベルギーの殿下を「若き君」と呼ばれる我が日本の殿下は御年二十一歳（数へ）である。ベルギーの若き君は同じく若い日本の殿下を自動車に乗せ、おもてなしをなされる。この御歌を拝誦すれば、私たち国民もベルギーの若き君に歓待されてゐるやうに喜びが湧く。

二十一年後の昭和五十九年（一九八四年）もベルギーと日本の交際はつづく。「ベルギーの宮居の夜は」ベルギーの君が主催してをられるのであるが、隣の国の「オランダの君」も加はられての宮中晩餐会となつてゐる。日本とベルギーそしてオランダの三国は友好親善の度を更に深めてゐることが「はや更けゆきぬ」といふご表現から明らかに拝察されるのである。

外交と言へば、日本では政治・経済面のみを強調するきらひがマスコミにある。かつて経済的に走りすぎる日本をみて、フランスのド・ゴール大統領から「日本人はエコノミック・アニマルだ、総理大臣はトランジスタのセールスマンだ」と嘲弄された。文化と歴史を背景にした国と国とのこのやうな政治・経済をこえた外交交際の意義を我々国民が正しく評価する力を見失つてゐるから指摘されたのであらう。

殿下が今日までにご訪問になつた国は七十カ国を超える数にのぼつてゐる。ここで、アフリカのセネガルとザイルを訪問された御歌を拝誦してみよう。

セネガルを訪問 四首

青き海乾きし大地を越えゆきて機は近づきぬダカール空港 [昭和五十九年]

あまたなる奴隷送りしゴレ島に人の歴史の流れを思ふ [同]

セネガルの野菜つくりにはるけくも来し人と見る渴きし大地 [同]

つるべにてくみ上げし水セネガルの乾きし畑の土にしみ入る [同]

三首目の「セネガルの野菜つくりにはるけくも来し人」とは日本からやってきた海外協力隊員のことである。須之部量三首席随員は「実はこの協力隊員が出発する際、東宮御所で殿下との交歓会が催され、そこで殿下は、御自分もぜひ現地に行ってみたいと語られたそうなのです」(「祖國と青年」昭和五十九年六月号)と言つてゐるやうに、両殿下はお約束を守られて、セネガルで野菜作りの指導をする協力隊員を励ましにはるかアフリカの地までお出ましになったのである。

灼熱の地セネガルでは野菜作りは想像を絶する苦労があるに違ひない。殿下は隊員達の苦

勞を偲びつつ「乾きし大地」をご覧になつてゐる。「つるべにてくみ上げし水」は隊員達が灌水用に掘つた井戸である。その水が「渴きし畑の土にしみ入る」。一つ一つの作業は隊員の知恵と汗によつてなされてゐるものである。両殿下は隊員達へご質問になり交歓が生まれる。「渴きし畑の土に」隊員達がかけた「水」が「しみ入る」様をご覧になる。殿下は常々「皇室は国民と苦樂を共にする」と申されるが、国内だけにとどまらず、遙かアフリカの地にて奉仕する青年たちと苦樂を共にされてゐる。「女子隊員などお別れするときに、思わず涙を流して別れを惜しんだのです。現地の人々も見ていてジーンと来ていた」と須之部首席随員が報告してゐる。

乾ききつた大地に生きる隊員達にとつて、両殿下こそが「渴きし大地」にしみ入るうるほひの「水」であらせられるのである。両殿下の旅はつづく。

引続きザイルを訪問して

日本の人の汗してつくりたるマタデイの橋濁流の上に
〔昭和五十九年〕

殿下御自身も灼熱の太陽の下で汗してご覧になつてゐる。「日の本の人」が「汗して」架けてくれたマタデイの橋はザイルと日本をつなぐ友好の懸橋となつてゐることが「濁流の上に」といふご表現から明らかに拝される。

以上見てきた通り、両殿下のご外遊は国家と国家の信をあつくする外交交際であり、総理大臣や外交官では代役がとまるものではないといふことが国民として有難く拝されるのである。

小堀桂一郎東京大学教授（現、明星大学教授・東大名誉教授）は皇室外交を現憲法に鑑みて、次のやうに言つてをられる。

〔現憲法の如き、天皇から祭祀大権を始めとして伝統的に最も重要な固有の権能の数々を奪つておき乍ら、外交面で勝手に大役の御負担を要求するといふのは如何にも畏れ多いことである。〕（『今上天皇論』七一頁、原文は正漢字表記）

戦後日本人は、皇室に外交面で勝手に大役の御負担を要求してきた。その大役をまことに有難いことに見事に果たされ続けてゐるのが我が日本の皇室なのである。このことをさも当然の如く受け取り「畏れ多いこと」であるといふ慎みをいだかぬ日本人ばかりに上も下もなつてゐはしないか。

殿下がマレーシアを訪問されたときに次のやうな話がある。

昭和四十五年（一九七〇年）、マレーシアで人種暴動が始まったとき、ハンフリー米副大統領が訪問したのであるが、治安が悪いといふ理由で、護衛から乗用車まで、全部アメリカから用意して行つたといふ。一方、皇太子殿下は、依然として治安が悪いといふのに、米副大

統領とは違ひ、たった一人しか護衛をつけないで飛行機のタラップを降りられたのださうである。殿下のそのお姿を見たマレーシアの当時のラーマン首相は「殿下はわれわれを信頼されてゐる。国家としての面目を保たせようと配慮されてゐる」といたく感激したと聞く。

本当に畏れ多い外交を殿下はなされてゐるのである。捨身飼虎（我が身を投げ出して飢ゑた虎をなだめる）の行を殿下はなされてゐる。ラーマン首相だけでなく、人種暴動に加はつてゐる人たちも殿下のこのみ姿にふれ、「殿下のご滞在中は一切、民族間の衝突事件は起きなかつた」（「Voice」昭和六十年四月号、長谷川慶太郎、七五頁）と言はれてゐる。

政治家であれ外交官であれ、このやうな外交的成果があれば国民に向ひ、滔々と手柄話として語るはずである。だが殿下は一切手柄を語り給はない。それは殿下が彼らより次元のいや更に高いところに立つて、国家国民のために尽しつづけてをられるからである。

水

外国の旅より帰り日の本の豊けき水の幸を思ひぬ　【昭和六十一年】

まことに畏れ多いことに、外交の大役を果たし給ひて殿下は日本にお帰りになされた。「日の本の豊けき水」を「幸」だと思はれる、その「思ひ」の深さを偲ぶとき、殿下が目に見えぬ神々に感謝の祈りをささげてをられる御姿が見えてくるのである。

五、明治天皇を仰ぎ給ふ両殿下

明治天皇は言ふまでもなく皇太子殿下の曾祖父にあたられ、「目にみえぬ神」となりて明治神宮に鎮座まします。両殿下が鎮座五十年祭にあたって御歌をささげてをられる。先づ皇太子殿下の御歌から拝誦しよう。

明治神宮鎮座五十年祭にあたり

すめろぎの築きたまひしいしずゑに万国博は花開きたり 「昭和四十五年」

「人類の進歩と調和」をスローガンに掲げての日本万国博覧会は、史上最高の七十七カ国の参加を得て盛大に行はれた。私としては単なるお祭り騒ぎに過ぎないと冷やかな目でみてゐた。ところがマスコミを通して伝へられる表面的なニュースから私はその本質をつかみ得てゐなかつたやうである。

さて「花開きたる」「万国博」をご覧になられる殿下の御まなざしは、昭和四十五年の単なる現象——百八十三日間、花開いた根無し草——としては決して見てはをられない。日本の新たな国づくりといふ観点に立つてご覧になつてゐたのである。花を見れば、花を咲かせる地下の根まで目が行き届くといふ御まなざしなのである。

明治天皇の築きたまひし国の「いしずゑ」は昭和四十五年当時、国民の誰の目に見えてゐただらうか。殿下ただお一人が「花開きたる万国博」の地下に深く根を張る明治天皇が築きたまひしその「いしずゑ」を伏し拝み仰いでをられたのである。美智子妃殿下御歌——

明治神宮御鎮座五十年祭に獻詠

ふり仰ぐかの大空のあさみどりかかる心と思し召しけむおほ 「昭和四十五年」

明治天皇の御製「あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな」（明治三十七年）に詠まれてゐる「心」を、美智子妃殿下がわが心とすべくまことに謙虚に求め続けてをられたことがここに慕はしく拝察されるのである。

「かの大空のあさみどり」を念じ大空を幾度「ふり仰ぎ」給うたことであらう。その心の状態をすなほに「かかる心と思し召しけむ」と詠まれた。明治天皇にあたかも純真な子供が喜んで告げるやうに、飾り気なくありのままに詠んでをられる。「ふり仰ぐ」のは大空だけではない。明治天皇を「目にみゆる神」であるやうにふり仰ぎご報告してをられる御歌なのである。

「目にみえぬ神」を内心に統一された唯一の情意としてふり仰ぐとき、神代から現代までが生命躍動して一すぢにつながる。それ即ち「目にみゆる神」を拝し仰ぐことになる。美智

子妃殿下御歌——

新宮殿初の国民参賀に聖上を拝して

幸むねに仰あふぎまつれり大君の新にひたかどの高殿に立たせ給へる 「昭和四十五年」

聖上（昭和天皇）は新宮殿の高殿に立たせ給へる。私たち国民とともに「幸むねに」妃殿下が「大君」を仰ぎましたと詠まれる。勿論、妃殿下御自身も国民に仰がれるところに立ち給うてをられたのであるが、我をお忘れになつて「新高殿に立たせ給へる」大君を臣下の一人として仰いでをられたのである。明治天皇をふり仰がれるのと同じ御姿勢で昭和天皇を「目にみゆる神」と拝し仰ぎ見てをられたのである。

六、神祭り給ふ皇太子殿下

新嘗祭が執り行はれるときの皇室のご様子を園祥子元典侍の文章を引用し、紹介したい。

（十一月二十三日、新嘗祭のお祭の際などには、前日午後から、聖上・皇后・宮様は申し上ぐるに及ばず女官一同末々のものまで齋戒いたします。即ち、二十三日午後四時頃から御内儀すべて私どもも、局つほねぢかひび向火として一切新たな清められた火を用ひ、火鉢などは灰からして新しく清らかなるのを用ひます。

宵暁せうけうの御祭をすませられ、御内儀へ入御になりますのは、大抵夜半の二時過ぎになられ

ます。〔火を清めて神を祭らせ給ふ〕昭和二年)

殿下の「新嘗祭七首」昭和四十五年の連作短歌を拝見すれば、右の伝統は今日も皇室に守り伝へられてゐると拝される(御歌をこれから拝誦するが便宜上、上に番号を付す)。

(1) 松明たいまつの火に照らされてすのこの上歩を進め行く古思いにしへひて

「火を清めて神を祭らせ給ふ」のであるから「松明の火」もただ読みすごしてはいけない。神を祭るに清められたる松明なのである。映し出す世界が「松明の火」で神々しい。おごそかに進む調べから、作者・殿下の「古」への思ひの深さが息づかひとして伝はってくる御歌である。

(2) 新嘗にひなめの祭始まりぬ神嘉殿しんかでんひちりきの音静かに流る

「新嘗の祭始まりぬ」にこもる作者の感慨は深い。大波の押し寄せるやうに感動はうねりて「神嘉殿」を照らしだす。緩やかに雅楽の序を「ひちりき」が奏で始める。「ひちりきの音静かに流る」と詠まれるが私たち国民も静かで厳かなる御祭の庭に呼ばれて、さながらその調べに包まれてゆく感がある。

(3) ひちりきの音と合せて歌ふ声しじまの中に低くたゆたふ

かぐら歌をひちりきの音に合せて歌ひだす。その声は夜の静寂しじまにこだまするのではない。「しじまの中に低くたゆたふ」静寂の中に低い旋律メロディをなしてゆったりとただよふやうに流れる。げに遠き神代より静寂にのって「低くたゆたふ」ゆったりとさざ波が寄せては返すごとく私たちをも、神代へといざなつて下さる御歌なのである。

(4) 歌声の調べ高らかになりゆけり我は見つむる小さきともしび

雅楽の歌声は「序」に始まり調べ高らかに「破」「急」へと進む。殿下は「小さきともしび」をこころを込め見つめられる。

殿下の御歌の中で、他では見られない「我は」と言ふご表現が深い意味を持つ。宮中祭祀を厳修なさらんとする意志的なご表現であり、ただならぬ万世ばんせい一系いつけいの国家意志が「我は見つむる」にはこもつてゐると拝される。

(5) 歌ふ声静まりて聞ゆこの時に告文つげがみ読ますおほどかなる御声みこゑ

七首の連作の中心はここにある。「歌ふ声静まりて聞ゆこの時に」天地の混沌こん沌が「静まり

て」天地の始まる「この時に」会ひたるごとく殿下は、天皇陛下の告文に耳を傾け給ふ。

「おほどかな御声」とはどのやうな声であらうか。辞書には、のびのびとしておほらかな声、とある。しかしこのやうな言葉で言ひ換へてもびつたりあてはまらない。天皇様の「おほどかなる御声」として偲ぶ以外にない。

この御歌を拝誦すると四首目の皇太子殿下であらせられる「我」を始め、すべての民の思ひが「おほどかなる御声」にすひよせられ、ここにとけこみ一つに統べられてゐるのが拝される御歌である。

(6) 拝はいを終へ戻りて侍るしばらくを参列の人の靴音繁し

殿下は「拝を終へ」られたあと、しばらく自座で侍つてをられる。それよりしばらく、拝をする参列の人が多かったのであらう。「靴音繁し」とある。

今は亡き小林秀雄先生も新嘗祭の折に参列の人の一人となられたことがある。昭和四十五年（一九七〇年）の国民文化研究会主催の合宿教室で講義されたが、一学生の「天皇のこと」についての質問に答へられて、新嘗祭の折の御体験を通して、普段は意識してゐない天皇陛下に対する「アンティミイティ（親しみ）」を強く感じたとしみじみお話になった。私たちはそのお話に深い感銘を受けたが、とりわけその時、先生が「臣下の僕らはね」と仰った。

その「臣下の僕ら」といふ言葉が先生の口から自然に洩れたのがとても印象的だったことが忘れられないのである。

「参列の人」たちはもどって行く。臣下として昔の人たちが天皇に懐いてゐた通りのアンテイミイティを天皇陛下に懐いて「靴音繁く」もどって行ったのであらう。皇太子殿下はしばらくの間、その繁き靴音に熟まつと耳をかたむけて、参列の人たち一人一人の上にもみ心を注いでをられるのである。

(7) 夕べの儀ここに終りぬ歌声のかすかに響く戻りゆく道

宵暁の御祭、文字通り「宵」に始まり「暁」を見る時刻に終はるのである。世に戦後は宮中祭祀が軽視されてゐるとよく言はれるが、まったくの誤解であつて、皇室ではかくも御心を込め、御祭みをなされてゐたのである。私たち国民の方がこのことを余りにも知らなさ過ぎるのである。

一首目で「古」を思ひ神代まで戻り給うた。二首目から七首目までの間に、神代に居給ひて、神々とともに現代まで歩いて戻られたと言ふ通時のご経験が「夕べの儀ここに終りぬ」に込められてゐるのである。「歌声のかすかに響く」中、殿下は戻り給ふ。その御姿はこの上なく、尊くおごそかであると拝されるのである。

皇太子殿下が歩まれる「道」は歴代の天皇方が歩いてこられた「道」である。殿下の連作短歌七首を拝誦し、日本人の宗教心の根源たるこの「道」に皇太子殿下を仰ぎ、畏くも心安けく連なり得る。それが日本国民なのである。

皇太子殿下と沖繩

和歌・琉歌に偲ばれる沖繩への思ひ

小柳 陽太郎

(編者注・本稿は
今上天皇ご踐祚前
の昭和62年11月に
謹記)

「坂」のお歌の御唱和

昭和五十年（一九七五年）七月、皇太子・同妃両殿下は国際海洋博覧会の開会式御臨席のため沖繩を御訪問、その翌年、昭和五十一年の新春、皇太子殿下は宮中で行はれた「歌会始」において、「坂」といふ御題で次の歌をおよみになった。

坂

みそとせの歴史流れたり摩文仁の坂平らけき世に思ふ命たふとし
〔昭和五十一年〕

摩文仁ヶ丘は沖繩本島の最南端、その裾を太平洋の荒波が岩を噛んで打ち寄せてゐるところ、いふまでもなく、昭和二十年（一九四五年）六月二十三日未明、牛島軍司令官と長參謀

長が自刃、四月一日米軍上陸以来続けられた、あの悲痛極まりない沖縄の戦が幕を閉じたところである。その摩文仁ヶ丘に歩を運ばれる殿下、あれから三十年の月日が流れた。その月日の重みをかみしめながら、殿下はその坂の途上に立ちつくされたのである。「立ちつくされた」といふのは単なる想像ではない。

「みそとせの歴史流れたり」「摩文仁の坂」「平らけき世に思ふ」「いのちたふとし」——一首の歌が四つにも区切られしかも二句目が八音、三句目が六音、さらに四句目は十音といふ、ただならぬ字あまりになつてゐる。この一首全体に流れる悲痛な調べと、そこにたたへられた緊張感にふれてゐると、殿下がいかにか沈痛なおもひにひたつてをられたか、千々に乱れる御心を一つに統べながらしばし坂のほとりに足をとどめられるお姿を想像しないではられないのである。

殿下にとつて摩文仁ヶ丘の思ひ出は強く、前年、すでに次の三首の歌をよんでをられる。

戦火いくさびに焼き尽くされし摩文仁まぶにが岡みそとせを経て今登り行く [昭和五十年]

戦ひに幾多の命を奪ひたる井戸への道に木々生ひ茂る [同]

戦ひの終りてここに三十年くりかへし思はむこの岡のこと [同]

二首目の「幾多の命を奪ひたる井戸への道」といふのは、烈しい渴きに、何とか一滴の水をと思つて井戸に近づかうとする兵士たち、そこに敵の銃弾が情容赦もなく打ちこまれて、次々に命を奪つたその井戸へ行く道といふ意味であらう。だが今その道には徒らに木々が生ひ茂るばかり、その當時を偲ぶよすがもない、しかし生ひ茂る木々のむかふにひっそりと残る井戸に、殿下の目は吸ひ寄せられ、その胸には戦ひの一コマが鮮やかに蘇るのである。

この皇太子殿下の「坂」のお歌に応へるやうに、美智子妃殿下も、同じ歌会始で次の歌を詠んでをられる。

坂

いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島の坂のほりゆく 〔昭和五十一年〕

「ゆうな」といふのは、奄美大島以南に咲くアオイ科の花、海岸近くに、七、八月のころ黄の色も鮮やかに咲く花のことであるが、この熱帯性の色濃い花がゆれてゐる島のほとりの坂道、妃殿下はまぶしい南の太陽のもとその坂道をのほりながら、あの戦ひにうけた深い心の痛みにたへながら、しかも人間としてのあたたかな優しい心づかひを忘れることなく、あの日から今日までの長い月日を生きつづけてきた沖繩の人々のけなげな姿に心を馳せてをられるのである。

殿下は摩文仁ヶ丘に立って、あの激戦のさまを直接にお偲びになり、妃殿下はゆうな咲く坂のほとりに、沖繩の人々の悲しみに御心を寄せられる。「坂」といふ御題に寄せられた両殿下の、沖繩を主題にした御唱和が私には限りなく尊く思はれてならない。

昭和五十年、両殿下御訪沖に際しては周知の通り、「ひめゆりの塔」御参拝の折、御二人の足もとから僅か二メートルのところ、に火炎ビンが投げられるといふ痛恨極りない不祥事が発生した。その折の両殿下の毅然たる御態度は、当時新聞を読んだ私たちの胸をはげしく打ってやまなかつたが、いま改めてこれらのお歌を拝誦しながら当時の状況を思へば、両殿下がいかに「捨身」のおもひで沖繩の地を踏んでをられたかが偲ばれてならないのである。

皇太子殿下の「琉歌」六首

戦ひの終りてここに三十年くりかへし思はむこの岡のこと
〔昭和五十年〕

といふのは摩文仁ヶ丘における皇太子殿下の御感慨であつたが、いふまでもなく「この岡」即ち摩文仁ヶ丘といふのは「沖繩」の象徴であつて、そのお言葉通り、殿下の沖繩をくりかへし思はれるお心の深さは想像を越えるものがある。

私ができることを殊に強く印象づけられたのは、昨年（昭和六十一年）の十二月二十三日、

皇太子殿下御誕生の日を記念して出版された、『殿下と妃殿下の御共著になる歌集』『ともしび』の中に、皇太子殿下のおよみになった六首の琉歌を拝見した時であった。殿下にかかる琉歌の御作があることは既に別の機会に存じてはゐたが、改めて六首の御歌を読ませていただいた時の感銘は忘れがたい。

琉歌とは琉球に遠い昔から伝へられた、八、八、八、六音を基調とした歌謡であるが、沖繩の言葉を自在に駆使した不思議な調べは私たちが万葉集の、特にその東歌に接する時に感じるのと同じく、民衆の息吹きが直接に伝はって、一読忘れがたい印象を残すのである。ただ八、八、八、六の調べが私たちに馴染みが薄いのと、とりわけ難解な沖繩の言葉を用ひなければならぬといふ約束があるため、その創作は殆んど沖繩の人々に限られ、これまで本土の人の手になる作品はあまり見られなかつたやうである。

ところが驚くべきことに殿下はその難解な琉歌を六首もおよみになってをり、その創作の年代は、歌集『ともしび』によれば、昭和五十年より五十一年にかけてといふ。まさしく、沖繩御訪問の記念としての創作であり、それは単に興の趣くままにといふのでなく、沖繩の人々の心の奥に迫らないではをられない、殿下の御悲願のうつきき結晶であると思はれてならない（以下六首の琉歌のあとに付した口語訳と文法的な解釈は沖繩の首里に住む久米秀俊氏〔沖繩開発庁勤務〕が現地の方々の御指導によって作製したもの、改めて紙上を借りて謝意を表したい）。

魂魄之塔

(1) 花ハナよユウおウしシやキげユゆン 人フ知トらクぬシ魂ラ 戦タなマいシらイぬク世サよネ肝ラにヌ願ユてニ

(花を捧げます、人知れぬ御霊に。戦ひのない世を心から願って)

魂魄之塔は昭和二十一年（一九四六年）二月、当時の真志和村々長の金城和信氏が、摩文仁周辺に散乱してゐた遺骨を蒐集して建てられた沖繩県初の慰霊塔であり、「人知らぬ魂」といふのはその間の事情を偲んでよまれたものであらう。

「おしやげゆん」は「差しあげる」といふ意味の動詞終止形、「ないらぬ」は「無い」、「肝チム」といふ言葉にこもる情感は沖繩ならではのものではあらう。

なほ殿下は「魂魄之塔」と題して、

人知れず散りにし人の魂たまの前花を捧げつ願ひをこめて

といふ和歌もよんでをられる。以てこの塔に寄せられる御心の深さが偲ばれるのである。

摩文仁

(2) ふフさサかケいユゆるル木キ草クめサぐるミ戦グ跡ルくりイク返サしア返トしウ思カひイかキけてテ

(おひ茂つてゐる木草の間を巡ったことよ、戦ひの跡にくりかへし思ひを馳せながら)

「ふさかいゆる」は「さかえる、おひ茂る」といふことか。その中にはあの井戸へゆく道に生ひ茂つてゐた木々の姿も当然ふくまれてゐるにちがひない。

次は二首の連作である。

沖繩愛楽園 二首

(3) だんじよかれよしの歌声の響 見送る笑顔目にど残る

(航海の無事を祈る “だんじよかれよし” の歌声を響かせながら私を見送ってくれる人達の笑顔が目に焼きついて離れないことよ)

(4) だんじよかれよしの歌や湧上がたんゆうな咲きゆる島肝に残て

(“だんじよかれよし” の歌が湧き上るやうにあたりにこだまし、折からゆうなの花が美しく咲いてゐる島の情景が心に残ってならないことよ)

殿下が名護市にある、国立ハンセン病療養所「愛楽園」を御訪問になったのは、「ひめゆ

りの塔」の事件のあつた翌日、七月十八日であつた。伝へられるところでは、殿下はひとりひとり患者の手をとり体にお触れになつての御慰問であり、地元の人々やお供した周囲の人々まで揺さぶられるやうな感動をおぼえたといふ。

「だんじよかれよしの歌」とは遠い昔から沖繩の人々によつて歌ひつがれた航海の安全を祈る歌であつた。「目にど」の「ど」は「ぞ」に同じ、二首目の「湧上がたん」は動詞「湧上る」の語幹に完了の助動詞「た」の連体形「たん」が接続したもので、「湧き上つてゐる」の意。ハンセン病の患者の人達が歌ふ「だんじよかれよし」の歌、その歌声のこだまする中を限りなくおもひを残して去つてゆかれる殿下、天皇御訪沖反對などを叫ぶ人々の目には到底見ることの出来ない、真実のふれあふ美しい世界がここにある。あらゆる騒がしい議論をこえて沖繩の未来を拓く第一歩は確実にここに踏み出されたのである。なほこの二首は美智子妃殿下の御作曲により、「歌声の響」といふ歌になつて今もうたひつがれてゐるといふ。

伊江島

- (5) 広がゆる 畑立ちゆる 城山肝のしのばらぬ戦世の事

（二面に広がつてゐる畑や、その中に屹立する伊江島の丘、今は平穏な情景であるが、ここで行はれた凄絶な戦闘を偲べば、心ははりさけんばかりである）

皇太子殿下は海洋博の開会式におでましになった翌昭和五十一年の一月、同博覧会の閉会式のため再び沖繩を御訪問、その折この伊江島に赴かれたのである。伊江島は沖繩本島の北西方に浮ぶ周囲約二十キロの島、その中央には標高一七二メートルの城山グスイクヤマが聳えてゐる。昭和二十年四月十六日、米軍は三十六隻の軍艦による集中砲撃のあと上陸を開始、二十一日に至る六日間の戦闘は数多い沖繩の戦闘の中でも特に凄絶を極めた。

「広がゆる」「立ちゆる」の「ゆる」は前出の「ふさかいゆる」「咲きゆる」と同じく沖繩独得の動詞の連体形、「広がつてゐる」「立つてゐる」といふ意、「しのばらぬ」は我慢する意味の動詞「しのぶ」に可能と打消を示す助動詞「ら」と「ぬ」が接続したものの「耐へ忍ぶことが出来ない」といふ意味である。まさしく「心ははりさけんばかりである」といふ意味にならうか。

国土防衛の第一線に戦った人々、その人々の尊い犠牲の上に、今日の平和がある。祖国の栄光を念じ、祖国の無窮を信じて戦ひ傷つき、命捧げた人々、その人々のおもひに報いることあまりに少い現代ではないか。この戦跡に立って島民玉砕のさまを偲ばれた殿下のおもひはこの「肝のしのばらぬ」の一句に見事に表現されてゐると言つていい。なほこの歌は現在、歌碑に刻まれて伊江島に建てられてゐる由である。

今帰仁城跡

(8) 今帰仁の城 門の内入れば咲きやる桜花紅に染めて

(今帰仁の城門の中に入ってみると、咲いてゐる桜が紅に染つてゐて実に美しい)

今帰仁は沖縄本島の北西に突き出る本部半島の北方にあり、その城跡は十四〜十六世紀の遺構と推定されてゐる沖縄の代表的城跡である。

皇太子殿下は先の伊江島と同じく、昭和五十一年一月、この城跡を訪ねられたのである。この今帰仁の桜は緋寒桜と言ひ、一般の桜より早く、すでに一月には花開くが、その花卉は赤く、城門に入られた殿下の目に強烈な印象を与へたのであらう(「咲きやる」の「やる」は継続を示す語)。しかもこの時、殿下を歓迎する十万人を越える人々の熱気はすさまじく、殿下にとって今帰仁は一入忘れがたい思ひ出の地となつたやうである。

その後、昭和五十一年の「歌会始」において、「桜」といふ御題が出された時およみになつた殿下のお歌は次の一首であつた。

四年にもはや近づきぬ今帰仁のあかき桜の花を見しより [昭和五十一年]

桜といへば、殿下にも本土各地での思ひ出があたりであらうに、また桜といへば本土の桜

をよむのが普通であらうに、そのすべてをおいて、今帰仁の緋寒桜といふ特殊な桜を題材にお選びになったことの意味は大きい。この時殿下の御心に映じたものは、あの緋寒桜の花、その花の美しさもさることながら、その桜のもとで自分を迎へてくれた幾万の人の波であったに違ひない。そのなつかしい思ひ出の時からすでに四年の月日が流れた。

この一首に浮かぶ情感はまさに郷愁と言つてもいい。殿下にとつて沖縄の地はまさしく「ふるさと」であつた。だからこそあの難解な言葉を自家葉籠中のものとして、琉歌六首の中に敢へて切々たる情を表現されたのであらう。

「沖縄の人もまじりて」

昭和二十八年（一九五三年）、平和条約が調印された翌年、四国松山で行はれた国民体育大会には、当時まだ米軍の占領下にあつた沖縄県の代表が初めて参加した。その時、天皇陛下は、

沖縄の人もまじりていさましく広場をすすむすがたうれしき
〔昭和二十八年〕

とお詠みになつてゐる。「沖縄の人もまじりて」といふお言葉にこもるおもひ、そこには久しく離れてゐた我が子をしっかりと胸に抱きしめるやうな心の昂りがある。あの苦しい、

あの辛い戦ひを戦ひぬいてくれた沖繩、戦争の犠牲を一手にひきうけて戦ってくれた沖繩、しかも未だに米軍の統治下にある沖繩。しかしその苦しみにもめげず、沖繩の若者たちは本土の青年に交つて、勇ましく広場を進んでゆくではないか――

このお歌にこめられたおもひ、それはこれまで拝誦してきた皇太子殿下の数々のお歌にも継承された、御皇室に一貫した沖繩に対する烈しい祈りであった。

それを思ふ時、例へば「戦争責任をあいまいにしたままの天皇の来沖には反対せざるを得ない」(社会党沖繩県本部) などといふ言葉が一体どこから生まれてくるのか、理解に苦しむのは私だけではあるまい。「責任は私にある」などといふ一片の言葉では言ひつくされぬ無量のおもひあればこそその「沖繩の人もまじりて」ではなかったか。その言葉にたたへられた深い悲しみを感じることが出来ないのは、所詮は徒らな主義主張が、このやうな人間の真実を見る目を失はしめるからに外なるまい。

かかる反対運動が一刻も早く払拭され、明るい秋の日ざしのもと戦後初めての陛下の御訪沖が凡ての県民の奉迎の中に実現出来る日を心から願ってやまない。

追記

この稿を終へたあと、摩文仁でおよみになったお歌の中の井戸について、前掲の久米秀俊

氏の現地からの報告がもたらされたので附記しておきたい。

摩文仁ヶ丘の沖繩平和祈念堂から約五〇〇メートルのところ、牛島、長岡將軍を祀る「黎明の塔」が建つてゐるが、それよりさらに殆ど垂直にくだる急坂を降りること約二〇〇メートル、そこには沖繩師範学校の戦歿した職員生徒を祀る「健児の塔」がある。ここは沖繩師範の生徒がたてこもつてゐた壕のあとであるが、それより一〇〇メートルほどのところ、摩文仁ヶ丘の中腹に岩にかこまれその井戸が残つてゐる。

この井戸は現在は使はれてゐないが、戦後しばらくは使用に耐へたらしく、特に戦時中はあたりに求める水は絶無、ただこの井戸だけが頼りであつたといふ。しかも当時、附近には殆ど木も茂つてゐなかつたらしく、そこに到達するのは困難をきはめ、降りそそぐ砲弾の中、水くみのための決死隊が編成されて壕から出てゆくのだが、十中七、八人は帰らぬ人となり、辛うじて水をもたらしした者も深い手傷を負つてゐたといふ。

その悲劇の舞台が、皇太子殿下のおよみになつた「幾多の命を奪ひたる井戸への道」であつた。

*

なほこの「健児の塔」の納骨堂の板には、学徒隊に加はつて戦死したわが子をいたむ母の歌—琉歌—三首が刻まれてゐるといふ。(内二首)

国のためと思て咲ちゆる花散らち跡目失なたる親ぬ苦りさ

(国のためと思つて咲いた花は散つた)

子供を失つた親の苦しさをよ

思みば哀しさを十年ぬ昔学び子ぬ姿忘り苦しや

(思へばかなしいかな十年の昔)

学生だった我が子の姿が忘れられない)

皇室の風儀

浩宮さま成人式の御歌を中心に

小柳 陽太郎

昭和五十六年（一九八一年）、浩宮さまは新春の歌会始に「音」といふ御題のもと、初めて一首の御歌をお詠みになった。

音

懸緒断つ音高らかに響きたり二十歳はたちの門出我が前にあり
〔昭和五十六年〕

浩宮さまはその前年、昭和五十五年の二月二十三日、満二十歳の御誕生日を迎えられたが、その折に行はれた加冠の儀式、いはゆる元服の儀式の御体験をおよみになった一首であった。

この加冠の儀については、すでにくりかへしテレビで放映されたところ。私も拝見する機会をもったが、天皇さまをはじめ皇室の方々がお見守りになる中、新しくおかぶりになった

冠の紐が結ばれ、その余りの紐が鉄で断ち切られる。はりつめたやうな空気を破ってピシッといふ鋭い鉄の音が耳朶をうつ、新たな時の流れがここにはじまる。まことに厳肅な一瞬であった。その緊張の中に立ってをられる若々しい浩宮さまのお気持ちの高まりが、この一首に見事に表現されてゐる。

「懸緒断つ音高らかに響きたり」「二十歳の門出我が前にあり」、一首ははつきりと二文に分れてゐるが、それぞれにこめられたおもひの深さと緊張が、何の抵抗もなく一首全体を統一し、むしろ一首二文の構成が、作者の心の瑞々しさをさへ表現してゐるやうな趣きがある。とりわけ前半の、その焦点をなす「断つ」の一語のもつ力はテレビで拝見したあの一瞬と重なつて、読む者の心をはなさない強さをもつてゐる。

だがそれにしても「音」といふ御題に、懸緒の截られるあの音をおよみになるとは何とすばらしいことか。その音は幼き日と訣別し、未来への一步をふみ出す、人生における最も劇的な瞬間に高なる「音」であつた。

このすばらしい一首のお歌、それは歴代の天皇方が、そのみ心を「しきしまの道」に注がれてきた遠い遙かな伝統が、いま浩宮さまのみ心に見事にうけつがれてゐる、その尊いお姿を示してあまりある有難い御歌であつた。

しかもそれから五年、昭和六十一年、皇太子同妃兩殿下の御歌集『ともしび』が発刊されたが、その中にまさしくこの折の感動をおよみになった妃殿下の御歌が収められてゐたのである。しかもこの御歌は五七調四十五句から成る長歌に一首の反歌が添へられるといふ、堂々たる構成をもつた蒼古の歌風であつた。

それは近來の皇室の方々の御歌にはたえて見られないところであつて、敢へてこのやうな形で御表現になつた妃殿下のおもひの深さに、文字通り息を呑むやうなおどろきと感動をもつて拝誦したのである。

二月二十三日浩宮の加冠の儀とどこほりなく終りて

いのち得てかの如月のきさらぎ 夕しもこの世に生れしあ みどりこの二十年を経て 今ここに
 初に冠るかぶる 浅黄なる童の服に 童かむる空頂黒幘くうちやうこくやく そのかざし解き放たれて 新た
 なる黒き冠かがぶり 頂いたたま にしかとし置かれ 白き懸緒かけを かむりを降り 若き頬伝ひつたひて
 顎あご の下堅く結ばれ その白き懸緒かけを の余あまり 音さやにさやに絶たれぬ
 はたとせを過ぎし日となし 幼日せさなび を過去とは為して 心ただに清らに明あ かく この日よ
 りたり歩まむ 御祖みおや みな歩み給ひし 真直ますく なる大きな道 成年の皇子みこ とし生くる
 この道に今し立たす吾子わこ はや

反歌

音さやに懸緒かけを截きられし子の立てばはろけく遠きしかの如月きさらぎ
〔昭和五十五年〕

長歌は前後二段の構成となつてをり、前段は、かの如月、昭和三十五年二月の二十三日の夕方御生誕あそばされた宮さま。あの幼なかつた宮さまもすでに二十年を経て加冠の儀式をお迎へになることになつた。その儀式の様子がこまやかに述べられていく。浅黄色の童服をお召しになつた宮さまは、童のかぶる空頂黒幘といふ冠を解き放つて新しい黒い冠をおかぶりになる。その冠を結ぶ白い緒、それがいま頬を伝ひ、顎の下で堅く結ばれ、その緒の余りが、鋭い鉄の音とともに絶たれる——「音さやにさやに絶たれぬ」——それはまさしく浩宮さまの「懸緒断つ音高らかに響きたり」、その一瞬の母妃殿下による御表現であつた。

後段は、過ぎ去つた二十年の歲月とははつきり別れを告げ、宮さまはいよいよ新たなる歩みをはじめられる。それは「御祖みな歩み給ひし 真直なる大きな道」でなければならぬ。遠い皇室の御祖先以来、歴代の天皇が歩まれた「真直にして大いなる道」でなければならぬ。いつか帝位をお踐みになる浩宮殿下の歩み給ふ道はそれ以外にはない。

その道の門出に、いまわがみ子浩宮さまは立つてをられるではないか——。「この道に今し立たす吾子 はや」といふ痛切なお言葉で長歌は終るのだが、そこにあふれる万感のおも

ひ、そこには皇太子殿下との御成婚以来二十年、この日までつみ重ねられた妃殿下のさまざ
まなおもひが一点に凝縮されてゐるやうである。

かくて長歌は終り、反歌では懸緒の截られる音を契機に、思ひ出は御誕生のかの日に遡
り、長歌もふくめた全体は、一つのサイクルを描いて歌は閉ぢられるのである。

*

さらに浩宮さまの成人式については、御祖父君天皇陛下、御父君皇太子殿下に次のお歌が
ある。

天皇御製

成人式

初春におとなとなれる浩宮のたちまさりゆくおひたちいのる
〔昭和五十五年〕

皇太子殿下御歌

新年を迎へて

成年に成りたる吾子と共に向かふ宮居の初空晴れ渡りたり
〔昭和五十六年〕

次の皇太子にお立ちになる浩宮さまにとって、成人の式をお迎へになることの意味がいかに重大であるか、そしてそれを陛下も皇太子殿下もいかにおよろこびになつてゐるか、この二首の御歌にはその間の消息があますなく表現されてゐると思はれる。天皇陛下の御歌には「たちまさりゆくおひたちのる」と今後の宮さまの御成長を切々と念じたまふ御心が痛いほどまでに偲ばれるのである。

日本の将来のすべては皇太子殿下、そして浩宮さまの御双肩にかかつてゐる。最後の「いのる」の一語にかけられた御心の重さは私たちの想像を絶するものがあるにちがひない。

皇太子殿下の御歌では、殿下が浩宮さまと御一緒に、遠くみ空をふり仰いでをられるお姿を偲べば、御二方の前途を祝福するやうな新春の空の青さが身にしみるのである。

空の青さといへば妃殿下が昭和四十五年（一九七〇年）、この時より十年遡るが、「明治神宮御鎮座五十年祭」の折におよみになつた献詠

ふり仰ぐかの大空のあさみどりかかる心と思し召しけむおほ 「昭和四十五年」

も深く心に残る御歌であつた。この御歌はいふまでもなく明治天皇の

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな 「明治三十七年」

の一首を偲んでおよみになった御歌、成年の式を終へられた浩宮さまと父君皇太子の目に映った初春の空もまた、あさみどりに澄みわたつてゐたのではあるまいか。

ともあれこれら浩宮さまを中心におよみになった御歌、御祖父君天皇陛下、御父君皇太子殿下、そして御母君皇太子妃殿下、それら御三方の御歌の唱和をしみじみと味はつてゐると、日本における皇室のあるべきお姿は、すべてその中にこめられてゐると思はれてならないのである。天皇陛下の深い御祈念と、皇太子殿下の晴朗と、皇太子妃殿下の愛情と、そして浩宮さまの決断と。勿論それは単に御一方かたのものではない。天皇さまはじめ皇室の皆さまに共通する祈念と、晴朗と愛情と、決断と、それらが一つになつて、美しい世界を形造つてをられるといふべきだらう。

いま先帝崩御といふ悲しい日を迎へたけれども、先帝神去りまししあとも、その大いなる民心に守られて、この世界は「つが櫻の木 いやつぎつぎに」とこしへに伝へられてゆくであらう。私たちはそこに万世一系厳としてゆるがぬ「皇室の風儀」を仰ぐのである。

*

先帝崩御のあと、巷には天皇についての論議が堰を切つたやうに溢れてゐる。その中には皇室のあり方について言及されたものも多く、「開かれた皇室」論や、それに対するきびしい批判が連日、新聞雑誌に掲載されてゐる。その一つ一つについては傾聴すべきことも多い

が、いまこの重大な時期において我々がなすべきこと、それは一人一人が描く皇室の理想像をあれこれと論じあふことではなく、その前にこれらのみ歌に見られる皇室のありのままのお姿を、心をこめてお偲びすることではあるまいか。

とりとめのない論議を遥かに越えたところで、神のみ代より一貫してうけつがれてきた「御祖みな歩み給ひし 真直なる大きな道」を日々歩みたまふ天皇、皇后両陛下、そして皇太子さま、そのみ姿を不断にお偲びすることをおいて、今の世に処すべき道はないと思はれる。

(平成元年四月謹記)

「大孝」の大御心

廣瀬 誠

あらしきの宮の御製

父君をあらしきの宮に思ひつつ日はたちゆきて梅は咲き満つ

〔平成元年〕

御父君昭和天皇の御遺体をお守りなされ、心慎しみて過ごしたまふ日々の移ろひは、おごそかに、緩やかに、しかしながら不思議な早さで過ぎてゆく。崩御されたのは真冬であったが、いつのまにか梅の花も咲き満ちた。深い悲しみの御心にはのほのと梅花の清香がたちこめてくる。

恐れながら殯宮ひんきやう諒闇の思ひをしみじみと歌はれた、たぐひ稀な大御歌と、忝なく拝誦するのである。

昭和天皇は、昭和二十年の歌会始において「社頭寒梅」の御題下、

風さむきしもよの月に世を祈るひろまへ清くうめかをるなり 「昭和二十年」

と歌はれ、敗戦必至の厳しい時局下、ひたすら神前（おそらく賢所の大前であらう）に世を祈りたまひ、馥郁ふいくと漂ってくる梅の清香に御心を澄まされた。今上陛下も、あるいは御父君のこの霜夜の梅香の御製を思ひ出され、無量の感慨をこめて、咲き満ちてゆく梅に対されたのでなからうかと拝察するのである。

陛下は、即位後朝見の儀のお言葉において、冒頭「大行天皇の崩御は、誠に哀痛の極みであります」と述べられ、「深い悲しみのうちにあつて、身に負った大任を思い、心自ら肅然たるを覚えます」「ここに、皇位を継承するに当たり、大行天皇の御遺徳に深く思いをいたし、いかなるときも国民とともにあることを念願とされた御心を心としつつ」とお述べになった。即位礼正殿の儀のお言葉にも「改めて、御父昭和天皇の六十余年にわたる御在位の間、いかなるときも、国民と苦楽を共にされた御心を心とし」と高御座たかみくらの上で述べられ、くりかへし御父君の御心を継承する固い決意を披瀝された。

大嘗祭についても「父君のにひなめまつりしのびつつ我がおほにへのまつり行なふ」（平成二年）と御父君を偲ばれ、万事、御父君に見習はれた。長崎県における全国植樹祭の折に

も「父君の即位記念の林より育ちし苗を我ら植ゑけり」（平成二年）と、御父君の即位記念の林からの苗であることを、特に取り立てて強調され、深い意味をこめて歌はれた。念々、御父君を偲びたまふ御孝心に感動するのである。

それは、単なる個人道徳としての「孝」、儒教的徳目としての「孝」を越え、御歴代、御親より御子へ、御子より御孫へと相承け、相伝へて来られた、天つ日嗣の尊き伝統、日の本の悠久のいのちに対する、敬慕畏順の御心情、「大孝」（日本書紀の語）の大御心であらう。

皇后陛下もまた「昭和天皇崩御」と題されて、

セキレイの冬のみ園に遊ぶさま告げたとしと思ひ覚めてさみしむ
〔平成元年〕

と、昭和天皇追慕の御心情を、御女性らしく、こまやかに、しみじみと歌はれた。平成三年歌会始の勅題「森」のお歌でも、昭和天皇に対する御思ひをこめて「いつの日か森とはなりて陵を守らむ木木かこの武蔵野に」と、武蔵野陵周辺に植栽された木々を歌はれた。

昭和天皇は、まことに申し上げやうもなく偉大であられた。今上陛下が皇后陛下ともども一途に先帝昭和天皇を敬慕され、その御心を御心とせんと固く決意されておいでになることを、本当に尊く、うれしく、ありがたく思ふのである。

森の御製

歌会始の「森」について天皇陛下は

いにしへの人も守り来し日本の本の森の栄えを共に願はむ
〔平成三年〕

と歌はれた。「いにしへの人も守り来し森」「日本の本の森」と表現され、その「森の栄えを共に願はむ」と切に念願された。

思へば、昭和天皇は事あるごとに自然を大切にすることを歌はれ、徹底して自然保護を念頭された。年々の植樹祭には必ず御製を寄せられ、「森をそだつるそのいたつきを」（昭和三十二年）、「美しく森を守らばこの国のまがもさけえむ」（同三十三年）、「緑の森になれといのりつ」（同三十六年）、「森の広場になれかし」（同五十年）、「自然観察の森とはやなれ」（同五十一年）、「^{あがた}県の森を人びとのいこひになれと」（同五十八年）と森の造成・森の愛護をくりかへし歌はれた。

また、木を植えることについて「みちのくの国の守りになれよとぞ」（同三十八年）、「国の守りになれといのりぬ」（同四十三年）、「わぎはひをふせぐ守りになれよとぞ思ふ」（同五十三年）と、森によって国土を守ることを切に祈念された。

その昭和天皇の御心を御心として、国土の荒廢・自然環境の悪化を深憂されつつ、この「森」といふ勅題も選ばれたのであらう。「森の栄え」を「共に願はむ」と歌はれた、その「共に」とは、即位後朝見の儀のお言葉にあるやうに「国民とともに」である。何事についても「国民と共に」と常々思しめされてゐる御心を、「共に願はむ」と意思的に強く打ち出されたのであらう。

その森を特に「日の本の森」と日本国天皇としてのお立場で歌はれた意義は大きい。その「森」が「いにしへの人も守り来し」森である。古代以来、営々と日本の森を守り、森を育てて来た人びとの労苦を噛みしめ、その先人の労苦を全国民とともに受け継ぐことを決意され、切念されて居るのである。

今回の歌会始の召人・選者の歌、入選歌を見わたしても、「日の本の森の栄えを共に願はむ」といふ如き、総合的な念願祈念の歌は御製ただ一首である。まことに日本国統合の象徴たる天皇なればこそと深い感慨をおぼえるのである。

(平成三年二月謹記)

皇后陛下御歌集『瀬音』を読む

山田 輝彦

皇后様には、既に妃殿下の時代に、皇太子殿下と御共著の『ともしび』といふ歌集を出してをられる。御成婚二十五周年を記念して、昭和六十一年（一九八六年）に出版されたものであるが、昭和三十五年から六十一年に至る百四十首余りの御歌みうたが収録され、端正典雅な御歌風の一端に触れることができるのである。この度の御歌集『瀬音』は未公開百九十一首をふくむ三百六十七首の御歌が収録され、昭和三十四年から平成八年に至る皇后様のお心のおとを辿ることができるのは何よりの喜びである。

御歌集の名「瀬音」は、昭和五十六年歌会始御題「音」を詠まれた左の御歌に由る。

わが君のみ車にそふ秋川の瀬音せおとを清きよみともなはれゆく
〔昭和五十六年〕

秩父多摩国立公園にお出ましの折の御印象を詠まれたものと聞くが、み車の進む川沿ひの

せせらぎの清らかなひびきを聞きながら、皇太子殿下（今上天皇）のお側につつましく侍してをられるよろこびが伝はつて来るやうである。

皇后様の御仕事は、公的行事や外国訪問など、われわれの想像を絶するご緊張の連続であらうが、天皇の最も近くにをられて、宮中祭祀を厳修される天皇を詠まれた数首には肅然として衿を正さしむるものがある。

旬 祭

神まつる昔の手ぶり守らむと旬祭に発たす君をかしこむ
〔平成二年〕

旬祭しゅんさいとは、毎月一日、十一日、二十一日に斎行される御祭祀で、天皇は通常各月一日の祭祀にお出ましになり、国家、国民の無事を祈念されるのである。このやうな祭祀が行はれてゐることが、国民のどれだけの人に知らされてゐるのだらうか。

去年今年

去年こぞの星宿やどせる空に年明けて歳旦祭さいたんさいに君いでたまふ
〔昭和五十四年〕

厳冬の払暁に身を淨めて祭りに臨まれる皇太子殿下（今上陛下）、見送られる妃殿下、去年の星空は静かに今年の空に移る。身のひきしまるやうな一首である。

夜 寒

新嘗しんじやうのみ祭果かへてて還ります君のみ衣ころも夜や気き冷ひえびえし 「昭和五十四年」

一年の祭祀の中の最も重要なものの一つ、昭和天皇ご親祭の新嘗祭。十一月下旬といへば夜気が身に沁みる候である。祭りを終へて帰つて来られる皇太子殿下（今上陛下）のみ衣のつめたさに、寒さに耐へられた殿下への限りない御情愛の深さが感じられる一首である。

*

皇后様のお仕事の一つが、お子様方の御養育にあるのは当然である。こゝでは、お子様方を歌はれた数首を挙げてみたい。

浩宮誕生

含む乳ちの真白ましろきにこり溢あふれいづ子の紅くれなゐの唇くちびる生なきて 「昭和三十五年」

あづかれる宝にも似てあるときは吾子わこながらかひな畏おそれつつ抱いだく 「同」

第一首は豊饒な母子像を見る思ひがする。かういふ母と子の原初の姿を詠まれた皇后様のお歌はこれが初めてではなからうか。母となった者が誰でも抱く、普遍的な母性の感動、生命誕生の喜びが伝はつて来る。二首目は、わが腕かかに抱かかく吾子わこ（浩宮徳仁親王殿下）は、吾子な

がら将来の日嗣の皇子であるといふ、皇后様ならではの畏れ、つつしみの御表現であらう。

礼宮誕生

生れしより三日を過ぐししみどり児に瑞みづとして添ひきたるもの
〔昭和四十年〕

嬰兒の変化は驚くほど早い。誕生三日目、みどり児には瑞みづしいものが添って来た。その表情にも、しぐさにも、瑞みづとしたとしか言ひやうのない、いのちそのものの輝きが見えて来た、かういふお気持ちなのだらう。

昭和四十一年の歌会始御題「声」には次のやうなお歌がある。浩宮様のことであらう。

少年の声にもいふ子となりてほのかに土の香も持ちかへる
〔昭和四十一年〕

花吹雪〔天皇陛下御誕辰御兼題〕

双の手を空に開きて花吹雪とらへむとする子も春に舞ふ
〔昭和四十三年〕

歌会始御題 桜

風ふけば幼き吾子を玉ゆらに明るくへだつ桜ふぶきは
〔昭和五十五年〕

時期を異にしてお作りになった、花吹雪のお歌である。前者は恐らく浩宮様であらう。躍動する少年の姿が、母君の心に浮き立つやうにお喜びを与へたことが表現によく出てゐる。後者は紀宮様を詠まれたものと推定されるが、その素材、用語、声調等にわたって、専門歌人が感嘆した作品である。民族の持つ季節の美が見事に活かされてゐる。

順序が少し逆になったが、「紀宮誕生」のお歌を引く。

紀宮誕生

そのあした白樺の若芽黄緑の透^すくがに思ひ見つめてありき
〔昭和四十四年〕

部屋ぬちに夕べの光および来ぬ花びらのごと吾^{わが}子は眠^こりて
〔同〕

初めての内親王殿下誕生である。浩宮殿下の時とは違った感慨がおありになったのであらう。それにしても二首目の「花びらのごと吾子は眠りて」といふ下の句のお言葉の何といふたをやかさ。かうしてそれぞれのお子様方はすこやかに成長してゆかれる。

萩

遊びつかれ帰り来^こし子のうなみ髪^{がみ}萩の小花のそこここに散る
〔昭和四十五年〕

夢

劍けんによる少年の夢すこやかに子は駆はせゆきぬ寒稽古の朝あさを

〔昭和四十六年〕

そして紀宮様も外国旅行にお出かけになるまでに成長された。

歌会始御題 旅

幼をさながみ髪かみなでやりし日も遠くしてをとめさびつつ子は旅立ちぬ

〔昭和六十年〕

皇后様として、どの御経験もかけがのないものであられたらうが、中でも昭和五十五年二月二十三日の浩宮殿下の加冠の儀（民間の成人式）の御印象はことさらのものであったらしい。御歌集中、唯一の長歌が、しかも記紀万葉の伝統につながるむしろ男性的ともいふべき長歌が収録されてゐて、一読深い感動を誘ふ。枚数の都合で長歌は省略せざるを得ないが、「御み祖おやみな歩み給ひし真直ましくなる大きな道」を成年の皇子みことして立派に生きよといふ御諭しの御歌である（二〇七頁参照）。その反歌。

音さやに懸緒かけをき截きられし子の立てばはろけく遠しかの如月きさらぎは
〔昭和五十五年〕

成年のしるしとして黒い冠の懸緒（紐）を頸の下に固く結び、余った白い懸緒を、袂の音

もさやかに切る、その静寂の中のその音のさやけさ。今こそ二十年前の如月の御誕生の日を思ひ感無量といふお氣持であらう。やがて立太子礼（平成三年二月二十三日）、御成婚（平成五年六月九日）と皇統の無窮は保証されるのである。

*

以上、主として母性としての皇后様の御歌を中心に述べて来たが、皇后様がお母様を偲ばれたお歌を二三挙げて置かう。民間から皇室へ娘を妃として送られたお母様のお立場は、さぞ苦しいものであつたらう。

歌会始御題 母

子に告げぬ哀しみもあらむを柞葉ははそはの母清すがやかに老い給ひけり
〔昭和五十三年〕

四照花

四照花やまぼうしの一木覆ひたさおほひて白き花咲き満ちしとき母逝やまぼうしき給ふ
〔昭和六十三年〕

母

この年も母逝やまぼうしきし月めぐり来て四照花やまぼうし咲く母まさぬ世に
〔平成三年〕

彼岸花

彼岸花あはひ咲ける間の道をゆく行き極きはまれば母に会ふらし
〔平成八年〕

子に告げ得ぬ母の哀しみがあつたやうに、母に告げ得ぬ子の哀しみもおありになつたであらう。特に皇后といふ公的地位は、私情をゆるさぬきびしいものであるに違ひない。お母様への抑制されたお思ひの陰に、どんな大きな犠牲がはらはれてゐたか、お歌のしらべからお偲びしたいものである。四首目のお歌などは抑制のきいた御表現から、ふと垣間見ることのできる皇后様の母恋ひの歌ではなからうか。

*

歌会始のお題や、宮中歌会での御兼題は、いはゆる「題詠」の部に入るが、それらの制約のない御自由な発想のお歌も、かなり集録されてゐる。

風 鈴

南部鉄もちて作れる風鈴ふうりんに啄木たくぼくの歌書かれてありぬ 〔昭和四十八年〕

峠

峠たうげにてかの日見さけし浅間嶺あさまねの冴えきはまりし稜線りやうせんを思ふ 〔昭和五十年〕

桐の花

やがて国敗やぶるるを知らず疎開地そかいちに桐きりの筒花つづばなひろひるし日よ 〔平成四年〕

鰯雲

訪ひて来し村はコスモスの咲き盛り真昼の空に鰯雲浮く
〔昭和五十九年〕

ぶらんこ

おしなべて春とはなりしこの国にあまた揺れるむ子らのぶらんこ
〔平成元年〕

前女官長松村淑子氏は、御歌集の解説の中で、歌人岡井隆氏の次の言葉を記してゐる。

〈本来美智子妃の歌は、言葉に緩みがなく、思いに甘えがなく、適度の緊張感をもつてうたい切る方法である。〉

茲に見事な御歌集の上梓を心から寿ぐものである。

（平成九年七月謹記）

青き梅実る頃

皇后陛下の御歌を拝して

廣瀬 誠

語らざる悲しみ

年頭（平成十一年）の新聞紙上、皇后陛下の御歌三首を拝誦して感動し、熱涙滂沱として溢れ落ちた。

一首目は、昨年、天皇・皇后兩陛下がヨーロッパへ行幸啓された折の出来事に関連しての御作。兩陛下は全国各地で熱烈な歓迎を受けられたが、激しい抗議行動にも遭遇された。大戦中、日本の捕虜だった英国の旧軍人たちがプラカードを突きつけ、兩陛下に背を向けて、かつて日本軍から受けたといふ惨酷な仕打ちに抗議したのであった。兩陛下の御心痛のほど畏れ多く、いたいたしく拝察するのである。

この事件について、皇后陛下は英国人捕虜については言及を避けられ、かへって日本旧軍

人の心情に思ひを致され、

語らざる悲しみもてる人あらむ母国はこくは青き梅実る頃

と詠まれた。英国軍に捕はれた日本人虜囚もまた言語に絶する苦痛を嘗めさせられた。その体験は会田雄次氏の名著『アーロン収容所』に切々と書き綴られてゐる。しかし敗戦国日本の旧虜囚は黙々と悲憤を噛みしめるだけであつた。皇后さまはその母国の人の語らざる、語りえぬ悲しみを何よりも深く深く憶念された。そして母国日本は今青梅の季節であると歌ひ添へられた。日本人の悲しみと目に沁む梅の実の青い色とが渾然ひとつに融けて、ひしひしと読者の心を打つ。まことにたぐひなき御歌である。

この御歌は「旅の日に」と題され、「英国で元捕虜の激しい抗議を受けられた折、『虜囚』の身となつたわが国の人々の上をも思われて詠まれた御歌」と注がついてゐる。この注によつて御作歌の事情が理解され、御歌の強い悲しみが現実的歴史的迫力を帯びて迫ってくる。単なる旅愁の歌といふ誤解を避けるためにもこの注は不可欠である。それで皇后さまは特に注を施すことを希望され、宮内庁では御心を体してこの注をしたためたのであらう（平成十一年十月刊行の『道』ではその注を詞書としてをられる。一五二頁参照）。

しかるにこの注をカットした新聞がいくつかあつた。それどころか、この重要な御歌その

ものを掲載せぬ新聞もあった。遺憾至極であった。

うらら陽のなか

三首目は「うららか」と題された。

ことなべて御身おんみひとつに負おひ給ひうらら陽びのなか何思なにおほすらむ

注はつけられてゐないが、御歌の内容からも、「御身」「負ひ給ひ」「思す」の敬語の御使用状況からも、明らかに御夫君天皇陛下についての御詠作である。

天皇陛下の日本国象徴としての御任務、国事を担当したまふ御心事はかくも深く、かくも重い。春のうらら陽にも安らはせたまふことなく、日本国のすべてを御一身に集め、御一身に担はれて深思したまふのである。その事実を、天皇陛下に最も身近な御存在であられる皇后さまがしみじみ実感され、切実なお言葉で詠嘆されたのである。うららかな春の光を浴びて大君の御姿は一層沈痛、崇高そのものである。大君の念々連持の御軫念ごしんねんが目に見えぬ力となつて日本を支へてゐるのである。

「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行ひ、国政に関する権能を有しない」といふ日本国憲法の条文を浅く解釈して、象徴とは内閣の助言のもと儀式その他に形式

的に臨むだけの単なる飾り物のやうに誤解する人もあるが、この皇后さまの御歌は、天皇の御存在意義を何よりも重々しく切々と示された。実に実に貴重な御一首である。

青年の力

便宜上、順序は逆になったが、二首目。

ゴール守るただ一人なる任にして青年は目を見開きて立つ

皇后さまはサッカー・ワールド・カップのゴールキーパーに注目されて印象強く歌はれた。この熱烈な競技の勝敗を決する重要な責任者として、ただ一人ゴールを死守する青年の「目を見開きて立つ」緊張した姿である。

ここで「ただ一人なる任にして」と詠まれたお言葉は、三首目の「ことなべて御身ひとつに負ひ給」ふ天皇陛下の御姿にひびきあふ。あたかもサッカーの御歌が「うららか」の御歌の前奏曲の如くである。当然、別時点での御作であらうけれども、このやうに配列されたところに特別のお気持ちがおありでないかと思ふのである。

なほ「青年は目を見開きて立つ」の御歌は、平成十一年歌会始での御詠「雪原にはた氷上せつげんにきはまりし青年の力ちから愛あなしかりけり」にひびき、これからの日本を担ひゆくべき「青年」

のたくまじき力に寄せられた皇后さまの並々ならぬ御期待を思ふのである。

両陛下の御歌のひびきあひ

また皇后さまは日本傷痍軍人会創立四十五周年に際し、「復興の国の歩みに重ね思ふいたつきに耐へ君らありしを」とお詠みになられ、大戦で傷ついた人たちの多年の苦労を懇ろにねぎらはれた。「君ら」の語にこめられた御心情はまことに深く切である。

このとき陛下は「国のため尽くさむとして戦に傷つきし人のうへを忘れず」と切々たる御製を賜った。「うへを忘れず」と無量の思ひをこめて強く言ひ切られたお言葉と、「君らありしを」と優しく余情を残されたお言葉、相俟って傷痍軍人の上に慈雨の如くふりそそぐ。

皇后さまの御歌の「復興」の語は、新春発表された天皇陛下御製の「五年の昔の禍を思ふとき復興の様してみてうれしき」の「復興」とひびきあふ。戦後五十年の国のあゆみと五年間の震災後の営みで「場」は異なるが、さまさまの災禍に屈せず、立ち直ってゆく日本及び日本人の生命力をひたひたと感じになつての御表現である。

また皇后さまは「いたつきに耐へ」と歌はれ、天皇陛下は歌会始の御製で「公害に耐へ来しもみ」を歌はれた。「耐へ」の語が両陛下の御歌に大きなアクセントをつけてゐる。皇后さまは公務過重のため健康を害された時期もおありであったが、これに耐へて、かくも力強

い御歌をお詠みなさるまで回復された。両陛下の御職責はまさに「耐へ」そのものであると恐察申し上げるのである。

昭和天皇と辞書

両陛下の御歌の「ひびきあひ」から、ふと連想するのは、昭和五十一年、昭和天皇は、

夕餉をへ辞書をひきつつ子らと共にしらべものすればたのしくもあるか
〔昭和五十一年〕

と詠みたまひ、皇后陛下（現在の皇太后陛下）は、

めづらしき草をたをりてみつくゑにかざれば辞書にてをしへたまへり
〔昭和五十一年〕

とお詠みになった（いづれも翌昭和五十二年新春公表された）。

世に読書をテーマとした短歌はかなりあるが、辞書を引くことを詠んだ歌はあまりないであらう。昭和天皇は御子様ともども辞書を引いて調べ物なさるのを楽しみとされ、それを御歌に詠み込まれた。皇后様は名も知らぬ珍しい草をい活けて陛下の御机みつくゑに飾られたところ、昭和天皇は辞書を開いてその草の名を皇后様に教へられたのである。

昭和天皇は生物学者にましまし、植物の御著書も数々おありであるから、その草が何であ

るか一目でお分かりになったであらうが、御自身の知識だけでお教へになるのではなく、辞書（広義の辞書。この場合多分植物図鑑）を開き、「ほら、ここに出てゐる、これだよ」といった具合にお示しになったのであらう。常に客観的資料を尊重なさる謙虚な御姿勢である。

昭和天皇とその御後の「辞書」をとりあげられての両首の「阿吽あうんの呼吸」ともいふべきものに当時私はいたく感動したのであったが、いま今上陛下と皇后陛下が「復興」「耐へ」についての呼吸を合はせられたやうな御詠を拝し、二十余年前の感動を思ひ起こし、感激を新たにするのである。

皇室伝統のしらべ

近時、歌人としての皇后陛下、文学者としての皇后陛下を高く評価する記事がしばしば新聞等に見え、喜ばしいが、肝腎なことが一つ抜けてゐるやうに私には思はれる。

皇后さまは、はじめ皇太子妃、現在皇后のお立場で、今上陛下からも先帝昭和天皇からも深い感化をお受けになってその御歌境、御歌調を磨き上げられた。すぐれた歌人の天分が皇室の御いぶきの中で滋味をいや増し、かくもかくはしく開花された。単なる歌人でなく、皇室の歌人にまします。その御作品には皇室伝統の美妙なしらべが息づいてゐる。この重大な一点を見落してはならないと思ふのである。

（平成十一年三月謹記）

今上天皇のお歌について最近思ふこと

夜久 正雄

(一)

今上天皇は、平成七年「歌会始」の「歌」の御題に、次のお歌をお示しになられた。

歌

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

このお歌は、一語一句みな今日のわれわれ国民の使つてゐる日常語をお使ひになつてをられる。上の句の「過しし」は「過した」、「つつ」は「ながら」の文語的表現である。上の句についてはすぐ理解できる。「歌の調べの流るる」は、歌会始の折に、独特の調子で和歌の朗詠されることを知つてゐれば、これもすぐ理解できる。「聞く」も勿論、日常語である。

そこで全体としてみると平凡、ありのままの感じで、私などとはじめ読んだ時にはごく自然なお歌といふ感じで、それほど心に迫るものを覚えなかった。

しかし、後、改めて何回か読むうちに、何とも大きな、実に悠大なお歌と拝されるやうになった。

「歌の調べの流るるを聞く」といふこの「聞く」といふことばで、第一句からの調子をしつかり押さへていらつしやる。「を聞く」の一句に万鈞の重さを感じられる。

人々の声々を聞くといふその「聞く」といふ行為は深い深い意味を持つ。古語に、天皇統治の意味を、「まつりごと聞こしめす」と云ふ。「お聞きなさいます」の意味である。これは天皇統治・政治の意味を日本語で示した「知らす」に通ふコトバである。

さう考へてまたこのお歌を拝すると、御主催の宮中行事「歌会始」にお臨みになられたその時の天皇のお心をおのべになられた——そのお歌の中に、つきつめて言へば、天皇の御存在の意味をもお示しになられたやうに拝される。

「国民統合の象徴」といふ「国民統合」の事実が、国民の歌をお聞きくださるといふそのお歌の中に拝されるのである。

戦死者がその最期の瞬間に、「お母さん！」と叫び、「天皇陛下万歳！」と叫んだのは、「陛下の御命令でかく戦ひました、お聞きとどけくださいませ！」といふ「かへり言かへりごん」であ

つたにちがひない。天皇に対する絶対の信頼をよせての言葉であつたにちがひない。
この歌会始の皇后陛下のお歌は次のお歌である。

歌

移り住む国の民とし老いたまふ君らが歌ふさくらさくらと

「移り住む国の民とし老いたまふ」——「し」は強意の助詞——と、異国の民として老いゆく運命の人々に限りない同情をよせたまひつつ、その人々の声あげてうたふ望郷の歌「さくらさくら」に、敗戦日本の運命にたへつつ望郷の心をうたふ人々に深い深い同情をよせたまふ、慈愛あふるるみうたと拝される。

(二)

最近の今上天皇のお歌には、私は昭和天皇のお歌に拝したと同じやうな、戦慄する名歌と拝するお歌が数多く拝される。

在ベルー日本大使館公邸占拠事件

我が生れし日を祝ひたる集ひにてとらはれし人未だ帰らず
〔平成九年〕

私などは「天皇誕生日」と言ひ慣れてしまつて、「天皇誕生日祝賀の会」と何か形式的に考へてしまつてゐたが、天皇さまは、「我が生れし日を祝ひたる集ひ」と、御自分のこととして受けとられたのである。このお歌をよんで私は慄然とした。己が心の至らぬを反省した。後に、皇后陛下が、次のやうにお詠みになられたのは、かういふことかと悟らされた。

うららか

ことなべて御身ひとつに負ひ給ひうらら陽のなか何思すらむ
〔平成十年〕

次のお歌を読んだ時も、私は戦慄した。

對馬丸見出ださる

疎開児の命いだきて沈みたる船深海に見出だされけり
〔平成九年〕

詳しい解説は第一部にゆづる（一四二頁参照）。「疎開児の命いだきて沈みたる」（多勢の疎開児の命を抱いたまま沈んでゐる船）とおよみになる「いだきて」の一語に、戦禍を逃れさせようとして疎開児を送り出した両親たちの願ひ、それを受けて、疎開児たちを助けようとして、最後には恐らく文字通り子どもたちを両腕に抱きかかへて沈んでいったであらう乗組員たちの心、さういふ思ひが「いだきし」といふ言葉にこめられてゐる。そして、「船」と、

ちよつと休止があつて、「深海しんかいに見いだされけり」とつづく。万感の悲しみのこもる慰靈の絶唱と申し上げるほかない。

「疎開」といふ言葉は、天皇・皇后両陛下ともに経験なされたことである。大東亜戦争は、皇室も国民とともに戦はれたのである。「疎開」については両陛下の御体験のお歌もある。

そのほか数々のお歌があるが、次のお歌も私の愛誦するお歌である。

御所に帰らむとして

宮殿を出づれば暮るる冬空に月と明星な並みて輝く　〔平成九年〕

「月と明星並みて輝く」は、歌語として他に私は読んだことがない。ありのままにして全き、深い深いお心のこもった御表現と仰ぎまつる。

(三)

昭和天皇さまは、毎年恒例の「歌会始」をはじめ国民体育大会ならびに植樹祭への御出席を欠かされることはなかった。そして、その折々の御感想をお歌に詠んで、主催の府県民にお示しにられた。

今上天皇さまはこれらをお引き継ぎになられるとともに、新たに「全国豊かな海づくり大会」の行事への御出席を御行事としてお加へになられた。天皇さまは魚類の研究を専門にする生物学者でもあられる。これも父天皇の生物学をお引き継ぎになられたのであらうか。天皇さまは皇太子時代に次の名歌を詠んでいらつしやる。

紺青

みなべり
舷に見入る朝海の紺青をそうだがつをのつらぬき走る
〔昭和三十七年〕

天皇さまとして「全国豊かな海づくり大会」御出席の折の、名歌が多く拝誦されるのも当然のことである。

私の特に愛誦するお歌は次のお歌である。

荒波の寄せ来る海に放たれしひらめはしばし漂ひ泳ぐ
〔千葉県、平成四年〕

「ひらめはしばし漂ひ泳ぐ」の一句に、ひらめの今後のいのちの行方に対する作者の深い御慈愛を感じさせられて心に沁み入る。

手渡しし稚貝稚えびを手を持ちて若き海人港出で行く
〔山口県、平成六年〕

困難の多い漁業に携る若い漁民と、陛下との間に、ことばにはならぬ深い深い心の通ひあひが感じられるやうで、何ともありがたい。

珠洲すずの海に放ちし鯛の稚魚あまたいづれの方かたを今泳ぐらむ
〔石川県、平成八年〕

白浜に宿りし朝あさの海うみの面おもてを旗なびかせて漁船いさりぶね行く
〔和歌山県、平成九年〕

かういふ御製を拝誦すると、私は勇気がわいてくる。天皇陛下のお歌には、自然災害をいたませられるお歌が多く、いまの時代に生きるもののつとめを思はせられることが多い。魚類をおよみになる時は、何か少しお心がおなごみになられるやうにも拝される。また魚類に托して自然に国民のひとりひとりにおよびかけただいてゐるやうな感じもして、勇気がわいてくるのである。

海外旅行も天皇さまのおつとめで、われわれのやうななぐさめごととは異なるのは言ふまでもないが、宮殿をはなれて広く大きな世界に出られてのお歌で、すばらしいお歌が多い。

ブラジリア

赤土のセラードの大地続く中首都ブラジリア機窓に見え来く
〔平成九年〕

デンマーク訪問

デンマークの君らと乗れる船の上にクロンボー城の砲声響く [平成十年]

今年の「歌会始」にいただいたお歌は、次のお歌である。

青

公害に耐へ来しもみの青葉茂りさやけき空にいよよのびゆく [平成十一年]

われらまた、時の流れに弱く衰へた心をふり起して、「公害に耐へ来しもみ」に負けず
に、御製を仰いで奮闘しようではないか。
(平成十二年八月謹記)

平成の御代・略史 — 本書関連略年表 —

年	宝算 (満年齢)	御事跡・主要出来事
昭和64年	56歳	1・7 昭和天皇崩御、皇太子明仁親王殿下が第百二十五代天皇に践祚
平成元年		1・8 「平成」の新元号施行 1・9 即位後朝見の儀 2・15 ソ連、アフガニスタンから撤退完了 2・24 昭和天皇の大喪の礼 4・1 消費税導入開始 4・29 「みどりの日」制定記念式典にご臨席 6・2 天皇陛下、皇居内の水田で初めてお田植を 6・4 天安門事件、中国政府が民主化運動を弾圧し国際的非難を受ける 8・4 両陛下、皇居で即位後初めて内外記者団に対しご会見 8・15 両陛下、全国戦没者追悼式に初めてご臨席 9・9 両陛下、広島県原爆死没者慰霊碑に行幸啓ご親謁 10・19 靖國神社御創立百二十年記念大祭

	平成3年	平成2年
	58歳	57歳
9・26	11・17	11・9
両陛下、タイ・マレーシア・インドネシアご訪問（10・6）	湾岸戦争勃発	ベルリンの壁、崩壊
8・19	11・22	1・7
ソビエト連邦、解体	大嘗祭（23日）	昭和天皇一年祭
7・10	11・18	2・6
両陛下、雲仙普賢岳の被災地をご慰問	天皇陛下、ご即位をお祝ひする宮中一般参賀を受けられる	天皇陛下が「昭和天皇をお偲びする歌会」ご主催
6・3	11・17	6・29
長崎県雲仙普賢岳で大規模火砕流発生	政府後援の皇居前広場国民祝賀式、両陛下、二重橋より提灯でお応へ	礼宮文仁親王殿下、川嶋紀子様とご成婚。秋篠宮家創設
4・27	11・12	7・1
海部俊樹首相、南アジア歴訪で「謝罪外交」	即位の礼	九州中・北部の集中豪雨
4・26	8・2	8・2
ベルシヤ湾に海上自衛隊の掃海艇派遣	イラク軍クウェートに侵攻、在留邦人出国できず人質に	
2・23		
浩宮徳仁親王殿下の立太子礼		

平成4年

59歳

9・27 台風19号、15府県で死者44人、行方不明6人

10・23 行幸啓の折、ご訪問県の他に隣県一県へお立ち寄りになることが決定

1・17 宮澤喜一首相、韓国を訪問し「慰安婦問題」で謝罪

2 } 中国がご訪中のお言葉に謝罪の意を入れるやう要求。ご訪中反対の国民世論高まる

6・5 P K O法成立

7・2 地方事情のご視察のみを目的とする行幸啓始まる（神奈川県）

7・25 スベイン・バルセロナにて第25回オリンピック開催（8・4）

9・17 カンボジアに自衛隊のP K O部隊を派遣

9・24 両陛下、日本遺族会創立四十五周年記念式典にご臨席

10・23 両陛下、中国ご訪問。日中間の過去について「深く悲しみとすると

ころ」とお言葉（10・28）

10・23 米科学雑誌「サイエンス」に「日本の科学の初期開拓者」と題する

英文の科学史論文をご寄稿

12・28 日本遺族会に御製下賜

4・23 両陛下、沖縄県に初の行幸啓（4・27）

5・14 両陛下、埼玉県護国神社に行幸啓（天皇として初めての護国神社ご親謁）

6・9 皇太子殿下、小和田雅子様とご成婚

平成5年

60歳

	平成6年	61歳
7・12	北海道南西沖大地震、死者行方不明242人	
7・27	両陛下、北海道南西沖大地震の被災地・奥尻島をご慰問	
8・4	河野洋平官房長官「慰安婦の強制連行容認の談話」(後の禍根となる)	
8・9	非自民6党による細川連立内閣誕生	
8	細川護熙首相の「侵略戦争」発言(8・10)が波紋を呼ぶ	
8・9	長雨や低温・台風で米の作柄、戦後最悪	
9・3	両陛下、イタリア・ベルギー・ドイツご訪問(19・9・19)	
10	伊勢神宮の式年遷宮「遷御の儀」(内宮10・2、外宮10・5)	
10・20	皇后陛下、マスコミ報道に対する異例のお言葉ご発表。その直後、お倒れになりご失語	
1・7	昭和天皇五年祭。武蔵野陵で天皇陛下が御告文を奏上	
2・12	両陛下、戦死者慰霊のため硫黄島に行幸啓	
3・4	衆議院の小選挙区比例代表並立制導入を決定	
3・29	両陛下、式年遷宮を終へた伊勢神宮にご親拝	
6・10	ご訪米問題で外務省による皇室外交の政治利用が問題化する	
6・10	両陛下、アメリカご訪問(16・26)	
6・30	自民・社会・さきがけ連立の村山富市内閣発足	

平成8年	平成7年
63歳	62歳
<p>7・25 両陛下、栃木県護国神社に行幸啓ご親謁</p> <p>7・20 堺市小学校で発生したO-157集団中毒で6千人が被害</p> <p>6・28 次年度使用の中学校歴史教科書全部に「従軍慰安婦」記述が載り問題化</p> <p>6・7 天皇陛下、前庭神経炎による目眩でお倒れ</p> <p>2・10 北海道の豊浜トンネルで岩盤崩落事故</p> <p>12・18 両陛下、政府主催「終戦五十年を記念する集い」にご臨席</p>	<p>10・2 両陛下、広島アジア大会開会式にご臨席</p> <p>10・2 両陛下、フランス・スペインご訪問（10・14）</p> <p>1・17 阪神・淡路大震災、死者六四二五人、家屋全壊11万棟、戦後最大の被害</p> <p>1・31 両陛下、阪神・淡路大震災の被災地をご慰問</p> <p>3・20 オウム真理教による地下鉄サリン事件発生</p> <p>6・9 衆議院、「戦後五十年の国会決議」を強行可決</p> <p>6・27 天皇陛下、大腸ポリープ切除のご手術</p> <p>7・26 両陛下、長崎、広島に被爆死者慰霊の行幸啓（7・27）</p> <p>8・2 両陛下、沖縄、東京に戦歿者・被災死者慰霊の行幸啓（8・3）</p> <p>8・8 両陛下、日本遺族会に宸筆の御製と染筆の御歌を下賜</p> <p>8・15 天皇陛下、全国護国神社終戦五十年臨時祭に幣帛料を下賜</p> <p>村山首相、「戦後五十年の談話」発表</p>

平成10年	平成9年
65歳	64歳
7・29	7・29
	橋本龍太郎首相、靖國神社参拝
12・6	12・6
	長野県小谷村の災害復旧工事現場における土石流災害発生
12・18	12・18
	ペルーの日本大使公邸襲撃事件（翌年4月22日解決）
1・2	1・2
	日本海でロシアタンカー重油流出事故発生
4・2	4・2
	最高裁、愛媛県玉串料訴訟違憲判決
4・10	4・10
	皇后陛下御歌集『瀬音』刊行
5・15	5・15
	沖繩返還二十五周年
5・30	5・30
	両陛下、ブラジル・アルゼンチンご訪問（6・13）
6・28	6・28
	神戸小学生連続殺傷事件で中学生を逮捕
7・2	7・2
	皇后陛下、南米ご訪問後、帯状ヘルペスご発病
8・19	8・19
	両陛下、石清水八幡宮と大覚寺に行幸啓ご親謁
9・25	9・25
	両陛下、日本遺族会五十周年式典にご臨席
10	10
	会社倒産率、前年より20%増加
12・12	12・12
	戦時中、米軍潜水艦に沈められた学童疎開船「對島丸」発見される
1・14	1・14
	橋本首相、英紙「サン」に謝罪文寄稿
1・28	1・28
	栃木県黒磯市で中学生が校舎内で教師を殺害。その後、中学生による
2・7	2・7
	殺傷事件続出
	両陛下、長野冬季オリンピック開会式にご臨席

平成11年

66歳

- 4・10 「昭和の日」推進議員連盟が発足
- 4・14 皇室関連文書開示の仙台地裁判決
- 5・22 外務省、英紙に掲載の天皇陛下御写真問題で「遺憾の意」を伝達
- 5・23 両陛下、イギリス・デンマークご訪問（6・5）
- 6・10 サッカー・ワールドカップに日本初出場（7・12）
- 7・25 和歌山市内の夏祭りで毒入りカレー事件が発生、4人死亡
- 7・31 総務庁、6月の完全失業率は4.3%と過去最悪更新を発表
- 8・31 北朝鮮が弾道ミサイルを発射、一部が三陸沖へ着弾
- 9・21 皇后陛下、インド・ニューデリーの第26回国際児童図書評議会世界大会の基調講演にビデオでご参加
- 10・7 韓国の金大中大統領を歓迎する宮中晩餐会
- 11・26 両陛下、戦傷病者特別援護法制定三十五周年・財団法人日本傷痍軍人会創立四十五周年記念式典にご臨席
- 11・26 中国の江沢民国家主席を歓迎する宮中晩餐会
- 11・28 「天皇陛下ご即位十年をお祝いする国民の集い」が開催
- 1・7 両陛下、「昭和天皇十年式年祭の儀」で武蔵野陵ご親拝
- 1・19 天皇陛下、第145回国会開会式で議事堂の中央階段を22年ぶりにご利用
- 3・24 北大西洋条約機構（NATO）軍、ユーゴ空爆開始

4・10	両陛下ご成婚四十周年の「ルビー婚」をお祝ひする音楽会が開催
4・11	石原慎太郎氏、東京都知事に当選
5・24	新しい日米防衛協力のための指針(ガイドライン)関連法案が成立
6・18	皇后陛下の御父上、正田英三郎氏逝去
8・9	国旗・国歌法が成立(13日、公布・施行)
8・15	両陛下ご臨席の第54回全国戦没者追悼式で国歌「君が代」を初めて斉唱
8・17	トルコ西部大地震発生、死者一万五千人余
8・19	両陛下、北海道南西沖地震の被災地、奥尻島を6年ぶりにご慰問
9・21	台湾大地震発生、死者二千三百人余
9・29	陛下、皇居内の水田でお稲刈り
10・4	両陛下、福島県で開催の全国豊かな海づくり大会にご臨席
10・15	天皇陛下御即位十年記念記録集(宮内庁編)『道』刊行
10・19	靖国神社御創立百三十年記念大祭
11・12	両陛下、政府主催の「御即位十年記念式典」にご臨席
	皇居前広場で「御即位十年をお祝いする国民祭典」が開かれる。両陛下、二重橋より提灯でお応へ

あとがき

宝辺 正久

本書が刊行されるに当っては、全執筆者が(社)国民文化研究会会員であり、原文の殆んどがその機関誌、月刊『国民同胞』に掲載されたものでありますので、その誌上に、長年「天皇御製・皇后御歌」を拝誦した感想文や研究録が書き継がれてきた次第を、その間の同誌編集担当であった私から若干述べさせていただきます。

「われわれの御製・御歌研究の道統」について夜久正雄先生が本書の「はしがき」に触れてをられるのは短い摘記ですが充分注目していただきたく思ひます。私たちは、天皇のお作りになった和歌を和歌として味はひ、作者のお気持、お考へをお偲びすることが、わが国の古い歴史伝統「しきしまの道」を学ぼうとする者にとってこよなく大切なことだと思ってきました。夜久先生は先師の学統を継いで『歌人・今上天皇』（昭和三十四年）を書いたと言つてをられますが、この本を繙いて御製の味はひ方を学び、歌を作らうとする心を振ひ起され

たといふことが、若い人たちを含めた私たちの共通の経験となっております。

また『歌人・今上天皇』を読むと、戦後間もない頃から、富山の廣瀬誠さんとの間に、昭和天皇・明治天皇の御製に関する研究が相互に発表され、それを読めば互ひに補足反応する同信協力の美しい友情が感じられます。『国民同胞』（昭和三十六年十一月創刊）にはじめて元且公表の御製を謹掲して夜久先生の文章を併載したのは昭和三十八年二月号でしたが、その後毎年、拝誦の感想を夜久さんが書かれたり、廣瀬さんが書かれたりしたのも、さういふ同信協力に支へられたものでした。五十一年からはさうした共同研究の輪を広げようと、同人会員が毎年交替で次々に十人が拝誦感想文を担当するなどして、やがて昭和の最後を迎へることになりました。

今上天皇もまた昭和天皇の思召しを受け継がれ、年頭に御製と皇后御歌を公表せしめられ今日に至つてをります。敗戦と戦後の長い昭和時代を経て、新しい平成の御代に臨まれる大御心を御製に仰いで、私たちは私たちの心の中に祖国の現実を味はひ確かめることができず。平成になってから、『国民同胞』には六人の同人会員が感想文を認めました。

ここに今上天皇御即位十年奉祝の意をこめて、両陛下を敬慕する一念に出た文章を公刊できるときは感謝に堪へません。

ご協力頂いた関係各位、殊に展転プロダクション代表・柚原正敬氏のご助力に心から御礼

申しあげます。

最後に、下記の編集担当者の労を多とします。

國武 忠彦 昭和音楽大学講師、本会常務理事

今林 賢郁 新日本製鉄(株)プラント事業部機械製造素材部次長(囑託)、本会理事

磯貝 保博 (株)講談社資料センター室長、本会理事

稲津利比古 (株)竹中工務店CM本部部长、本会理事

山口 秀範 本会理事兼事務局長

平成十一年十月二十日

(社)国民文化研究会副理事長

初出一覧

第一部

- 平成2年 小柳陽太郎 「国民同胞」平成2年2月10日号
平成3年 小柳陽太郎 「国民同胞」平成3年2月10日号
平成4年 廣瀬誠 「国民同胞」平成4年2月10日号
平成5年 澤部壽孫 「国民同胞」平成5年2月10日号
平成6年 澤部壽孫 「国民同胞」平成6年2月10日号
平成7年 小柳左門 「国民同胞」平成7年2月10日号
平成8年 小柳左門 「国民同胞」平成8年2月10日号
平成9年 宝辺矢太郎 「国民同胞」平成9年2月10日号
平成10年 宝辺矢太郎 「国民同胞」平成10年2月10日号
平成11年 折田豊生 「国民同胞」平成11年2月10日号

第二部

- 皇太子殿下を仰ぐ 小野吉宣 「国民同胞」昭和62年2月10日号～7月10日号
皇太子殿下と沖繩 小柳陽太郎 「国民同胞」昭和62年11月10日号
皇室の風儀 小柳陽太郎 「国民同胞」平成元年4月10日号
「大孝」の大御心 廣瀬誠 「祖國と青年」平成3年2月号
皇后陛下御歌集『瀬音』を読む 山田輝彦 「国民同胞」平成9年7月10日号
青き梅実る頃 廣瀬誠 「祖國と青年」平成11年3月号
今上天皇のお歌について最近思ふこと 夜久正雄 書下し 平成11年8月

執筆者略歴 [年齢順]

夜久 正雄 (やく まさを)

大正4年、東京都生まれ。東京帝国大学文学部国文科卒。亜細亜大学名誉教授。著書に『歌人・今上天皇』『古事記のいのち』『日本文学における魂の行方』。共著に『短歌のすすめ』『短歌のあゆみ』。共編に『日本思想の系譜』他。

山田 輝彦 (やまだ てるひこ)

大正10年、北九州市生まれ。九州帝国大学文学部国文科卒。県立若松高校教諭を経て福岡教育大学教授、九州女子大学教授を歴任。著書に『明治の精神—近代文学小論』『夏目漱石の文学』。共著に『短歌のすすめ』『短歌のあゆみ』他。

廣瀬 誠 (ひろせ まこと)

大正11年、富山市生まれ。国学院大学中退。富山県立図書館館長、富山女子短期大学教授を歴任。著書に『立山と白山』『萬葉集—その漲るいのち』。歌集に『坂の沼琴』。共編に『川出麻須美遺稿集—天地四方』他。

小柳陽太郎 (こやなぎ やうたらう)

大正12年、佐賀市生まれ。東京帝国大学文学部入学後、学徒出陣。九州帝国大学文学部転学卒。福岡県立修猷館高校教諭、九州造形短期大学教授を歴任。著書に『戦後教育の中で』。編著に『歴代天皇の御歌』他。国民文化研究会副理事長。

澤部 壽孫 (さはべ としつぎ)

昭和16年、長崎県諫早市生まれ。長崎大学経済学部卒。日商岩井(株)入社、ガス石炭本部副本部長を経て日本インドネシアLNG(株)取締役 (在ジャカルタ)。短歌通信集を編集発行 (月刊)。国民文化研究会常務理事。

小野 吉宣 (の よしのぶ)

昭和22年、福岡県鞍手郡生まれ。西南学院大学文学部卒。福岡県立嘉穂高校教諭 (英語)。国民文化研究会理事。

小柳 左門 (こやなぎ さもん)

昭和23年、福岡市生まれ。九州大学医学部卒。医学博士。アイオワ大学留学。九州大学医学部助教授を経て国立病院九州医療センター臨床研究部長。

折田 豊生 (をりた とよお)

昭和25年、鹿児島県知覧町生まれ。熊本大学工学部卒。熊本市役所勤務。国民文化研究会理事。

宝辺矢太郎 (たからべ やたらう)

昭和28年、山口県下関市生まれ。九州大学理学部卒。山口県立下松高校教諭 (数学)。国民文化研究会理事。

平成の大みうたを仰ぐ

平成十一年十一月十二日 第一刷発行
平成十二年 六月 九日 第二刷発行

編者 (社)国民文化研究会

理事長 上村 和男

発行人 相澤 宏明

発行 展 転 社

〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36-301

TEL 03-(三三一五) 〇七二一

FAX 03-(三三一五) 〇七八六

振替 〇〇一四〇一六一七九九九二

印刷 文昇堂
製本 美行製本

© KOKUMINBUNKAKENKYUKAI 1999, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は送料小社負担にてお取替致します。

定価「本体＋税」はカバーに表示してあります。

ISBN4-88656-173-x C0092

社団法人 国民文化研究会

昭和31年(1956)、九州で発足。昭和39年(1964)3月、文部大臣より社団法人の認可を受ける。戦前の「日本学生協会」「精神科学研究所」の道統を受け継ぐ本会は、様々な職業の有志会員によって構成され、会員相互の研究活動や出版活動等を通じて、戦後の学問的・思想的混乱を是正し、わが国の歴史・文化に根ざした国民生活の確立を目指す。ことに、44回を数へる「夏季合宿教室」は小林秀雄、福田恆存氏をはじめ当代一流の講師による講義や古典の輪読、更に全員が短歌創作・相互批評を経験する研修を行い、学生・青年層の健全な育成に大きく寄与してゐる。

〒150-0011

東京都渋谷区東1-13-1-402

TEL.03-5468-6230 FAX.03-5468-1470

ホームページ・アドレス <http://come.to/kokubunken>

昭和天皇のおほみうた

不・歌道会代表
鈴木正男

●公表された全御製を収め、それぞれの背景を解説しつつ、そのご生涯をたどる日本で唯一の御製集。3500円

昭和天皇の御巡幸

鈴木正男

●戦死者の遺族・引揚者・戦災者を慰め、戦後復興の原動力となった全国御巡幸の全軌跡を辿る力作。2800円

昭和天皇をお偲びして

新樹会代表幹事
末次一郎

●青少年育成や北方領土返還運動で中心的役割をになう著者が体験した昭和天皇・今上陛下のご聖徳。1600円

皇室をめぐる国会論議

國學院大学教授
大原康男

●国会の全議事録から皇室関係だけを收拾して事項別に整理、問題点がすぐわかる画期的な辞書仕立。3800円

平成の天皇論

大原康男

●平成の御代になり、天皇を巡る論議のどこに未解決の問題点があるのかを提示した待望の天皇論集。2233円

国体思想史

法学博士
里見岸雄

●戦前、「国体に対する疑惑」で衝撃を与えた著者が、日本の国体観を古代から昭和まで辿った力作。7767円

「深い泉の国」の文化学

日本思想史学会会員
山内健生

●元号・祝祭日・日の丸・君が代などを通して日本の思想と文化を明らかにした青年のための日本論。1600円

歴史から見た日本文明

國學院大学講師
高森明勅

●最古の文字、建國伝承、伊勢神宮、天皇など日本の個性を振り返りつつ描く、未来に向けた日本像。1900円

